母性と妖婦・研究號

精神分析

★第4巻・第2號 ★ 昭和11年3月・4月★

昭和八年七月七日第三種郵便物認可・昭和十一年二月廿五日印刷納本・昭和十一年三月一日發行・隔月一回一日發行

主要項目

詳細目次は巻頭に

T・I・P・A・ VERLAG

東京精神分析學研究所出版部

理想の家族
（マンスフィールド短篇集）

岩倉具榮譯

（四六版函入美本 口繪二葉 定價一圓八十錢 送料共）

德富蘇峰先生の批評

若し才媛の二字が、尤も適當なる意味にて當篏まるものを求めば、マンスフィールド女史（Katherine Mansfield）の如き、正に其の一人であらう。彼女は實に才の美なるばかりでなく、亦た女性らしき女性であつた。

或る意味では、飜譯は創作よりも困難である。殊に女史の文章は、纖細にして色澤あり、香味あり、陰翳あり、濃淡あり。而して更らに言外の餘韵がある。之を日本語に飜譯して、女史を滿足せしむる丈の伎倆は、到底何人にも期待し易からざるところ。

今ま岩倉具榮君――岩倉具視公の曾孫、現公爵――の飜譯したる本書を一讀すれば、必らずしも我等の理想通りの出來榮えとは云はぬが、我邦文壇の水準から見れば、先づ其の好成績を嘉す可き一と云ふを遲疑しない。聊か生硬の嫌ひはあるが忠實であり、且つ忠實ならんことを勗めたる點は、十分に受取らるゝものがある。

特に面白きは、附錄第一の「カェザリン・マンスフィールドの生涯」である。此れは彼女の夫ミドルトン・マリー（J. Middleton Murry）の作にして、流石に能く彼女の眞相を描いてゐる。

彼は彼女を、同時の作家ロレンス（D. H. Lawrence）と對照して、

ロレンスに比ぶれば、カェザリンは、その達成の度が實際小さかつた。而もカェザリンには、ロレンスが最後まで持たなかつた性質があつた。それは靜穩明朗である。そして吾々はその靜穩明朗は、「凡ゆることにも拘らず」平和であつた心から來てゐることを知つてゐる。

との評は、未だ必らずしも其の所好に阿ねるものではあるまい。

本書附錄の二は、「作品分析鑑賞案內」と題して、各短篇の各個に就てそれ〲解題を作してゐる。それが何れも寥々たる文句ではあるが、能く作者の旨趣の存する所を闡明してゐる。而して中には餘りに穿ち過ぎはしないかとの心配がある程である。

彼女の日誌、彼女の書簡集、何れも彼女の小說と與に離る可らざるもの。其の日誌の如きは、尋常作家の二百卷の小說にも値ひすとの好評を博した程のもの。希くは異日、本書の譯家に於て、之が飜譯を試みられんことを。（昭和十年十二月廿八日、東京日々新聞、及び大阪毎日新聞所載）

東京精神分析學研究所出版部

本鄕區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

本研究所出版書及び取次書一覽表

フロイド精神分析學全集……………（送料各十二錢）春陽堂

第一卷・夢の註釋（1圓50錢）	第二卷・日常生活（1圓70錢）
第三卷・社會宗教文明（1圓80錢）	第四卷・快不快原則（1圓50錢）
第五卷・性慾論（1圓70錢）	第六卷・藝術論（1圓90錢）
第七卷・トーテム（1圓80錢）	第八卷・療法論（1圓90錢）
第九卷・戀愛論（1圓80錢）	第十卷・精神分析總論（2圓）

精神分析合本 第一卷（昭和八年度）（上下各册とも賣切れ）……當出版部

精神分析合本 第二卷（昭和九年度）（上下各册2圓50錢 送料共）‥當出版部

精神分析合本 第三卷（昭和十年度）（全一册3圓 送料15錢）……當出版部

文藝と心理分析 長谷川誠也著（2圓70錢 送料12錢）‥‥春陽堂

文藝思潮論 長谷川誠也著（2圓 送料共）‥‥博文館

精神分析概論 大槻憲二著（80錢 送料6錢）‥‥當出版部

理想の家族（マンスフィールド短篇集）
岩倉具榮譯（1圓80錢 送料共）‥‥當出版部

モリス書誌 ヰリアム・モリス研究會編（40錢 送料2錢）‥‥丸善株式會社

精神分析雜稿 大槻憲二著（2圓 送料10錢）‥‥岡倉書房

精神分析讀本 大槻憲二著（2圓 送料10錢）‥‥岡倉書房

精神分析・社會圓滿生活法
大槻憲二著（1圓 送料6錢）‥‥人生創造社

ドストイェフスキーの精神分析
平塚義角譯（近刊）

戀愛性慾の心理とその分析處置法
大槻憲二著（近刊）‥‥當出版部

★春陽堂出版書は研究所宛申込の方に限り一割引。
★雜誌は創刊號及び第一卷第五號以外は各號單册殘本多少あり。一部定價50錢（送料共）

本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七　東京精神分析學研究所出版部

母性と妖婦研究號・內容目次

《精神分析》第四巻・第二號

隔月刊行誌
定價五十錢
送料四錢

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料ナシ

昭和十一年三月 性格改造研究號 第四卷第一號

東京精神分析學研究所 本郷區動坂町三二七 振替東京七八八一七番

何と、美しい場面ではないだらうか。

『椿姫』の妖婦愛とアルマンの若き燕愛との相和した最高頂を示すものである。

アルマンが手にせるは『マノン・レスコー』、今や主人公二人は作中の主人公達と自己を同一化し、現實と夢との境の忘れられてゐる瞬間である。

配役はアラ・ナヂモワとヴレンチノの御兩人。

淨瑠璃寺吉祥天女像（上）

柴田環女史近影（下）

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印……客員
＊印……特別誌友
△印……雜誌委員

△東京濟生會法學士　岩倉具榮
＊東京澁谷區　岩倉良子
＊奈良縣　茨木基忠
＊大連　伊藤梅吉
＊板橋區　石井金之助
東京本郷區　伊東豐夫
＊東京日暮里　伊東八重子
＊東京淀橋區　入江敏夫
＊第一神戸中學校　池田多助
新潟縣　磯野信司
東京本郷英語通信社　今井信之
東京本郷區　今福由江
●人生創造社　石丸梧平
＊滿洲國吉林　石橋園穠
＊愛媛縣　石川學位
＊大阪北濱華陽堂病院　井尻辰之助
△早稲田大學　長谷川誠也

●東北帝大醫博　早坂長一郎
＊愛知縣　本田了惠
●名古屋醫大醫學士　堀要
＊北海道函館　堀濱吉雄
＊愛知縣　星野さつき
東京　朴永鎭
東京日本橋　時平佐喜雄
駒澤大學　富田義介
＊東京荒川區　遠山四郎
滿洲國新京農學士　千葉廣洋
＊新嘉坡　林獨歩
京都、醫學士　和田節雄
＊東京　渡部徹
＊南洋パラオ　横田仁治
●警視廳技師醫學士　金子準二
京都　狩野儀三郎
●東洋大學　高島平三郎

東京葛飾區　高橋鐵
東京淺草區　高橋春子
＊西の宮市　田中雅子
＊大阪天王寺　田中金之祐
東京杉並區　田內長太郎
＊宮崎縣　竹之下學山
阿佐谷幼稚園　高崎能樹
＊東京本郷區　高村光太郎
本研究所內　高水力太郎
文學士慈惠醫大　武田忠哉
横濱鶴見　立川玄一郎
東京女子高等職業學校　竹田浩一郎
＊京都中京區　津田九郎
刀江書院　辻修
●廣島文理大文博　塚原政次
東京牛込區　塚崎茂明
東京神田區　土屋喜一

北海道札幌　浪越春夫
＊大連市　名越正
＊京都府　中野正一
東京本郷區　中山太郎
＊帝大在學　中村浩
＊東京杉並區　南雲忠夫
△東京杉並區　長崎文治
＊東京品川區　長松美代子
＊東京神田區　内藤梅子
＊福島縣　氏家滉二
●早稻田大學文學士　内田勇三郎
司法省　内山淑彦
＊山形縣　梅木米吉
●東京能率研究所　上野陽一
＊北海道小樽　井上千秋
＊朝鮮群山府　井上徹二
大分縣　小野田幸雄
東京本郷區　小柳津邦太
成城學園前　奥村博史
京都府舞鶴　奥本島田

＊宇都宮市　奥貫芳雄
＊愛知縣　大竹正男
＊横濱神奈川區　太田繁子
△本研究所内　大槻憲二
右同　大槻岐美
＊奉天　大橋正二
東京杉並區　大久保眞太郎
＊宇治山田市　大山浩
●廣島文理大文博　久保良英
甲府母の友社　窪田甲子郎
＊兵庫縣　久下貞夫
東京淀橋　倉橋久雄
＊兵庫縣　黒田利一
精神分析學會　矢部八重吉
●東北帝大醫學士　山村道雄
＊神戸精神衛生相談所　山田一郎
東京赤坂區　山本鎭雄
＊京都左京區　米原浩
●東北帝大醫博　丸井清泰
＊山形縣　松田啓治

＊東京大塚　松平定光
東京麹町區　松居桃多郎
＊牛込區　松井定之
＊佐世保　松尾乙三
＊大阪市　松本理喜
●東京四谷區　慶大神經科教室
＊東京神田區　福間光
＊獨立美術協會　福澤一郎
＊札幌　福原久二郎
＊福島縣　藤田由美
＊東京麹町區　藤井和子
＊東京中野區　藤木義輔
臺灣阿里山測候所　近藤石象
江戸橋病院醫博　小山良修
＊長野縣　小山千穗
＊長野縣　小林忠藏
東京麻布區　小林五郎
東京府砧村　小林正
東京下谷　小林一
東京板橋區　小松德

*愛知縣　小松宗一郎
*杉並區　小澤一夫
東京澁谷區　小杉長平
●精神分析學診療所、醫博　古澤平作
*山口縣　古谷實
長野縣　五味芳次
東京豐島區　江戸川亂歩
●東京、醫博　雨宮保衞
*神戸市須磨　麻生信道
*東京品川　齋藤長利
*大阪府　澤潤一
*奈良縣　佐藤政宕
*京市府　佐々木龍治
●東北帝大醫學士　木村廉吉
東京小石川　北垣隆一
早大在學　北垣照雄
*浦和市　菊池直治
*京城府　三井慶次郎
●成女學校　宮田修
右同　宮田齊

*長野縣　三輪輔
*神戸市　三留賴介
英語通信社　皆川郁夫
*東京、醫學士　芝川又太郎
*栃木縣　島崎勝次郎
*沖繩　島袋常雄
●靜岡腦病院醫博　式場隆三郎
*東京　清水桃子
子供の家　霜田靜志
*熊本五高　澁田見勝亮
大阪　廣井重一
*「雲雀」誌主幹　廣瀬操吉
*東京牛込　平野市郎
*横濱中區　平野良太郎
東京世田ヶ谷　平野弘
早大演博內文學士　平塚義角
●東京、醫博　諸岡存
*朝鮮平安北道　森永醇
*東京府　森下雨村
*栃木縣　鈴木武四郎

松江市　鈴木誠
●東京、醫博　鈴木雄平
*ハワイドクトル　菅村芳弘
*東京淀橋區　須田勇
●名古屋醫大醫博　杉田直樹

讀者諸氏はなるべく特別誌友又は研究會員となつて．我等の事業に直接參加せられむことを希ふ。その規定に就いては巻末の〔研究所事業案内〕を參照ありたし。

母性感情の中に潛む憎惡

——附、日大生殺しに就いて——

長崎文治

（一）母性感情は愛のみによつて成立つてゐるか

母性愛ほど素朴的で、而も最もよく完成されてゐる感情は無い。この感情はあらゆる動物に通有な一種の本能に基くものであつて、母性愛だけは常に變らぬ姿を以て、總ての動物、何時如何なる時代の母性にも現はれて來てゐる。併し、それ故に、この母性感情を未文化的なものだとする人があるならば、明らかに彼は過當に評價した文化に宿醉して、母なる大地から足を踏み外してゐると云ひ得る。若し人間が母胎から生れないで、文化の作り出した物質によつて合成される事が出來る樣になつたならば、その時こそ勇敢に母性愛といふ古臭い殼を脫する事が出來る時であらう。

母性愛は一般に美はしく、尊い感情であるとされてゐる。この、人間が絕大なる信賴を寄せてゐる母性感情の中に一つの憎惡が、愛と對蹠的に潛んでゐるとは誰しも考へない事であらう。斯う考へる事は寧ろ母性に對する限りなき冒瀆であり、人倫を無視したものであるとの非難を受け易い。

併し考へ得ないといふ事は有つてほしくないとの願望を表白するかも知れないが、無いといふ事實の證明にはならない。吾々の思索が從來は意識的面にだけ向けられて、意識的事實、卽ち記憶の綜合に依つて人の行爲を說明しやう

としてゐた。ところが人間の無意識の大世界が、寧ろ人間の行動を支配するものであるといふ事實が、フロイドに依つて闡明されると共に、人間は從來の考へ方を改變する必要に迫られた。

人間は誰でも自己の弱點に觸れられる事を極度に嫌ふ。殊に、自他共に誇りと感じ、絕對至上のものと信じてゐたものゝ缺點を曝らけ出された時程、深刻な反感を覺えることは無い。母性感情の中に憎惡が潛むといふ事は婦人に尋ねて見てもこれを承認せず、或者は明らかに道學者的口調を以てそれを否定し、或婦人は母親の愛情だけを强張し、或る婦人の答へは極めて曖昧であつたといふ事も當然の成り行きである。

只、ある婦人は、「子供が、自分の思ふ樣にならぬ時には憎らしくなる」と云ひ、その直ぐ後に、「この憎らしさは眞の憎しみでは無い」と辨明してゐた。成る程、この場合の樣な憎しみは、母性愛の何處にでも認められる事でありその他總ての愛情にも見られる現象である。

一體、愛と憎しみとは同一のものゝ反面である。愛すればこそ、その愛が受容れられない場合に憎み、憎む事の出來る者はまたよく愛し得る人である。愛と憎とはリビドー發現の二つの樣相である。リビドーが對象に積極的に纏綿した場合に愛となり、消極的に纏綿した場合に憎しみと變る。畢竟愛と憎とは、同一の炭素原子から成生する石炭とダイヤモンドの樣なものと云ひ得るかも知れない。母性感情の中にも愛と憎しみがある事は當然であるが、多くの人は母性感情に於いて愛情こそ、その本質をなすものだと主張する。

併し、私は、これと異つた感情を或る中年婦人の告白の中に聞いた事がある。その婦人は青年期にある二人の男兒を有つ上流婦人であるが、「妾は特にこれといふ理由も無いが、長男に對してはどうしても融合しされない感情を持つてゐる。時には末子さへ生きて居れば長男は居なくなつて吳れた方がよいとさへ思はれる事がある。それでゐて、長男は決して不良な子ではない。寧ろ末子が生意氣盛りで、屢ゝ親に楯突いたり、理屈攻めにして、親を手こずらせたりするに反して、長男の方は極めて從順な、謂はゞ善良な青年である」と。又或母親は、「不良の子ほど可愛いと云ふが人によりけりで、長男が不良になつた場合には却つて邪魔にさへなるが、末子の方だと、何んな不良兒でも、

何か知ら餘計に不憫さが增して來る」といふ事を同じ境遇を語り合つた幾人かの婦人の話を引合ひにして語つて吳れた。勿論これ等の談話に對して、これが母性感情の本質的のものであるか何うかを確かめる爲めに、色々の見地から私は追求した。即ち、出產時の狀況、兩親の境遇の如何、子供の生育過程の差異、及び稟賦等に就いて、母性感情に特殊性を附與すべき個別的要素に充分注意を拂ひ、更にこれの普遍妥當性を確める爲めに、幾人かの母性に就いて質問を發した結果、これを裏書きする樣な談話を得たのである。

この調査の範圍は極めて狹少ではあつたが、尠くとも、母性感情の全部が愛に依つて成立つてゐるものでは無いといふ事、及び、愛するが故に憎むといふ傾向とは、性質を異にした感情を長子に對して抱く場合の有ることが分つた。これは長子と末子に對する母性愛の濃度の相異ではなく、長子に對する「疎隔感」——何等の理由も無いが、長子とは何うしても、愛の中に融け合ふ事が出來ないといふ感情である——として現はれる。この感情は特異な母性感情とみるべきものでは無く、母性感情全般に亙つてみられるものでは無からうか。即ち、末子に對して最も厚い愛を示す反面に、長子に對しては寧ろ疎隔感を有するのが母性感情の眞の姿では無からうか。

私はこの證明を民俗習慣の中に求めてみやう。民俗習慣といふものは無意識感情に依つて形作られ、それが生活の中に這入つて來るに從つて、實用的に改廢變化させられて來たものである。若し、神話、傳說が民族の夢であり、個人の夢は願望充足であるとのフイドの說が肯定されるならば、神話・傳說は或る點では人類の願望を現はしたものでなければならない。そして、過去の民俗・習慣が神話・傳說と相關的に存立してゐるとみられる以上、同じく、民俗習慣の原初的の形態は民族の願望によつて成立つてゐると見てよい。

この立場から、過去に於て行はれてゐた、末子相繼制、末子成功說話、及び、初子犧牲の習慣に就いて考察を進めて行かう。

（二）末子に働く愛の相對性

親の跡目を繼ぐものは、現今でこそ長子であるが、太古に於ては、殊に母權制社會に在ては末子であつたといふ事は一般に認められてゐる。我國でも神話の中に末子相續制が判つきり見られ、古事記に傳へられる神統記に從へば、高天原の初最の獨化神に次で成りませる五代の夫婦神の最後の神が伊弉諾・伊弉冊の二神で、國土修理の大役を行つて居られる。出雲國の祖先となられた素盞嗚命は、伊弉諾命の御禊に依つてなりませる末弟であり、その子孫に當る大國主命は八十神の末弟で、最後に天下の主となり、日本神話中第一の英雄神である。又、天之忍穗耳命から神武天皇迄四代は何れも末子であらせられる。其後に於ても綏靖、安寧、孝安、孝元、開化、崇神、應神天皇等、凡て同母兄弟中の末弟であらせらた。希臘神話に於ても、クロノスはウラノスの末子、ツォイスはクロノスの末子である。

又多くの民間說話中にも、末子成功の話の筋は殊に多い。我國の海幸・山幸の話、秋山之下氷壯夫(シタビオトコ)と春山之霞壯夫(カスミオトコ)などの話は、兄弟が爭つて兄に虐められるが結局は弟の勝になる筋であり、グリムの童話『命の泉』は老いた父王の爲めに兄弟が命の泉を探しに出かけるが遂に末弟が苦心慘憺の後、これを得て父の位を受けるといふ事になつてゐる。又、聖書中の「ヨセフとその兄弟」の物語も末子成功說話であり、その外數へ切れない程である。

末子相續制の起源につきパウル・ヴィノグラドフ氏は「兄達は父が未だ生存して、その土地を管理し得る時に世界に乘り出して行く機會を有つに反して、末子は最も永く父の家に留るといふ事實に負つてゐる」と云ひ、マッカロック氏もこれと同樣な意味の事を云つて、「末子はその出現の時に於て他の子供達よりも一層父に近いし、且又兄達が旣に家を離れて四散してゐる場合には末子が家督相續人となる蓋然率が大きい」と述べてゐる。そしてこの說明は、社會學者や民族學者等に肯定されてゐる。

併し、この說明は末子相續の機會を說明するものであつて、末子が家督を相續する機會に惠まれてゐたから、その蓋然率が大いといふだけでは、末子相續制が出來た必然的因由を說明する事にはならぬ。蓋然率には必然性が無い。過去に於て、普遍化されてゐた末子相續制、及び末子成功說話等を、この蓋然性に歸して能事畢れりと考へるのは大きな誤りである。

そこで、私は、この必然的因由を心理に求める。これは最も卑近で、普遍的な事實——總ての母親は末子に對して特に深い愛情を抱くといふ事實——に見出される。感情の發露が素朴的で、比較的感情を主にして生活が行はれたと云はれ得る過去の時代には、末子相續制は自然的の過程であると云へよう。今は末子相續制の心理學的解釋を主に述べる時ではなく、唯、それの心理的原因のあるを事明らかにするだけで足りるから、これ位で止めて、次に、それでは何故末子が母親の愛を最も濃く受けるかの說明を與へなければならない。

末子の最も愛されるのは、母親の感情が年と共に和やかになつて來る爲めであるといふ考へ方も一理ある。又、最早親の愛情を注ぐべき下の子供が無いから、「殘り物の福」としての愛情が全部末子にかゝるのだといふ說も肯定される。成る程これ等の說は末子が愛される所以を明かにする。併し私は之れに對して尙ほ滿足する事は出來ない。第一の親が年をとるに從つて愛が和やかになつて來るといふことはあるとしても、それが何故末子にだけ注がれるかといふ事、及び第二の、餘りに愛情を量的に見過ぎてゐる憾のある事である。そこで、私は、「愛の相對性」といふ事を以て之れを說明しようと思ふ。

一體、子供の發育經過中に於て、幼兒期時代は親の愛を無條件的に受容れて之れに反應するが（無條件的反應期と名づけやう）、自我が發達するに從つて批判的になり、親の愛情に對しても無條件的に反應しないで、時には愛を拒否したり、之に反抗したりする事さへある（この時代を、條件的反應期と名づけやう）。愛は無條件的に受容れられる程その發露が容易になるもので、幼兒時代程親の愛情は濃やかに注がれる。兄が旣に條件的反應期に入つて屢〻親を失望させるのに比して、弟は尙ほ無條件的反應期に居て親の愛に素直であるならば、兄に對する親の失望が強いだけ弟に注がれる愛情が深くなつて來る。これを色彩の對比に擬して、「愛の相對性」と名づけやう。「愛の相對性」は末子に至つて、假令末子が愛に對する無條件的反應期を出て、親の愛に脊負ひ投げを喰はす時が來ても、この愛を受け止めるべき競爭相手たる下の子供が無い爲めに、結局他の兄弟にみられる樣な愛の嫉みを持つ事が少い譯である。

（三） 長子に對する疎隔感の原因

愛の相對性は、長子と末子とに於て兩極性を有つ。末子に深い愛情が示されることを説明する「愛の相對性」説は同じく長子に對してはその反對が示される事も了解せしめる。この説明は、愛の對絶性を超關係性を忘れてゐる慊があると非難されるかも知れないが、愛情は尠くともその個別條件を無視して考へることも出來るし、また必要でもあるのだからかういふ方法をとるよりことも重要である。

斯くの如き經緯からして、長子が親の愛情から最も多く疎外されるものは自然である。併しこれが、長子への疎隔感の原因の全部では無い。吾々は、この疎隔感が母の方に案外濃く、しかもそれが民俗遺傳的だと觀ることが出來る。卽ち、この疎隔感情は、決して個人の後天的條件に依つて起きて來たものでなく、經驗以前に有するものがある。この點に於て、それは普遍的傾向として古くより母性感情の中に潛むものであらう。これは「初子」に對する幾多の風俗習慣から察せられる。クリシェ氏の『母權制社會の謎』の中には、太古世界の諸方に初生兒を殺す風習のあつた事が擧げられてゐる。例へばニュー・サウス・ウェルズの諸部族では最初に生れた子供を喰べて了つたといふし、ニューギニアの東海岸では初生兒は全部殺されるべき運命を荷つてゐた。インディアンの間では十九世紀頃迄は初生兒を犧牲にする習慣が行はれてゐたといふし、ウガンダでは酋長の初子は男兒である場合には、それを窒息させて了つて父祖には死んだと報告した。猶太民族にも初生兒犧牲の風習があつた。出埃及記十三章に、「人と畜とを問はず凡てイスラエルの子孫の始めて生れたる首子を皆聖めて我に歸せしむべし」とある。

何故太古の人達は初生兒を殺さなければならなかつたか、勿論初生兒に限らず、一般に子殺しといふ風習も存してゐた。又之れと共に、初生兒だけは、男女に拘らず殺さないといふ習慣を持つてゐた民族もある。併し、「初生兒殺し」に對して、「末子殺し」、とか、「次子殺し」等といふ名を以て呼ばれる風習が無いのは何故か。多くは「子殺し」の風習に對して、特に殺されるもの、又は特に殺されないといふ條件を持つ者は初生兒であつたのは何ういふ譯であ

らうか。子殺しの風習に對して經濟的見地說から明せんとする者は、子殺しの制度に對して解釋し得るに過ぎない。古代の民族習慣で實用的見地――又は經濟的見地――に立つてゐるものは、總て後世的のものである。子殺しの風俗習慣も、その由來する所は心理學的探求に俟つべきものである。

結論を先に云ふならば、前述の如く、民族習慣は、抑々人間の願望に發したものであるといふ立場からして、初子殺しの風習も、母權制社會に生じた母性感情の一つ、卽ち、長子疎隔感の形式化されたものである。そしてこの疎隔感には、長子への「愛の相對性」も關係してゐるが、最も強く源因してゐるものは出產時、殊に初產時の經驗、卽ち初產時の精神的外傷である。

出產の外傷說はオットー・ランク Otto Rank に依つて唱道されたもので、出產時の精神的外傷が小兒の後年に於ける神經症の遠因であるといふのであるが、これに對して、母親の側にも出產といふ事は最も大きな精神的外傷となると私は考へる。

一體女は男よりもコムプレクスが多い。これは女性が生涯の中に受ける精神的外傷が男性より多いからである。まづ去勢コムプレクス――男性器羨望(ペニスナイド)として現はれる――、處女性に附着した感情、月經時及姙娠出產時の苦痛等は女性特有のものである。殊に出產は最も重大な意義を持つもので、過去に於ては、出產といふ事は生存の義務を終るといふ事でさへあつた。これは種族保存本能の原初的の形態であり、實際に於て、下等動物になるほど生殖と死との距離は狹く、生殖を終ると共に死ぬものは昆虫の世界に多く見られる。それが高等動物になるに從つて、生命が生殖の從屬的立場から離れて來、生殖と死との間が擴がつて來る。それと共に、生殖に附隨してゐた死の「痕跡」が深く刻みつけられた。「生みの苦しみ」といふのがそれであつて、出產は總ての女性にとつて宿命的な受難である。殊に最初の出產は、全く未經驗の事であるから、最も大きな精神的外傷を受ける。一體最初の經驗といふものは、何事に依らず大きな印象を殘すものであるから、昔の人は「最初」に對して非常に愼重な態度をとつて、之れに神祕的な意義をさへ附してゐた。多くの民俗習慣の中に、「最初に就いてのタブー」が非常に多く認められるし、古代人は之に對

して嚴重な儀式を行つてゐた。出産風習にも過去に溯る程、姙產婦に就いてタブーは重く、產屋、別火、血忌み等といふ制度が、不淨の觀念を伴つて守られてゐた。不淨の觀念は畏怖から生じたものであるから、出產への畏怖がかういふ風習を生み出したものであり、又初產婦の精神的外傷を緩和する爲めに行はれたとみられる。初產は里でするといふ習慣が我國にもある。そして最初の子に對する特別な習慣は、母親の初產時に於ける精神的外傷の形式化されたものである。

最初の子に對して母親の抱く疎隔感は、斯くして必然的のものである。この最初の子に家督を讓るといふ事は、母權制社會では出來得ない事であるから、父權の確立と共に長子相續は生れて來たものであらう。又、我國では昔から「一姬二太郎」と云つて、最初の子供は女子である事を喜ぶのも、女子は、母との同一化に依つて、その疎隔感が緩和されるからであらう、女子は早く役に立つやうになり下の子の守が出來るといふのは、後世的の功利觀的の說明だと見られる。そして又、不良少年に長子が多いといふ事實も、不良化の誘因は愛情の歪みによるものであるから、自らこゝに母の無意識的な頗偏な愛がその源因と見なければなるまい。

(四) 日大生殺しの考察

以上の見地から、最近の日大生殺し事件を考察して見たい。この事件の取調べの衝に當つた三原警部が、直接にその自白を聞き、加害者と長い間接近してゐたが、どうしてもこの犯罪心理は不可解であると嘆じて居たさうだが、これは普通一般に、常識的に考へられてゐる肉親の情といふ觀念に捉はれてゐるからである。この事件を批判してゐる多くの人々も、意識心理學的立場に固着してゐる限りに於ては同樣に分らないのが當然である。それ故その說も淺薄である。或人は家庭紛亂の罪だと云ひ、或人は更年期婦人の複雜な心理に歸さうとし、或婦人は、「思ふ樣にならぬ子は死んだ方が良いと思ふ事がある」といふ感情をこゝに主張し、或る犯罪心理學者は、繼子殺しの心理と同一視し、又或る精神病醫は變質者といふ言葉を以て片づけやうとしてゐる。この外に又、或る批評家は保險金が肉親の情を斷

ち切つたといふ事を强調してゐるし、金の爲めに我子を賣る親の心理と同じだと云つてゐる時評家もあつた。併しこれ等の說明は皆、この犯罪の眞相に觸れてゐない。それだけ皮相的であり、多分に不可解の領分を殘してゐる。

確かにこの事件は我國犯罪史上未曾有の事である。或人は、この事件の眞實性に就いて今尙ほ疑問を抱いてゐる。それ程、肉親關係に就いての常識觀からは割り切れない犯行である。そこで、夫の放蕩に惱まされてゐた更年期の婦人が、更に我子の不良に將來を慮つて犯した犯行である、といふ槪括的な結論が與へられた。この說明は極めて漚當で一般の人々を肯定せしむる事が出來る。併しそれだけに又この犯行の骨子に觸れてゐないといふ感が深い。

この事件で特に私の眼を惹いたのは、被害者が一定の年齡（親の愛情を裏切る機會の多い靑年期）に達してゐた長子で、而も放蕩兒であつた事、被害者の生命保險金受取人が父と共に末弟の名義になつてゐた事で、この二つの事項が前に述べたカテゴリー――愛の相情性と疎隔感――に當て嵌つてゐる。卽ち長男が不良で親の愛情を裏切る樣な行動をすればする程母親の愛情は之れと對蹠的に末子に向けられる。そして末子が可愛ければ可愛い程、長子に對する疎隔感は深くなつて來るのである。これは何處の家庭でも見られるもので、長子と末子に對する母性の感情は本質的に異つてゐる。唯、かういふ感情は非文化的であるから、多くの人達は理性を以て押し籠めて了つてゐる。であるから、若しこの理性といふ錘を取除く樣な何等かの誘因さへあれば、この原始的の感情は勃然として、現はれて來るものである。況してこの事件の加害者たる母親はまの如き不遇に生ひ立つて、敎養の點に於ても人並でない女性の洗練されない愛情、夫婦生活に於ても惠まれず、常に夫の放蕩に惱まされ通して歪められて來たゝめに必然的に、この原始的感情を以て子供に對し、不平等な愛の配分を行ふに至る――殊に長子と末子とに對して。加ふるに更年期婦人に來る悖德的傾向はこの犯行を容易にする。

そして勿論、この犯行の現實的動機は被害者貢の不良性にあるのであるが、併しこれだけの條件では尙ほこの肉親犯罪を說明する事は出來ない。加害者たるはまの如き境遇にある者は世の中に尠くなく、更に歪められた運命を喞つ婦人は多くあるし、又被害者貢の不良性に對しても、殺さなければならぬといふ程切端詰つた氣持は母親の中からは

見出せない。世の中にはあの位の不良はざらにあるし、もつと惡辣な行動をして親を惱ませてゐる者さへ尠くない。そして或人が指摘した樣に、この被害者の兩親は子供の放蕩に對して割合無關心であつた樣だ、勿論多少は意見もしたであらうが、飽く迄子の不良性を撓めてやらうとする親らしい心遣ひや、努力をした跡が見られない。寧ろ惡戲の仕放題に任せて置いて、後になつて折諫する繼親の心理に彷彿とする所さへある。この子殺しは愛情の無い犯罪で、一般に子供が不良の爲めに行末を慮る親心から、涙を拂つて行つた犯行とは異ることは誰しも認めてゐる。假令、子に對する疎隔感と、母親の境遇と、子の不良性とが釀し出した犯罪であつたとしても、又母親の變質性に因るとしても、これを決行に迄驅り立てる感情が發揚しなくてはならない。この感情の發揚は兇行當時の母親には見出せない。極めて冷靜に取掛つてゐた樣である。母親の發作的の兇行ならば容易に説明はつくが、この犯行は長い間計畫せられ幾度か實行に移されて來、その都度失敗して最後に成功したもので、被害者自身も既に殺されるかも知れないと馴染の娼妓に漏してゐた程、家庭の雰圍氣が熟してゐたといふ點は、單純な感情から出たといふ許りでは説明されない。

一體、戸主と嗣子とは總ての社會に於て同一化されてゐる。そこで家族の者が父親に注ぐ感情は、亦同樣に長子にも注がれる。父親の權利は直接に長子に移される。父權制の社會で、長子相續制が確立されると共に、父合に在ては、妻たるはまにとつて夫寛は夫らしい夫では無かつた。寧ろ、極めて放蕩者で家を外にして他の婦人に愛情を移す樣な、妻に對する愛の裏切者である。はまの夫に對する敵意——意識的にも無意識にも——は長い不滿足な夫婦生活の間に固定し、それと共に、年齡の上からしても既に愛の凋落期たる更年期に入つて、夫婦の愛情は殊に薄くなつて來てゐる。であるから、何等夫婦は功利的意義を外にしては夫婦の絆は直ちに斷たれ易い狀態に置かれて居た。(常態の夫婦では、愛の凋落期に入つても、今迄の生活の隨性として愛情は殘つてゐる——愛の餘燼期。そして老夫婦の和やかな生活はこの愛の餘燼を大切に保ち合つて行く生活である)。それであるから、若し寛に妻子を扶養する能力が無くなつて了つた場合、又は相當の遺産があり、夫が厄介な存在となつてゐたならば、寧ろ夫こそ殺されべき本人であつた。はまの無意識心理には子の貢よりも夫寛に對する敵意が働いてゐたもので、この點貢は父の身代

りとなつた譯である。それ程この家庭では寛は拒否さるべき人であつたが、併し生活の爲めには必要な存在でもあつた。これに對して貢は、父親の樣な敵意は持たれなかつたが、彼の行動は一家の生活を脅かすものがあつた爲めに、母親の夫に對する感情は、位置（嗣子）、行動（放蕩）、その他の點で父と似てゐる貢へ轉嫁されて（同一化）來たのである。

一般の婦人が、如何なる子供であつても、それを殺した場合には大きな精神的惑亂があるのに、はまは兇行時も兇行後にも案外平靜を保つて居られ、後悔に似た感情さへ起さなかつたと見られるのも、彼女の心には、眞に我子を殺したといふ感じが起らず、寧ろ夫を殺して復讐したといふ快感に醉ふ無意識的な心理がその罪障感を緩和してゐたものであらう。夫殺しは一般婦人の無意識的傾向であると云つてよからう。男性器を有たぬ故に男性を妬む無意識的傾向（男性器羨望）、處女性を破壞し、又は處女の價値を引下げた男性（多くは夫）に對する無意識的敵意（これは嘗て筆者が「初夜權を考察して夫婦生活の葛籐に及ぶ」といふ論文を本誌第二卷八號に載せたものに說いて置いた。）等は女性が一般に持つ傾向である。

はまの夫に對する怨恨敵意は貢への轉位に依つて除かれ、夫の代理者である貢を殺す事に依つて、夫への復讐は成し遂げられた譯であるから、それの反應形成として、一入夫に對する親愛の度が增して來たと觀る事も出來る。

最後に、附けたりとして、この犯罪に加擔し、殺害の一役を演じた妹榮子の心理に就いて簡單に考察してみたい。相當の敎養もあり、溫和であつた榮子が母をいさめやうともせずに、この大罪に唯々として加擔した心理を、多くの人々は疑問としてゐる。或人は群集心理的の追隨であるとし、或人は乙女の感傷性といふ事を以て曖昧な說明をしてゐる。ところが精神分析學に依つてみると、兄と妹の關係は夫と妻との關係と類似してゐる。かういふと奇異に思はれ、多くの人々から反駁されさうであるが、我國の古代語にも、妻を呼ぶに「妹（いも）」といふ言葉を以てし、古代の民族に於ては近親相姦と云はれる同族結婚が一般に行はれてゐ、殊に兄と妹とは最も多く結婚の條件に惠まれて居たことを見ても分る。後になつて、近親相姦が禁ぜられ（タブー）、異族結婚（エクソガミー）が確立された心理機制に就いてフロイドは「ト

ーテムとタブー」の中に詳述してゐるが、この傾向は現代人の精神の中にも潜んでゐるもので、多くの個人は、幼少時代の性的遊戯の對象として妹を最も多く選んでゐたといふ事を語る。この傾向を分析學は兄妹コムプレクスと名付けてゐる。そこで德田一家に於て、父寛と母はまとの關係は、その儘兄貢と妹榮子との關係に移して來られる程、その經緯が類似してゐる。貢が妹榮子の着物――女性が生命とする着物――を持出して入質し、その金を以て他の女の愛を購ふた如きは、明らかに榮子の兄に寄せてゐた純一な愛情への裏切行爲である。愛情が受け入れられぬ場合は、反對に憎惡に變る。榮子の心の中には兄に對する愛憎二元的の感情が交錯して働いてゐたであらう。

斯様に觀て來ると、德田一家では、父と長男、母と妹が同一化してゐて、この犯罪は、夫殺しの變形と觀る事が出來るのである。卽ちこの犯罪は、母性感情に本能的に存する長子に對する疎隔感と、これを深める母親はまの境遇、性格及年齢の條件が加はり、父寛と同一化された犯行である。

私は彼等を直接臨床分析しないのであるから、以上は一つの想定的な解釋に過ぎないことは云までもない。(完)

妖婦への感傷愛(ツエルトリヒカイト)を析く

高橋鐵

1. 地靈(エルドガイスト)としての妖婦。 2. 彼女達の行狀記。
3. 何がさうさせたか、又はさうさせるか。
4. 妖婦に母の面影がある!

1 地靈(エルドガイスト)としての妖婦

「妖婦」の定義は?……そんなものはない。たゞ、フランク・ヴェデキントの『地靈』序曲に、鞭を持つた猛獸使ひがルルを指さして唄つてゐる。

「これなる蛇は禍ひの種を蒔く爲に、
作られました。
人間を迷はせ、誑(たぶらか)し、毒を流したり致します。
それと氣づかぬ間に人殺しも致します」

その言葉通り、地靈の女ルルは親無しの花賣娘から老富豪の夫人になり、寄席女になり青年畫家の妻になり、新聞社長の父子を操る。そして、悶死する男、自殺する男、殺される男、駈落に引きずり込まれる男……いろ〳〵な血を

吸ひ、その果には、情婦…妾…賣春婦と轉落して、秋雨の夜、豚小屋のやうな家で無頼漢の無理強(むりじひ)にあつたまゝ胸を刺されて死んで行く。

それでも、尙、彼女は地靈である。總ての男を知らぬまに滅ぼす。「女王」である。ジョルジュ・サンドの言葉――「惡い女の戀は男を殺し、善い女の戀は己を殺す」――に從へば、彼女のやうなものこそ、善惡の彼岸を超えた生物哲學を具象化してゐる。だから、淫婦・毒婦・妖婦・吸血鬼――等、なんと呼んでもかまはない。要は、地靈としてシムボライズされた、性目的を餌に男性を自滅させる女性の一性格。(その心理機制及びそれに魅かれる男心の因由を攻究したいと思ふ。)

2 彼女達の行狀記

彼女達は何が故に妖婦と呼ばれねばならなかつたか。妖婦傳を分類的に列擧して見やう。

ブルガンディ王ルイ五世の妃マーガレット、唐の武后、有名な娼妃メッサリーナ、賈后、天樹院(千姫)等は權勢をたのんで、男のハレムを築いたことで名高い。彼女達は女郎蜘蛛の傳説やギリシャ神話中の王女アタランタ姫の所行のやうに、男性を苦しめ、挑む快感に醉つて、いけにえの殺戮をかさねたのである。

權勢の代りに、美貌・愛戲のみを唯一のでだてとして、男を葬つて行つた者も多い。卅五人の愛人を無動機で殺した女青髯(ウーマンブルーベアード)エラ・レンツイ夫人、片ツ端から男共に決闘をそゝのかしては殺して行つたアンナ(シュルスベリー伯の娘)愛咬(リーベスバイツセン)の爲に三人の男を極樂死させた陽物鬼紅浪(ホンラン)(清朝期の藝妓、年は廿三)、清末に於る廣東の三十六花禪として知られる淫尼卅六人、小說的稗史のカルメン、サロメ、姐妃お百、鬼神のお松…みな、雌蠍のやうに、色に誘はれて來る男性を殺害した。

又、意識的にか無意識にか、次々にと男を搾り上げ破滅の淵へ導いて行く「妖婦」がある。國王の爲の賣春婦と云はれるルイ十五世期のポンパヅール夫人、獨逸ルドキッヒ一世の寵妾として王宮を遊廓に化した曲馬娘ロラ・モンテ

ッツ、ナポレオンを最大の餌物とした貴族顯士間の渡り鳥ジョセフィン、クレオパトラ、周の幽王を傾けた褒似等々文字通り傾城傾國だが、それほど、規模が大きくなくとも、さう云ふ意味の妖婦は昔から町々村々にまで滿ちてゐる。（古川柳は哂ふ。「飯盛も陣屋ぐらゐは傾ける」と——呵々）例令、椿姫の先驅をしたマノン・レスコウ、「千九百卅六年型の流行兒」高橋お傳、世界大戰中の毒花（？）マタ・ハリ、世界的舞姫イサドラ・ダンカン（舞姫といへば二富豪を操つた手切れ成金ジョセフィン・ベーカーなんかも此處へ參加させてもよい）、ゾラの「ナナ」、谷崎潤一郎氏の「お艶」「ナオミ」諸孃などが妖婦としての光榮・魅力を持つてゐるのも、「罪は浮世の人にある」に違ひない。畢竟、淫婦・毒婦・妖婦などゝ種々の呼稱を一括して、彼女達の行狀は、巷間で斯道の男性を「女殺し（ウーマンキラー）」「色魔」と呼ぶのに對し男殺しなのである。

3　何がさうさせたか又はさうさせるか

學究的に妖婦の心理的研究をする場合、我々心理學徒には二大面がある。即ち「彼女達自身の心理」と「彼女達に對しての心理」とで、此の短章に於ては私は、前者彼女達の環境と無意識動機とを結語的に述べて見やうと思ふ。（これは、本來ならば、個人々々の性格學的攻究が必要なのだが、彼女達の傳記を通讀してみたところによると、不思議に、共通した環境をもつてゐるので、總說的に分析を果すことが出來た。だから、此の興味ある個人分析は別の折に成し得られるであらう。）

「人間には男と女と二つの人種しかない」——から云ふアフォリズムがある。が、これは決して單なるアフォリズムではない。人間心理の原型としても、生物學的二大形態として男性々格と女性々格との兩者のみが嚴存してゐる。そして、女性が後天的に女性々格を發展させて行く上に大きな影響を齎らす異性々格は云ふ迄もなく、父——夫（又は戀人）——息子である。或る場合には、父＝夫＝息子と云ふ方程式にすることが出來る程、その關係は女性に對して深く、離れがたい。

ところが、所謂妖婦達は此の家族心理に對して、殆んど總てが、恐しく異常な心的外傷を負うてゐる。卽ち、私の「發見」によれば、彼女達の人生上、生活心理の出發點になるのは、激しい父コムプレクスである。子供の時に父を失ひ、母と同一化して絕えず「瞼の父」を求めたり、或ひは母親無くして所謂「お父さん子」になつたまゝ「父」を獨占しやうと云ふ一念で父に纒綿してゐる。

父無くしてヨカナーンを求めたサロメをみよ！　父無し子(てゝなしご)として、母を抱へながら一生、男の全身全靈を弄んだダンカンをみよ！　母亡き後に父親のやうな老夫の下で若い情夫を謀殺した「惡魔の密使」ガブリエル・ボンパール夫人をみよ！　父なき女王クレオパトラと老シーザーの情艷史をみよ！

近頃、妖婦に同情する「新解釋」が流行るらしいが、もしさうであつたら、まづ第一に、彼女達の殆んど全部例外のない父コムプレクスに投出(プロジェクト)して、悲しんでやるべきであらう。つまり、味はひ得たことのない父の愛、或ひは、母に襲斷されたまゝ永久に禁斷されてゐる父の愛を、對象愛の發展と共に貪る樣に探し廻るすさまじさを憫れまねばならぬ。

しかし、此の父コムプレクスは屢々、女性の内にア・プリオリ的に潛む母性愛（從つて、鬼子母コムプレクス）と結合し、置換される。父の面影は「八犬傳」の八つの玉のやうに飛散つて、數多の息子の面影になる。そして、息子を知らざる愛慾(リビドウ)又は息子に對してタブーされた愛慾は幾つかの個々に分割された情夫に向つて注がれる。カルメン、マノン・レスコオ、高橋お傳などの悲劇は如上の父對息子コムプレクスの相剋から生まれて、愛憎相反並存(アンビヴァレンツ)の行動性として現れてゐる。椿姬だつて、アルマンに二人の愛の隱れ家をつくつてやつた時云つてゐる。——「あなたは仕合せよ。あなたの寢床を拵へてくれる人は百萬長者の公爵だもの」と。實際彼女にとつて、パトロン達は老い輝いた父であり、アルマンは胸に抱(いだ)ける一人息子に過ぎない。

此の點から云ふと、ワイニンゲルが賢(さか)しくも、女性を娼婦型、母性型の二に分けたのは、決して洞察ではない。なぜなれば、娼婦（「妖婦」をも含めて）は却つて「母性」的であり、母性が却つて、ウィッテルスも分析した如く「男

性の屬性」アニマスに充ちてゐるから。但、妖婦達の熾烈な對象愛は父コムプレクスが強いだけに、却つて、近親姦の抑壓が重く、只管血の遠い異性へサド的に向けられる。

一例を擧げれば、前述したイサドラ・ダンカンなどは、放蕩な夫に捨てられたカトリック信者の母親を抱へて舞踊界に立つた後、波瀾詩人ミロスキー、音樂家ネヴィン、畫家チャールス・ハーレー、貴族エインズリー、彫刻家ロダン、俳優ベレゲ、哲學教授ハインリッヒ・トーデ、名女優エレン・テリーの獨息子ゴールドン・クレイグ、富豪ピム同パリス・シンガー等と國際的な戀人群を弄んだ末、「結婚は女性の、同性への屈服です」と宣言して捨て去つた。が、四十三になつて、ソビエートの青年詩人セルゲイ・エセーニン(二七)と戀した時には、コムプレクス間の相剋に身悶えてゐる。息子代償になつたエセーニンには、踏んだり蹴たりされた。それでも彼女は、「踊れ！ 犬め」と叫ばれゝば犬のやうに踊り狂ひ、「おい貴樣！ 煙草を持つて來い！」とどなられゝば秋波を一ぱいたゝえた眼を上目使ひにしたまゝ氣嫌をとつた。毆られゝば此の纎弱な詩人の足下にひれ伏して「エセーニンは強いわ。とても強いわ」と涙にうるんだ聲を出した。そして或る晩、彼女が前の男達の形見になつた愛兒の寫眞アルバムに耽つてゐた時、泥醉した彼が歸つて來て、怒鳴りつけ、そのアルバムを奪ひとつて暖爐へ投げ込んだ。ダンカンは夢中になつて炎から、救ひ出さうとした。かうして、その晩からエセーニンは斷然彼女を捨てゝ立去つたのだと云ふ。其後間もなく彼は自殺し彼女は交通事故で死んだ。(君見ずや？ 此のコムプレクス相剋の宿命――)

「女といふものは危險なことを好むものだ。これは私が最も讃嘆する彼女達の美德であるが」――と、ワイルドが「詭辯」をなしてゐる。妖婦達は最も「女性」的であるだけに、確かに此の「美德」を發揮してゐるが、此の點、あらゆる女性は妖婦になる「可能性」がある。それはおそらく社會的階級的問題よりも寧ろ上述の通り家族生活的環境によつて――。

4　妖婦に母の面影がある！

ダンカンを無慘に殺した馬車は忽ち數十倍の市價で買ひ手に殺到された。何故に？
妖婦達は古今東西を問はず藝術の世界へ登場してアンコールを浴びてゐる。何故に？
大衆は決して「惡の華」の詩人でもない。寧ろ愚劣なほど盲目的な勸善懲惡主義者である。それにも拘らず、彼女達が、いろ〱意識的合理化工作を受けて、民衆の「巨母（マグナマター）」にも似た座を占めてゐるのは何故か？

×

男の對象愛の發展史に於て、母への「初戀」が破れ、普通の意味の初戀（或ひは現實的な童貞破棄）を體驗する時の相手の女性は、G・V・ハミルトンや故山本宣治氏の統計によつても年上の人が多い。殊に、山本宣治氏の調査によると、性交初行時の對象は、年上の女性が五一％（年下二四・六％、同年一〇・一％、不明四四・二％）を占めて居る。氏は日本に於る最も進歩的な生物學者だけに、此の調査の結論として精神分析學を説いて居られる。「（前略）その際の相手の最大多數が自分より年上である事は前にも述べたエヂプス錯綜の表現とも見えて興味が多い」と。（ロゴス書院版「山宣全集」第五卷『現代の兩性問題』參照）
初戀の對象については筆者も現代諸家の例を本誌第二卷第七號（「戀愛心理研究号」中拙稿「初戀ガイド」）に列擧しておいた。
斯くの如き現象は、意識心理的に母性纏綿を揚棄し、無意識的に母を目して、父（卽ち惡父）へ媚賣る女と見做ししかも尙、妖婦にも似た母の面影を追はねばならぬ無意識意圖から生じるのであらう。云ひ換へれば、此の心的外傷の體驗から、男性の無意識面には、母は妖婦であり妖婦は母であると云ふ公式が生れてゐる。
であるから、世上屢々見聞する、大學者が頽れた花の樣な一妖女の掌中に弄ばれるシチェエーション（「タイス」「鳴神」「ジーキル博士とハイド」「肉體の道」等及び多くのスキャンダル）も分析的批判以外には（特に當事者達にとつて）無意味である。まこと、彼等にとつては、その戀こそ何物にも換へがたい幼兒期少年期の空想を再び奪還（とりもど）し得てゐる欣びなのだから。

クララ・ボー

グレタ・ガルボ

これは、他の一面から云へば――批難を浴びせてゐる「第三者」達の心底にある限りなき嫉妬羨望を漏洩してゐるのだ。彼等は自分達こそ、嘗て自分を胸の中膝の上で玩具にしてくれた母の面影と戯れたいのだ。「悲しき玩具」になりたいのだ。

その一證に私は問ふ。――妖婦と云ふ姿を漠然と瞼に描いてみる時、諸賢はそこにどんなものをみるか。それは必ずや所謂纎細美（ミニヨン）なものではない筈である。何となくヴォリュームを持つ幻影‥胸は豊かに瞳は潤ひ、腕は抱くが故に逞しく艶かに伸びたイマゴー。少くとも、たより甲斐ある肉體である。（幻影への抵抗を感じる人の爲に、私は卑近な示例をなすに吝かでない。卽ち、映畫の誕生と共に同時に出現し變遷して來た所謂妖婦女優を數へあげてその幻影を鮮明にしてみやう。曰く――アラ・ナヂモヴ、ゼダ・バラ、ポーリン・フレデリック、ニタ・ナルディ、ポーラ・ネグリー、バーバラ・ラマール、クララ・ボウ、ケイ・フランシス、グレタ・ガルボ・メー・ウェスト等々、一人としてその例に洩れない。その他、日本情艶史に著しい色魔三代目田之助なども特に妖婦毒婦を當り役としたが、その似顔浮世繪や硝子寫眞をみると、實に、豊麗凄艶驚くべきものがある。）

此の妖婦表象は、女性からみる場合も殆んど大差はない。た

ゞ母は妖婦であり妖婦は自分である——と斯う云ひ得るかも知れぬ。なぜならば、女兒の母コムプレクス（エレクトラ）は母を憎悪した末母と同一化し父の寵を得んとする意圖をもつに至る事が多く、そればかりか、彼女達は常に、「宇宙の意志」として、母親になりたい空想を宿してゐる。そこで、筆者の經驗によれば、女優諸君が演じたい役は「妖婦役」ださうではないか。

かういふ經過をもつて、女性が妖婦となつた場合に、彼女達を支配するのはおそらく鬼子母コムプレクスである。群がる「愛兒」達を食ひ盡すことである。前に擧げた女靑鬚ヱラ・レンツィ夫人は意識的な理由なく卅五人の愛人を殺害して捕へられた時の訊問書に述べてゐる。

訊問官「なぜあんなに澤山の人を殺したのか」

ヱラ「男だつたからです。（微笑を浮べて）私はたゞ、あの人達が一度私を抱擁した後その同じ腕の中に他の女を抱くかと思ふと、さう思つたゞけで、もう、ゐても立つてもゐられなかつたのです」

訊「併しお前は自分の息子も殺害したではないか。此の理由はどう説明するか」

ヱラ「あの子も亦男でしたから。……そして男である以上、年頃になれば屹度私の手から去つて、他の女のもとに走るでせう。だから一思ひに殺したのです」

（驚くべし。彼女はかうして夫二人、息子一人、情人卅二人を殺したのだ。）

これには、勿論、意識的な嫉妬もあるに違ひない。序でに、世の愚劣淺薄な犯罪研究家に告げる。例の本郷日大生殺し等は、その「兇暴な」母や妹の告白によると、被害者が放蕩者で娼妓や喫茶ガールや看護婦などへリビドウ方向を走らせてゐた事に對する憎惡こそ此の事件の最大の「動機」であらう。そして、近親愛を拒否した者こそ喰つても飽き足りない。そんな冷淡な浮氣者は金（家族制度を資本主義制下の個人主義から死守する最後の金）に換へてしまつた方がいゝ——これが意識的工作を遂げた第二の動機である。そして、此の嫉妬に加ふるに、もつと本質的な愛憎二元の鬼子母コムプレクスが存してゐる。

妖婦はこの無意識目的をなし遂げるに、最も手易い位地にある。彼女は近親姦のタブーをもたぬから、エロスと破壞とを兩立させられる。生の本能と死の本能とを戯れの中に滿すことが出來る。

こゝに、妖婦の危機（操る者操られる者の天國地獄）がある。それをも恐れず、今も尙妖花が咲き誇り、その色香に人皆魅かれて行く。が、これこそ止み難い對象リビドーの宿命、快樂原則の業（がふ）である。たゞ僅かに、妖婦の魅力が現實化された感傷愛「遂げられし近親姦」であることを分析によつて悟得すれば、何となく溺れて行くローレライ漂ふ淵の深さが分るであらう。

アナトール・フランスの「タイス」の中に、聖なる修道僧パフニュースが叫んでゐる。彼は淫蕩な異教徒たる娼婦タイスを救はうと苦心し、到頭タイスを悔ひ改めさせた。が、その頃は却つて彼の心が此の妖花に魅かれてゐたのだ。そしてタイスが安らかに死の床へついた時、叫び出す。

「タイスが死んで行く！ あの女は肉の花と芳香とを綯（な）ひ交（ま）ぜたその兩腕を開いて俺（わし）を迎へやうとしてゐたのだ。それなのに、わしはあの女の露はな乳房の云ひ知れぬ魅惑の中へ身を沈めやうとはしなかつた。」「タイスが死んで行く！ おゝ！ あの女が死んだら、わしはまあどんなに手易く死ねるだらう。だが、干乾びた胎兒、膽汁と涸れた涙との中に萎び果てた胎兒のわしよ！ 汝に死ぬ事などが出來るか。みじめな生れ損ひ奴！」

そして彼は臨終の妖女をかき抱き涙に濡れてかき口説く。が、彼女は叫ぶ。「惡魔よ去れ！」と。「胎兒」の感傷愛（ツェルトリツヒカイト）に耽る幾つかの折をもつ諸賢よ。この對立せる叫びを以て妖（あや）しき淵をはかり給へ！

妖婦の近代性と社會性

北山　隆

現代日本の小説家が毎月むやみに製造する戀愛小説の殆ど全てが、「純情の處女」と、「花の如き妖婦」の對立をテーマとしてゐる事は、男性が由來この二つの型の女に最も興味を持つ證據である。無意識心理を動搖させるエディポス・コンプレクスは、必然的に全ての男をして、その母を（ひいては全ての女を）、聖母に祭り上げるか、或ひは妖婦に蹴落させてしまう。母に對するこの二面觀は決して截然相分れる物でなく、全ての個人に常に並存し、無意識裡に於て相通じてゐる。勿論、性的方面を全然撥無し去り、自分のみを不斷の精神的慈愛を以て包んでくれる聖母、聖女への興味と、他人（父）の物であり乍ら時にはコケトリを時には冷淡を示して、恐しい性的刺戟を與へる妖母、妖婦への興味との比較的割合は各人各樣であつて、その傾向が一方にのみ甚しく、爲に正當な社會生活の出來ない樣な場合に始めて重大問題となるのである。

こゝに筆者は、右の關係が現代社會に如何に表はれるかを些か論じて見る。

凡そ文明なる物は各個人の性的欲望を出來得る限り禁壓し、之を社會的な仕事に昇華せしめる事によつて生ずる。（「社會・宗教・文明」、「分析戀愛論」參照）卽ち、極端な文明は人類の絶滅を招來する譯だ。そこで、この半世紀來、着々文明的教育を實施し來たつた我國では（我國に限つた譯でないが）人口こそ增しはすれ、近來頓に青年子女の性的健康が失はれつゝあるのは、當然の歸結であらう。戀愛至上主義の横行、不能不感及び男女のヒステリー氾濫、九

條武子やドロテア・ウィークの崇拜、「天國に結ぶ戀」、「處女妻物語」の流行、同性愛の勃興等、全て之を語る物ではならうか。

しかし、この聖女禮讃は個人心理に於ても、家庭に於ても、攻擊抑壓を蒙る事が少い故、右の樣な形での社會的湧出も、さう猛烈を極める譯ではない。處が、之に對應する妖婦への興味は、個人的無意識からは固より、家庭的道德からも甚しい非難禁壓を浴せられるが故に、その殆ど全部は社會的現象として外部へ飛び出す。公娼私娼の繁昌、世界に誇る(?)カフェー、ダンスホールの發達が、即ちそれである。さうした享樂が全て幼時の母子關係の復活であり客が子供扱ひにされる事を喜ぶのは誰でも知つてゐるが、それと同時にあの不可抗的なカフェーの魅力も、彼等には實の所、それ以上の苦痛なのだ。脅迫的懲罰要求的享樂！　然り、あのネオンサインに浮ぶ龍宮城の乙姬達は、今こそ我と膝を接し、手を握り、唇を許すとも、次の瞬間には、來り集る全ての男共に――汚らはしいビール樽のオッサンにも、ニキビ學生にも同樣の嬌態を賣るのではないか！。しかし青年は言ふ。「ハートのない木偶令孃、ボロのつぎはぎの外、日課のない老母達には、何だか傍に居たゝまれない樣な尊敬に似た嫌惡を感ずる。」中年者は言ふ、「オシメに追はれ通しの味噌くさい、しなび切つた奴、――何と言ふ艷のない皮膚、おゝ、それが、あいつだ！」そして彼等は、永久に獨占し得ぬ、常に滿足なき悲劇的對象を漁り續ける。

現代人の妖婦に對する強い――否、強すぎる興味の心理的原因は何か？　第一に母性愛の美名に隱れた、男の子に對する、(特に長男及末男)母親の過度な愛情。第二に、女性美撲滅機關たる女學校の聖女製造を指摘しよう。實際今日の母親は男の子を可愛がりすぎる。その目に餘る實例は近所近在に充滿してゐる。一にも二にも母親でなくては動かない此の幼兒的男性の結婚生活は必ずや不幸に終る事、即ち彼は正當に他人の所有なる女(多く年長の)にしか性的魅力を感じないであらう事を豫想する事が出來る。その上、餘りの抑壓に自然的な性愛技巧まで、すつかり失つてしまつた令孃、若妻が、右の傾向を甚しく助長しつゝある事を斷言する。

こゝに妖婦、聖母、聖女、恐しき父等の關係を明かにする爲、典型的物語としてメリメの『カルメン』とドーデェ

の『アルルの女』の場合を詳論しよう。その中の一場面一事件を始め一語一句に至るまで悉くが意味を持つてゐる事に注意して戴きたい。

何人も知る妖婦の總本山、カルメン！ その原作はメリメだが、ビゼェ作の歌劇としての方が遙に有名だし、物語もづつと明白に面白く出來てゐるから、この方を採る。（作詞、メイラック・アレヴィー）

スペイン、セヴィールの町、煙草工場前の龍騎兵詰所にドン・ホセといふ伍長がゐた。おとなしい美男で、故郷には病める優さしい母と純情の許婚者ミカエラが彼を待つてゐた。或日、煙草工女をしてゐる惱ましいジプシーの女、カルメンが赤い花を投げつけて彼を誘惑して以來、その姿は強く心に燒つけられてしまつた。其後、傷害の罪でカルメンを捕縛に行つたホセは故意にカルメンを逃がし、その罪によつて二ケ月の營倉を喰ふ。刑を終へた彼は、ある酒場でカルメンに會ふ。そこで龍騎兵隊長スニガとカルメンを張合つて之を倒し、遂に脱營してカルメンと共にジプシーの密輸入團に加はる。しかし浮氣なカルメンの心は既にホセの上には無かつた。セヴィール第一の闘牛士エスカミロ。カルメンをがつしり抱いたのは彼であつた。ジプシーの山塞でホセとエスカミロは決闘し、カルメンはエスカミロを助けて逃がす。カルメンは別れ話を持出す。そこへ、田舍娘ミカエラが遙々訪ねて來て、ホセの母親の危篤を告げ「すぐ歸れ」と言ふ。昔の戀人の口から母の名を聞いた彼は惱み悶えて「構はないでくれ、之が因縁なんだ。」と言ひはしたものゝ、遂にミカエラの手を取つて山を下る。しかし抗し難いカルメンの魅力は最後まで彼を驅立てた。セヴィール闘牛場の前でカルメンを捉へた彼は復縁を迫るが、てんで相手にされない。闘牛場の中から「エスカミロ萬歳(ヴィヴァ)！」の聲が聞える。ホセを振切つて行かうとするカルメンはパッタリ倒れる。途端に綺羅を盡した闘牛士の一行と喚呼する群衆が場内から流れ出る。茫然カルメンの屍を見守るエスカミロ。短刀を投棄て、がつくり膝をついて屍を抱くホセ。

「どうでもしてくれ！ 俺が殺したんだ。あゝカルメン！ 愛するカルメン！」

「アルルの女」には同一作者による短篇に戲曲があるが、後者の方が詳しい。

南部フランス、ロオヌ河のほとりにカストレといふ舊家があつた。年老いた祖父と、十數年の後家を通して來た母ローズと、漸く廿歳になつたフレドリ。美しい、勝氣な、親思ひの彼は最近、戀の悩みに狂はんばかりの有樣であつた。近くのアルルの町で見たコケティシュな女を彼は欲した。何とも手がつけられないので結婚させる事にして其の前祝の時、その女の情人ミチフィオが現はれて脅迫的に既得權を主張する。表面、思ひ切ると言つたフレドリは終日沼のほとりにさ迷ひ、夜はベッドに泣明かした。心痛にやつれた母親は以前から彼を熱愛してゐる可憐な娘、ヴィベットの尻押しをして彼の心を捉へさせ樣とするが、「正直な女なんか有物か！」と彼は見向きもしない。「お前、どうしてもあの女が欲しいなら、あれを御貰ひ。」思ひ餘つた母は言ふ。

「そんなにまで僕の事を心配してくれるのなら、益々あの女とは結婚出來ません。」さう彼は言つて「このヴィベットなら家の娘と呼ぶのにふさわいでせう。」と彼女を抱く。母も家の人も漸く安心して、樂しい婚約時代が續く。しかし、通り魔の樣にミチフィオが再び現はれた時、彼の心は再び錯亂した。ミチフィオを町の金持だと信じてゐた彼が、初めてその正體を知つた時、彼は叫ぶ。「百姓だ！　俺と同じ百姓だ！」そして大槌を執り、「彼奴を先に、そしてアルルの女を！」と躍りかゝるが家人に押留められる。その夜、母の目を盜んで起上つた彼は三階へ上る。「どうしても俺は生きてゐられない。いつも、あの女が彼奴に抱かれてゐるのが見える。女を奪つて行く。女を抱きしめるあの男が！…」そして母の絶叫を後に、窓から投身する。翌朝、村中を驚かせたのは、愛する息子の屍を抱いて、胸も露はに泣き叫ぶ母親の聲であつた。

この二つの恐しい物語が、微細な點まで一つ〳〵合致するのには全く驚かされる。その共通なテーマをたどると左の如くである。

父を早く失つた一人息子（フレドリには弟が一人あるが白痴(インノサン)である。）若後家から盲愛を受け、子供としてと同時に夫としての取扱を受ける。ローズが「私はあの子の事ばかり思つてゐるのだよ。あの子は私にとつて子供であるばかりじやない。あれが、だん〳〵父親の樣になつて來るのが見えるのだよ。私があんなに愛した連合ひが、今あの子

の大きくなるに連れて私に返へされて來る。」と、さへ言ふ。漸く成年に達して性對象を求める時、果然、札つきの男たらしに戀着して、自分より肉體的社會的に優秀な男と爭ひ自分の名譽も地位も棒に振つてしまう。さう云ふ戀が身を誤まるであらう事は自分でもよく承知して居乍ら、父の物なる母を獨占したいと言ふ欲望と、それに對する懲罰要求の強いコンプレクスの爲にどうしても清算し得ない。「構はないでくれ、之が因緣なんだ。」と言ふホセの言葉を我々は「コンプレクスなんだ。」と言ひ換へる事が出來る。聖母の愛に食傷してゐる彼等は今更、母の分身なる聖女を愛する事は出來ない。そして遂には戀敵（父）妖婦（母）自分の中の誰かを殺さねば納りのつかないカタストローフに陥る。この關係を表示するなら――

幼兒的な若者	ドン・ホセ	フレドリ	聖母（寡婦）	病める母	ローズ
妖婦（性對象）	カルメン	アルルの女	恐しき父（戀敵）	エスカミロ・スニガ・ミチフィオ	
聖女（母親の分身、感傷愛の對象）	ミカエラ	ヴィベット			

制御する必要こそあれ、煽り立てる必要のない母性愛を無茶に強調する現代の御座なり教育は未來に於て、ドン・ホセ、フレドリの類ひを――いや、そんな芝居掛りに美化されぬ下らない御坊ちやんを益々ふやすに違ひない。文學としては常に我々を感動させるテーマでも、之を地で行くのは決して美しくも樂しくもなく、又決して賢明な策でもない。（最近モダンガールの結婚觀を聞いて見ると、皆、申し合はせた樣に「中年以上の金のある堂々たる男でなくちやと言つてゐるが之では妖婦の代りに妖父の研究を考へねばなるまい。」尙ほ面白いのは、この『カルメン』、『アルルの女』が共に大音樂家ビゼェによつて作曲されてゐる事で、それが數少いビゼェの作品の九分以上（量、質に於て）を占めるだけでなく、音樂の全領域に於る最高峰である事。ビゼェがよりによつて此の二物語に注目した事。表面は地味で淡白な彼の內向的な性格。彼が師事したアレヴィーの娘と結婚してゐる事。兩親が共に好人物であつたらしい事等からして、藝術家の作品と其のコンプレクスとの關係を暗示し得る樣に思はれる。（完）

母性愛と妖婦愛

大槻憲二

一、母性と妖婦との關係

舊來の考へ方に依ると、母性（マリア、觀音、吉祥天、天女）と妖婦（毒婦、淫婦、惡母）とは相反對立する二觀念であつたが、觀念は同一物からその二樣相を無關係のものであるかの如くに區別することを得意とする。然るに科學として當然、事物を具體的に見るところの精神分析學立場からすると、これ等二者は必ずしも對蹠的なものではなく、一物の必然的二樣相、又は二顯現に過ぎない。マリア、觀音、辨天、吉祥天、天女等の間に、また毒婦、淫婦、妖女、惡母の間には、勿論、歷史上、概念上、意識的、常識的の區別は存する。併し心理學的に深くこれ等を研究して見るとき、しかく截然たる區別を下すことが出來るかどうかは甚だ疑はしいのである。

歷史上、概念上、常識上の區別を與へることが不必要又は無意味と云ふわけでは決してない。併しそれ等區別の意義と價値とは、飽迄もそれ等の立場に即しての意義であり價値であつて、深い學問的（心理學的）意義と價値とを直ちにそこに認めることは困難であると云はねばならない。

例へば、現に、かの有名な山城國淨瑠璃寺の吉祥天女像をとつて御覽なさい。あの清淨な、併し同時に蠱惑的な、あの威嚴のある、併し同時に艶麗な、あの冷徹な、併し同時に肉感的な、一言以て掩へば、あの極めて神的で同時に人間的な女神の姿に、我々は母性的なものと共に妖婦的なものを並せ感得することは何としても否み難い事實ではないか。この吉祥天女の像はその原作は勿論、淨瑠璃寺に安置せられてあるが、その模作が厨子の中に這入つて上野の

東京美術學校文庫附屬陳列館に藏せられて一般の自由な觀覽に開放せられてゐる。讀者諸氏もし興味あらば是非同館に赴いて一覽せられよ。併し餘程心を引締めてかゝらないと、恍惚我を忘れるであらう。呵々。寺傳では聖武天皇御作となつてゐるが、藤原時代のものとの說に私も左擔したい。

本號口繪にはこの天女像と柴田環女史像とを並せ揭げておいたが、この二面の圖に於いて讀者は何等かの共通點を發見せられないであらうか。環女史は旣に僅か六十歲に近い老婦人であるが、さうしてこの肖像に於いては流石にその年齡者らしい威嚴と落着きとを示してゐるが、併し同時に見樣によつてはこの肖像は十代の少女の像の如くにも見られる。實際、その服裝の模樣や色合（それはこの寫眞では分らないが、その模樣の具合からして大體想像することが出來る）は十代の少女のものである。何と、女としての若さへの憧憬と願望とをこれほど露骨に、これほど端的に表現し實行してゐるものはないであらう。一言にして盡すと、女史は母性妖婦の一典型とせられ得るであらう。（學問的な意味で云つてゐるのであるから、個人的には或は失禮に當るかも知れないが女史の理解ある寬恕を切に乞ふ。）

一　母性象徵としての鬼子母

吉祥天女は佛像であるが、生きた人間にさう云ふ天女的妖婦を求めるならば、某國に佛教を輸入した××××であらう。その肖像が××寺にある。私はそれを見た。肉感的聖女として吉祥天型である。彼女は身一國のクキンと仰がれながら、さうして佛教弘通の聖祖と仰がれながら、三千人の男に接したと云はれてゐる。（中山太郎氏報告）併し勿論かう云ふ話は單なる傳說であつて、事實〆う云ふことがあつたとは信ぜられない。が、たとへ傳說（客觀的には否事實）にもせよ、さう云ふ空想が民衆の間に起きたと云ふ事は、民衆の主觀的現實であるから、やはり否定すべからざる心理的事實である。卽ち、少くとも民衆は、一世の母イマゴーとして彼等が仰ぐやうな偉大な女性に對しては、彼女等が多數の男性と交渉を持つと云ふ事を空想、又は願望するのである。ところで、私がこゝに「交渉を持つ」と云ふ表現を與へた觀念は、必ずしも男女間の性的交渉と云ふ狹い意味のみではないのである。交渉とは關係の義であつ

て、こゝに於ける意味は男女間の交渉を意味するのである。民衆は偉大な女性に對して、それと性的交渉を持つたと空想し、又は持ちたいと願望すると同時に、自分等か齊しく彼女の子であると妄想とするのである。これ等の空想と願望と妄想とを具現したを思はれる傳說や昔話は他に隨分多く語られてゐて、獨り×××の場合のみではない。

併し右は民衆の主觀的母性卽妖婦觀であつて、女性に於いて果して客觀的にさう云ふ矛盾した二面の性質が並在してゐるかどうかと云ふことは別問題である。然るに、こゝに面白いのは、甞て長谷川誠也氏が根岸腦病院を訪問せられた時の觀察に就いての報告である。その時、氏が見られた婦人患者の中に、自分は世界中に幾億人の子供を持つてゐると語つてゐる者を發見せられた。これは勿論彼女の空想であるが、空想は偶然的に起きるものではなく、願望から必然的に生れ來るものである。故に、さう云ふ空想の存在は心理根柢にさう云ふ願望の存在してゐることを意味してゐる。かゝる願望は勿論一般の健康な婦人に於いても存在してゐることを豫想せざるを得ないが、健康者たちはその强健な自我と理性とに依つてさう云ふ空想を統制し得てゐるがために、さう云ふ表白をしないのであるが、彼女等もその無意識裡に於いてこれと同じ願望を頒前してゐると云ふことを必ずしも否定することは出來ない。それは多くの少女たちの卒直な表白に於いて證據を捕へることが出來る。七、八歲の女兒の云ふところを聽いてゐると、家內中の者等が自分の子供であると云ふ空想を述べてゐることが屢々である。家內中どころか世間に自分の子供が澤山にゐると空想してゐる。就中、自分の父親を自分の子であると空想し願望することは、最も顯著に現れる。（本誌第二卷第六號、戀愛心理研究號、一六頁參照。）

然るにかう云ふ女性心理は、我々に一つの佛教傳說を聯想せしめる。それは鬼子母神、又は訶梨帝母に關するものである。鬼子母と云ふのは異名で、訶梨帝母（歡喜の意）は本名であるらしい。或書には「五百鬼子の母なるを以て鬼子母と云ふ」とあるが、他の書には子供の數一千と云ひ、また別書には一萬とも云ふ。何れにせよ、多數の子供と云ふ意味に外ならない。『毘奈耶雜事三十一』に詳しく傳してかく說いてゐる。

「往昔、王舍城中に獨覺佛世に出づ。爲に大會を設け、五百人ありて各身を飾り共に芳園に詣る。途中懷妊の牧牛女

酪漿を持して來るに遇ひ、同じく園に赴くことを勸む。女之を喜で舞踏し、遂に胎兒を落す。諸人等捨てゝ園內に赴き、女獨り止まりて懊惱す。便ち酪漿を以て五百の菴沒羅果を買ふ。獨覺佛の女の傍に來るを見て頂禮して之を供養し、一の惡願を發す。曰く、我來世、王舍城中に生じて盡く人の子を喰はんと。此惡願に由て、彼れ身を捨てゝ後王捨城娑婆藥叉の長女に生れ、犍陀羅國の半叉羅藥叉の長子、半支迦藥叉と婚して五百の子を生み、其の豪强を恃みて日日王捨城の男女を食ふ。佛方便を以て鬼女の一子を隱す。鬼女悲嘆し求めて遂に佛邊にあるを知る。佛曰く、汝五百子を有するも尙一子を憐む。況や餘人の一二のみなるをやと、之を敎化し五戒を授けて鄔波斯迦とせり。鬼女曰く、今後兒の食すべきものなし。佛曰く、憂ふるなかれ、我が聲聞の弟子に於て食次每に汝及び兒の名を呼び、皆飽食せしめん、故に汝我が法中、伽藍及び僧尼を勸心擁護せよ。鬼、兒と共に歡喜す。」と。（『佛敎大辭典』に依る。）

　このやうに歡喜するので彼女は「歡喜」（訶梨帝母）と名付けられたのであつたらうと私には想像される。傳說主人公の名前は屢々象徵的又は說明的なものであるから――。訶梨帝母の種々像を見ると、一兒を懷にして吉祥果（石榴）を手に持つてゐる姿に描かれてゐるものもあるし、數兒を周圍に侍らせて同じく手に吉祥果を持つてゐるのもある。この石榴は一花一房にして極めて多數の實を生ずるものであると考へられた點で、多數の子供を持つてゐた鬼子母の象徵ととなつてゐることは明かであるが、他方にまたこの果實は人肉の味がすると日本では云はれてゐる（果してさうであるかどうか、人肉を喰つて見てことのない我等には分らないし、またこの說が日本にのみ存在するものか、古代印度にも存したものか、私には分らないが）に徵して、或は鬼子母の殘忍性（人肉嗜食、吸血鬼性、妖婦性）をも象徵してゐるかも知れない。何れにもせよ、この吉祥果が鬼子母の種々な性格を象徵してゐるものであることは殆ど疑ひの餘地がなさゝうである。

　さて、鬼子母は何のために大勢の他人の子を喰殺したのであらうか。『毘奈耶雜事三十一』の傳ふるところでは、彼女が前生に於いて出產した時に諸人が彼女を顧みずに、おいてきぼりにして園へ赴いて了つたゝめの怨恨であると云ふことになつてゐるが、どうもこの復讐の理由と方法とは辻褄が合はないやうに私に思はれる。假りにそんな見當

違ひの怨恨がないにしても、五百人も千人も子供を持つてゐたのでは、他人の子でも何でも手當り次第取つて喰はねば第一、食料の點で一同餓死せねばならないかも知れない。併しそんなら野菜や果實を喰へばよかつたらうと云ふ理窟も立つから、畢竟、これは鬼子母が自分の子供ばかりを世の中に殖やして他人の子はこれを絶滅させたいと云ふ非常にエゴイスティックな母性本能を具現してゐるものとも解せられる。かう解釋することに依つて、甫めて、釋迦が彼女の一兒を捕へることに依つて他人の母子愛を彼女に思ひ知らせたと云ふ話の筋も一層生きて來るわけである。つまり、釋迦の教へに依つて、自分の子ばかりでこの世を占領せずに、他人の子にもその存在權を承認すると云ふ方針に轉向したわけであらう。併し假りに幾ら肉食主義から菜食主義に轉向したにしても、千人二千人と子供をふやして行つたのではこの轉向もやはり怪しくなり、また元の默阿彌に逆轉しないとは限らない。釋迦に折伏されたと云ふことは、自分の子供を無暗に多くしないやうに、適度のところで留めておけ、つまり産兒制限を命ぜられたのだと見ても大過はないであらう。つまり釋迦は、或る意味では、産兒制限の元祖であると云へる。併し釋迦の制限論は肉體的制限論ではなく精神的制限論であつたのである。

無數の子供を持ちたいとの本能、これこそ母性本能の最も端的な表現でなくして何であらう。つまり、鬼子母は母性本能の象徵である。もし現實の人間がこの鬼子母本能をそのまゝの形で滿足させようと思ふならば、鬼子母同樣の苦しみ、罪惡に陷らねばならない。併しそれには第一、母親の肉體がそれほどの多産には堪えられないであらう。第二には經濟生活が破綻を來すであらう。古代人に於いては肉體はもつと强健で、經濟生活も自然物の採取に依つて支持せられてゐたやうな單純なものであつたから、鬼子母本能も近代に於けるよりは、或はもつと十分に充足せられ得たであらうが、文明が進むに從つて生活は世智辛くなつて來るから、そのやうな原始本能はなか〳〵十分な充足の機會を與へられない。現に、文明國ほど出產率の低下を示してゐるのが事實である。

三　妖婦象徵としての鬼子母

併し以上のやうな精神的産兒制限說では、鬼子母傳說の解釋としては何となく物足りないものゝあることを讀者諸氏は感ぜられるであらう。何となれば、鬼子母は他人の子供たちを自分の子供達に喰はせるのではなくて、自分一人で喰つてゐるのであるから、そこには單に食料問題としてのみ片付けることの出來ない心理的契機の存在を豫想せずにはゐられないからである。

そこでも一つ考へを進めて、もし彼女が釋迦に折伏せられずに、彼女の本能の赴くまゝに放置せられ、世界中の他人の子供等を全部喰ひ盡して了つたならば、その曉に於いて彼女の喰人本能はどうなつたであらうかと言ふ事を考へて見る。さうすると、彼女の喰人本能は一つの大きな障害に打ちあたることになる。彼女にとつてはその本能を放擲すべきか、或は自分の子を喰つて行くかと云ふディレムマに打つかることゝなるのは必然である。もし彼女が無數の他人の子を喰ふことをやめてしまつたならば、彼女の無限大の生產力も同時に停止してしまひさうに思はれる。何となれば、現に、大地自然もまた無限大に澤山の種子を喰込むことに依つて無限大に澤山の果實を生產するものだからである。澤山の子を產むためには、澤山の種を仕入れねばならない。鬼子母の偉大さは、その大地自然の如き偉大な抱擁力と偉大な生產力とにあるやうに思はれる。人類の偉大な母も原型たるこの大地自然の如く、無限大の抱擁力と無限大の生產力との權化でなくてはならないであらう。

さて、こゝまで考へて來ると、母性象徵（權化）としての鬼子母の本質はやゝ明白になつて來たやうに思はれる。彼女が無限大に貪食した他人の子と云ふのは上下兩口（孔）の轉位錯綜への分析解釋に基き、實は子胤（男）に外ならなくて、彼が無限大に生產した子供と云ふのはその子胤を自己胎內の卵子に受けて分娩したものに外ならないと云ふわけになつて來る。故に巨大なる母性は巨大なる妖婦と同じものであると云ふことなつて來るが、併し鬼子母は大地自然ではなく、原始人間の象徵であるとすれば、そこに旣に人類としての社會的、倫理的制約を受けねばならないことは當然である。この社會的、倫理的制約の象徵が釋迦の折伏となつて表現せられてゐるのだ。卽ち釋迦が他人の子を喰ふことを禁じたことは、彼女に貞操を敎へたと云ふ意味に外ならないであらう。

こゝまで考へて來て、も一度以前の×××が三千人の男子に接したと云ふ傳説を想起して御覽なさい。それは鬼子母が澤山の男兒を喰つたと云ふことゝ同じ意味で、共に無限大の子胤を仕入れて無限大の子孫を生産する巨大な母性であると云ふ意味に外ならないと云ふことが明かになつて來るであらう。

四　鬼子母と吉祥天女

さて、このやうに、巨大なる母性＝妖婦としての鬼子母の本質が明かになつた時に、も一度さきの吉祥天女を參照考究して見ると、我々には一層種々なことが明かになつて來るやうに思はれる。第一、鬼子母が手にする彼女自身の象徵たる石榴に「吉祥果」の名の與へられてゐるさへ、我々には何となく氣懸りになつて來るではないか。

吉祥天女は『佛敎大辭典』に依ると、「舊稱功天、新稱吉祥天。本來婆羅門神なりしを佛敎に取入れしもの。」とあるが、別の書には本來、印度神話中の人物と云ふことになつてゐる。「父は德叉迦」、母は鬼子母」と云ふのだから、やはり母の氣質を受嗣いて巨母性、妖婦性の豐かであることは否定出來ないであらう。「毘沙門天の妹にして功德成就して大功德を衆生に與ふ。」と云ふのだから、鬼子母の原始本能を昇華して、その社會現實に適應したる貞操的聖母の典型となつてゐるものであることは明かであらう。「或は曰ふ、毘沙門天の后妃なりと。然れども、確乎たる經軌の說なし」とある。

また「吉祥天を以て毘沙門の后妃とすることに關しては、台密には毘沙門吉祥の双身法あり。一方、犍達羅の刻像中には男女の二天を相並べて毘沙門天と鬼子母神なりとせるものあり。刻像の考證經過不明なれども、或は時に吉祥天と辨財天と混同する如く、鬼子母神と吉祥天と相混じたるに非ざるか。初の屬性は毘紐卽ち那羅天后たりしは明かなりとす。」ともあるから、結局、鬼子母も吉祥天も辨財天も、その發生の歷史的契機はともかく、人類の心理的契機に於いては同じもの（母のイマゴー）に外ならないことは否定すべくもなさゝうである。

また吉祥果に關しては、同じく『佛敎大辭典』は「鬼子母の掌に持つ果の名。石榴を以て之に充つ。」とあり、ま

た『鷹峰群談五』に依れば、「問曰、鬼子母所掌吉祥果、或爲之石榴、是乎不也。答曰、有云。吉祥果西方有之。此間無矣。畫像方式云、吉祥果如栝蔞（カラスウリ）。黄赤色。此方所無之。已下憶是以石榴吉祥果耳。則石榴一華多果。一房千實者、因謂鬼子母千子母也。故愛此菓遂擬吉祥果也。」とあるから、吉祥果が鬼子母の巨母性と多產性との象徵であることは、昔の人も殆ど意識してゐたところで、必ずしも分析學徒の附會でもなければ新發見でもないのである。

このやうに鬼子母や吉祥天女に於いて象徵せられてゐる巨母性は、必然的に多產性と云ふことゝ、その必然的豫想として多淫性と云ふことを包含してゐるのであるから、現代の母性（女性）に於ていても、その文明的洗練（抑壓、昇華）を洩れた原始本能は自然、多淫性、多產性となつて勃發せられなければならないことになるのである。

このやうに原始的な形で鬼子母本能が滿足せられない時には、この本能は別の形で――もつと文明的な形で、もつと社會生活に適應した形で――滿足せられるやうになる。例へば、他人の子を自分の子として取扱ひ、或は育てることの出來るやうな職業や仕事（媬母、先生、孤兒院、幼稚園の經營など）である。で、かう云ふ方面の仕事に携つてゐる人々は男女を問はず必ず母親型の人々である。私は多くの幼稚園長や女學校長を知つてゐるが、純粹に生活の手段としてゞなく、永く天職として（或は本能的慾求に從つて）それに從事し、さうして相當成功してゐるやうな人々は、大抵は必ず母親型の人、又は母親型の一面を強く持つてゐる人々である。

その他、女性に於ける母性本能（多產性と妖婦性）とが、如何に種々な形で表はれるかに就いて多くの實例を擧げて說明すると面白いのであるが、只今は餘白がないからこれだけに止めておく。（完）

自殺に現れたる文化の不安

土屋秋實

(「不安」の克服)目次

(B)自　殺

「新年は冥土の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし。」とは一休禪師の言葉である。蓋し、一年は人生行路の縮圖であり、而して、一年を形成する單位たる一日は其の尚ほ一層小さき縮圖である。更に一日において、晝は夜と、夜は晝と交替しつゝ(反對物への辯證法的轉化)、春は夏に、夏は秋に、秋は冬に交替し、斯くして一年を形成する。そして、地上に生を享くる全てのものは、春において開花し、夏において成長し、秋において結實し、冬に到つて死滅するが如く、人生においても、青年期において成長し、壯年期に到つて成熟し、老年期において完成し、然るのち死の靜寂に安住するに到る。一年は斯かる人生の縮圖であり、一日は其の一層小

さき縮圖である。

而して、「戀と飢とが汝の前に立つてゐる。これ雙生兒、生きとし生けるもの丶二つの礎。生きとし生けるもの皆食を求めて働く。そして後繼者を生まむがために食ふ。戀と飢と、その目的たるや一つである。それは、自分の生命も、他人の生命も、生きとし生けるもの丶生命を絕やさせまいとするにある。」（ツルゲネーフ）といふ事は、すべての生物に妥當する客觀的眞理である。

然るに、こ丶に飢（食慾）とは個體保存本能の謂であり、戀（性慾）とは種族保存本能の謂であり、且つ其等は其の本質に於ては、前者は死の本能であり、後者は生の本能である、と言ふ事が明瞭であるが故に、生物の一生とは畢竟、生の本能と死の本能との對立、鬪爭の過程であり、兩者が相互に反對物へ辯證法的に轉化する過程に他ならない。而して、男性は女性に對して主として人間の生本能を代表し、女性は男性に對して主として人間の死本能を代表しつ丶、兩者は相互に補足し合つてゐる。男性の積極的能動性（抑壓を受けると、これはサド、窃視症、優越感となる。）及び女性の消極的受動性（抑壓を受けると、これはマゾ、露出症、劣等感となる。）はこ丶に由來する。併し、斯かる規定は、絕對性を有するのではなくして、單に相對性を有するに過ぎぬ。何故なれば、すべての人間は或程度において兩性具有的であつて、絕對的男性及び絕對的女性は抽象的思考における以外には存在しないが故に。

生死兩本能の卽自體としての單細胞生物の狀態から、種々複雜な段階を經過して到達し、且つその結果として生死兩本能が分裂して對自態にあるところのものが、卽ち複細胞生物の狀態であり、而して、それは、その生死兩本能の鬪爭により、二つの卽且對自態へ統一せられる。——一は個體發生的のそれであり、他は種族發生的のそれである。卽ち、前者は、後繼者の生殖及び死の狀態としての無機物への還元であり、後者は、遠き未來に於て發生するであらうところの、生物的存在形態より一層發展せる物質的存在形態へ生殖細胞とゾマとの從つて精子と卵子との卽且對自態として統一せられるであらうところのものである。これらの過程の自然的な移行が、生物の辿るべき正常的行路である。

從つて、自殺とは、生物が其の辿るべき過程を飛躍して直接に死の到着點に到達せむがため、その手段として故意に其の肉體を破壞するところの異常的行路に他ならない。而して、自殺は、生物がその辿るべき行路に於てその構造を以てしては最早堪え得られざるが如き異常なる困難に直面せる際に、發作的に或は計畫的になされる。

而して、高等動物としての人間においては、すべての行爲はその心理を媒介として意識的に或は無意識的になされるが故に、自殺についてもその心理學的研究が最も重要になる。

吾々人間が現在その人生行路に於て、自然的還境からと、社會的還境からと、肉體的還境からと、心理的還境からとの、四つの方向（これら四者は相互に關聯しつゝ一定の時代を構成してゐる。）からの異常なる困難に直面すると、この壓力によつて心理的機構に所謂抑壓が發生するため、自我は必然的に幼兒的＝野蠻人的段階へ退行するに到る。而して、その段階における性的リビドーの特徴は自己色情及び罪障感を伴へる近親姦願望であり、且つ前者に相應してナルチスムス（サド的＝マゾ的、窃視症的＝露出症的、優越感＝劣等感）があり、後者に相應してエディポス的アムビヴレンツと感傷愛、及び死の願望と死の恐怖感がある、これらが卽ち神經症的心理の特徴である。

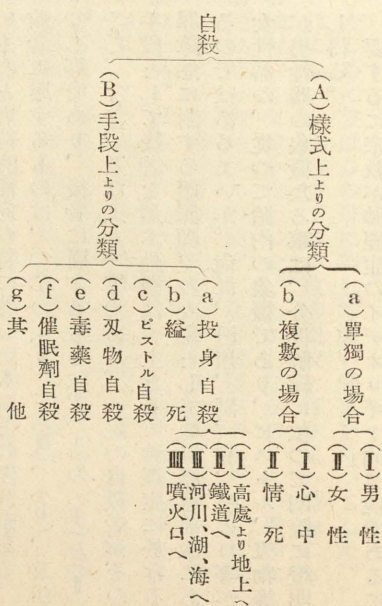
斯かる心理狀態においては、生の本能と死の本能との自然的な鬪爭、從つて、正常的性生活及びリビドーの昇華としての社會的活動が少くとも困難となる。抑壓によつて外界への出口をとざゝれた斯かるリビドーは、竟に出生以前の胎内的段階にまで退行するの止むなきに到り、何等かの手段を以て肉體を破壞することにより此れが行爲となつて實現せられたのが卽ち自殺である。從つて、自殺には以上の如き神經症的特徴が具現せられてゐる。

而して、自殺の際における肉體破壞は、同時に必然的に性行爲の象徴となる。卽ち、自殺のための手段は性器の、そして、その手段の行使は性行爲の象徴となる。從つて、自殺には、性行爲の際の滿足に伴ふ快感が幻想化せられて附隨し、その幻想的快感が、不自然行爲としての肉體破壞に必然的に伴へる現實的苦痛感を克服するのである。

こゝに於て吾々は、自殺と宗教との間に密接なる關係がある事に氣付く。卽ちそれは、宗教は精神的自殺であり、自殺は肉體的宗教である、といふが如き關係である。自殺と同樣に、宗教的行爲は性的行爲の象徴であり、從つて、それには性的快感と同一の强烈な幻想的快感が昇華せられた形式で附隨する。併し、宗教においては、自殺における肉體破壞に代ふるに、自然的、現實的生活の否定と宗教的新生活への期待とを以てするといふ點が自殺と異つてゐる。從つて、宗教的生活が成立し得るためには、自然的、現實的生活の否定に伴へる苦痛感が、宗教的新生活への期待に伴へる幻想的快感によつて克服せらるゝといふ事が、その條件となつてゐる。

若しこの反對に、現實的苦痛感が幻想的快感を克服するとすれば、自殺及び宗教の成立は恐らく不可能に了るであらう。更に、あらゆる幻想的快感を克服し得るが如き偉大なる現實的自我があるとすれば、それは、一片の白骨と化する最後の瞬間まで、人生途上のあらゆる歴史的障害に對して敢然と闘爭する以外の途を知らないであらう。而して、人類發展途上における現代のあらゆる障害に對して、恐るゝところなく現實的闘爭を合理的、計畫的、組織的に展開し得るものは、新興階級としてのプロレタリアート以外にはない。他のあらゆる階級は階級として早晩沒落すべき運命にあり、從つて、時代的危機の深刻化に伴つて、それらは階級として自らを維持せむとする限りにおいて必然的に神經症的＝宗教的＝自殺的となり、イデオロギー的には觀念論へ、政治的にはファッシスムスへ轉落すべき必然的運命にある。この必然的運命を克服するためには、多樣にして且つ廣汎なる活動を通じてプロレタリアートと結合する以外に方法はない。そして此の際、諸階級の特殊性を輕視して貧弱なる抽象主義に陥り、或はそれを偏重して絶對性にまで固定化することに依つて、多樣にして且つ廣汎なるそれらの相互關係を弱め或は抹殺するが如き觀念論的傾向は嚴重に警戒せらる可きである。そして、この沒落的運命を自覺しつゝも、それを克服すべく餘りに弱く、それを糊塗すべく餘りにも良心的なりし日本の芥川龍之助氏は、階級としてのインテリゲンツィアを代表してその矛盾の解決を死に見出した。蓋し、彼は弱々しい純情の持主であつた。

次に、以上の理論に基き、自殺の種々の形式とその性質とに關して大體の說明を試みよう。

吾々は、自殺をその形式上から次の如く分類する。

(A)に於て先づ男女兩性の自殺に於ける心理的差異を觀察せむに、前述せるが如く、男性は生の本能を象徵し、女性は死の本能を象徵しつゝ、相互に補足し合つてゐると言ふ事實から次の如き差異が生じてくる。卽ち、女性

は男性に比較して、自殺する事も容易であるが、自殺を斷念する事も亦容易である。次に、相對的意味に於て自殺は男性にとつては死んで涅槃（母）に往く事であり、女性にとつては生きて天國（父）に往く事である。

（A）に於て次に說明を要するのは心中と情死との區別であるが、吾々は、心中を二人以上の同性或は異性の單なる合意に基く自殺であると規定し、情死を二人以上の同性或は男性の戀愛的合意に基く自殺であると規定する事によつて、兩者を區別する。尙ほこの合意が、一方の或は一部の者の强制に基いて成立せるものなる場合には、それを無理心中或は無理情死として區別する必要がある。何となれば、それは純粹のものに非ずして、殺人との混合形態をなすものであるが故に。

心中に於ては、その群衆心理が、一方には自殺に伴ふ幻想的快感を强め、他方には現實的苦痛感を弱めて、自殺を單獨の場合よりも容易ならしめるといふ役割を果してゐるだけであるが、情死に於ては、その他に心理上の性的結合があり、それは自殺に伴ふ幻想的快感を一層强化せしめて、自殺を容易ならしめてゐる。

自殺は性行爲の象徵であるといふ點に於て、情死こそ自殺中の最も完成せる形態であり、謂はゞ人生の縮圖である。從つて、その事から「性交は情死の境地である。」といふ事が謂はれてゐる。

次に、（B）における全ての形式を通じて、それらが性行爲の象徵であるといふ點に於ては共通してゐる。併し、肉體破壞の手段においては、胎內空想的傾向の特に著しいものと虐待的傾向の特に著しいものとの區別がある。前者に屬するものは、（a）の（Ⅲ）と（Ⅳ）、（b）、及び（f）等であり、後者に屬するものは、（a）の（Ⅰ）と（Ⅱ）、（c）、（d）、及び（e）等である。一定の自殺者がその手段として後者を選ぶ動機は、主として神經症に於ける罪障感に對する贖罪願望の表現としての自己懲罰欲にあるのではあるまいか。尙ほ、河川、湖、海、噴火口等が女性器の、從つて胎內の象徵であり、ピストル、刄物等が男性器の象徵なる事は、分析解釋に依つて明瞭に證明し得る。

要するに宗教が神經症のイデオロギー的具現であるに對し自殺はその肉體的具現である。（未完）

ゲーテとフロイド（ヴィッテルス）（5）

武田忠哉

かつてフロイドは幼兒の遊戲を親しく觀察することによつて種々の發見を導くにいたつた。勿論、すでに多くの人々が幼兒の遊戲——何百、何千といふ遊戲する幼兒たち——を觀察したにかゝはらず、この歸納的方法はフロイドの精神分析の方法ではなく、少くもそれは彼自身の種々な發見を生じたコースではあり得ないのである。彼は一つの單獨な場合を數年にわたつて分析を續け、したがつて彼は例證の數の多さの虚飾を誇ることなしに、眸ざしの深さによつてそれの幅を補つたのであつた。

フロイドはある機會に生後一年半の男兒の遊戲を觀察しつゝ數週間に及んだ。「やがてこの幼兒の、不可解な、絶えず反復される行爲の意味が私（フロイド）に分るやうになつた。彼の母は單に自らこの幼兒に哺乳したゞけでなく、また全く外部の助力なしに彼を養育し保護しつゞけたゝめに彼はこの母に對して深い愛慕を持つてゐた。それにもかゝはらず、母が數時間彼を省みない場合にも彼はけつして泣かなかつた。しかしながら、この温和な幼兒は時々われ〳〵の妨げになる習慣を示した。すなはち、彼は手に持つてゐるすべての小さい物を遠くへ、部屋の一隅、あるひはベットの下などへ投げいだし、したがつて、この場合、彼の玩具を探し集めることはしばしばけつして容易な仕事ではなかつた。そのとき、彼は興味と滿足の表情を浮べながら、一つの、聲高い『オー——オー——オー——』といふ叫びを長く引伸すのが常であつた。彼の母と觀察者の判定が一致したところによれば、それはけつして感歎詞ではなしに、『隱れた』といふ意味を持つのであつた。私はつひに、それが一つの遊戲であり、この幼兒はすべての彼の玩具を單に『隱れん

ぼ』をするために用ひてゐることを注目するにいたつた。その後、ある日、私は一つの觀察を行ひ、それによつて私自身の見解が證明されたのであつた。」

――勿論、この觀察は必然的に生じなければならない。何故なら、フロイドはすでに最初からその「不可解な行爲」の意味を彼の理念の內部に無意識的に用意してゐたからであつた――。

「この幼兒は一つの木の絲卷を持ち、それには結び絲が卷きつけられてゐた。彼は例へばこの絲卷を床の上で自分の後ろへ附けて引くこと――卽ち、それによつて馬車遊びをすること――をけつして思ひつかなかつた。むしろ、彼は絲に支へられた絲卷を彼のカヴーを掛けた小さいベットの緣を越えてきわめて巧みに投げいだした。かうして、それがベットの中に消えた後に彼はそれに對して彼の意味深い『オー――オー――オー』を呟き、それから再び絲によつて絲卷をベットから引きいだし、併しながら、いまやそれの出現に對して一つの悅しい『バー』といふ叫びによつて挨拶したのであつた。したがつて、これは隱れることゝ再現することから成立つ完全な遊戲であり、われ〳〵は大抵單にその第一の行爲を認めるにすぎなかつたのである。かうして、それは獨立に遊戲として倦むことななしに反復された、尤も、疑もなくより大きい悅びは第二の行爲に附隨してゐたのであるが。

その後、さらに觀察を持續することによつてこの解釋は全く保證されるにいたつた。ある日、この幼時の母が長時間にわたつて席を外し、再びそこに現れたとき、彼女は、『ベービー、オー――オー――オー!』といふ告知によつて挨拶を與へられ、最初その意味は理解されることが出來なかつた。しかしながら、やがてこの幼兒はかやうに長く獨り置かれた間に彼自身を隱す一つの方法を見いだしたことが判明するにいたつた。すなはち、彼は殆んど床に達する姿見の中に彼自身の映像を發見し、それから低く屈んだゝめに彼の映像が『隱れた』のであつた。

かうして、この遊戲の解釋は自ら明かになるにいたつた。彼が母の立去ることを無抵抗に許したのは、彼の偉大な文化的行爲、彼によつて達成された本能の諦念――(本能の滿足に對する諦念)――に關聯してゐたのであつた。彼は彼の身邊の事物と共にこの隱れ、再現する遊戲を映出することによつて、いはゞ母の不在を償つたに外ならないのである。

しかしながら、われ〳〵は單にかやうな一つの個別的な場合の分析によつて確實な決定を導くことは出來ない。何故なら、公平に觀察するならば、この幼兒は一つの他

の動機からその體驗を遊戲化したやうな印象が得られるからである。この場合、彼は受動的になり、體驗によつて襲はれ、かつて不快に充ちてゐたその同じ體驗をいまや遊戲として反復することによつて一つの能動的役割に身を委ねるのである――（フロイドによれば、抑壓の解放と云はれてゐる）――。われ〱はこの努力を一つの占有の衝動に加へ得るかもしれない。その回想の本來の快不快と關與するところのない一つの占有の衝動。しかしながら、さらにわれ〱は他の一つの解釋を試みることも可能である。すなはち、對象を投げいだしてそれが隱れるやうにすることは、一つの、生活において抑壓された、母に對する復讎の本能――何故なら、彼女はその幼兒を立ち去つたのであるから――であるかも知れない。さらに、それは、「よろしい、行つてしまふがよい、私は汝を必要としない、私は汝自身を去るに任せる……」といふ反抗的意味を帶びることもあり得るのである。

かうして、一般に幼兒は彼等の生活において強い印象を與へられたすべてのものを遊戲において反復すること、その場合、彼等は印象の強さに對して忠實な反應を示し、いはゞその局面のリーダーになること、それらが理解されるにいたつた。しかしながら、他方において、すべて彼等の遊戲が特殊の願望の影響の下に立ち、それが彼等のこの時間をリードすることも充分に明瞭なのである。すなはち、自ら大きくなり、大人と同じやうに行動し得ることに對する願望。さらに、この場合、しば〱一つの體驗の不快の性質が遊戲を導きいだすことが觀察されるのである。例へば、醫者が幼兒の咽喉を診察し、あるひは、彼に對して一つの小さい手術を行つたとき、勿論この恐しい體驗はつぎの內容の遊戲を形づくるであらうが、しかし、その場合、他の根源から生じる快感の收穫は無視され得ないのである。一般に、幼兒は體驗の受動性から遊戲の能動性へ移動することによつて――（それはフロイドによれば、抑壓の解放と云はれてゐる）――、彼は自ら受けた不快を他の遊戲仲間に及ぼし、かうして、この代表者の人格に對して復讎を加へるのである。」

分析心理學と教育（ユング）

宮田齊譯

昂奮性が增大して行くにも拘らず、激怒發作の方は間もなく去りましたが、その代りに顯著な癲癇の發作が現はれて來ました。謂ふ所の尼僧の幻像は、髯を生やした男によつて象徵されて居つた反抗的犯罪傾向が一個の顯在病症に變相したものに他ならなかつたのであります。斯樣な例は往々にして器質的と云ふよりは寧ろ機能的なものであつて、分析的治療を以てすれば何等かの對策を講じ得るのであります。此の患者のケースを茲に詳述したのも全く右の理由に基く譯で、我々は兒童精神の云はゞ幕裏で抑々如何なる事が起り得るかを分析的方法によつて知る事が出來るのであります。

第四の分類に入るものは神經症的兒童であります。と申しても、小兒神經症の種々雜多な症候や型態を詳細に描寫する事は一場の講演の能くする所ではありません。異常に粗暴な擧動と明白なヒステリー的發作・狀態との中間には實に多種多樣な段階があるものでありまして、例へばヒステリー性熱發、體溫の異常低下、痙攣、痲痺、疼痛、消化障礙、等の外見上身體的の障礙を呈する場合もあり、或はまた昂奮、憂鬱、虚言、性慾倒錯、竊盜、等の精神的・道德的型態をとつて表れる事もあります。嘗て私は滿一歲以來頗る不快な便秘を病つてゐた女兒を診た事がありますが、此の子は凡ゆる身體的治療を受けたにも拘らず、彼女の生活に於ける最も重要な要因（ファクトール）——卽ち母親——を醫師が考慮に入れなかつた爲に悉くの試みが結局失敗に歸してゐたわけでした。處で私は母親に會つた瞬間「これこそ正しく病氣の原因だな」と悟つたので、先づ彼女自身の治療に取掛かる旨を申出すと同時に、一時子供を手許から離すやうに勸めて見ました。そ

結果某婦人が母親の代理を勸めることになつたのですが、その翌日から早くも子供の病狀が消滅して了つたのであります。此の問題の解決は極めて容易でした。元來此の子は末つ子で、そのうえ神經症的な母親の秘藏子だつたのです。その母親が自分自身の恐怖症（phobie）をそつくりそのまゝ子供に再現して、極端な配慮と庇護とを彼女に加へた爲に子供は終始緊張狀態を脫却する事が出來ず、その當然の歸結として消化機能の障害を起したのでありました。

次に、第五の分類に屬するものは種々の型態に於ける精神病（Psychose）であります。尤も兒童の精神病は比較的少いのですが、それにしても、春機發動期（プベルテート）後に到つて早發性痴呆（dementia precox）の諸型態に迄到達する病的な精神發展の少くとも第一段階が此の時代に於て認められるのであります。此の疾患の傾向を持つ兒童は概して奇異な擧動を示し、理解し難く、近づき難い事も屢々あり、過敏で、引込思案で、感覺は異常であり、些細な原因から或は鈍重になつたり、或は極度に昂奮したりします。

私は十四歲の少年患者を診察した事がありますが、彼に於ては性慾活動が突然早期に成熟して相當憂慮すべき狀勢を示し、睡眠及全身的健康狀態に著しい障害を及ぼしたのであります。此の障害は彼が一夕舞踏會に赴いて、或る若い婦人から舞踏の相手を拒絕された時以來始つたもので、其の日彼は機嫌を惡くして歸宅致しましたが、明日の學課の豫習をする段になると、刻一刻と烈しくなつて行く名狀し難い感情（イモーション）、心配、憤怒そして疑惑のために苦しめられ、遂には驅出して庭前に出て殆んど失神狀態で地上に轉々したのでありました。それから二三時間の後、漸くその激情は去りましたが、その代り性慾の異常が始まつたわけなのであります。これなどは惡性の遺傳をもつた兒童に特有の典型的な病的感情であつて、此の子供の一家には種々の早發性痴呆患者が居つたのでした。

惟ふに、分析心理學の原理を應用しやうと試みる教育者は必ず兒童の精神病理學及び精神病的狀態の齎し得る凡ゆる危險に注目しなければなりません。世上には往々、讀者をして一讀後直に精神分析の應用が極めて容易に出來、且つ最良の成果を樂々と收め得るかの如き印象を懷かせる書物が不幸にして行はれて居りますが、優秀な精神療法家は直ちに斯樣な皮相的意見に贊同するわけにはまゐりません。專門家としては兒童の分析に際して、不充分な手輕な考察を戒めなければなりません。兒童精神の理解に向つて現代の心理學が爲した寄與に關して知る

所ある事は教育者として固より重要な事でありますが、併し、心理學的方法を直接兒童に應用しやうとする者は、當面の問題として扱ふべき種々の病的狀態に就いて充分基礎的な知識を所有して居なければなりません。

私一個の考を申せば、凡そ責任ある醫師以外の人で、專門的知識をもたず、或は醫師の意見を俟たずして兒童の心理分析を敢行し得る者は無いと思ひます。

それに、兒童を分析すると云ふ試みは、極めて困難な、一種獨特な仕事でありまして、成人の分析とは大に事情を異にするのであります。嘗て私が*テリテットに於ける會議の席上で講演した通り兒童は獨自の精神型をもつて居ります。

（註）一九二三年、テリテットに於て開催された世界教育會議の事——譯者）

兒童の肉體が胎兒期生活に於ては母胎の一部であつたやうに、其の精神も多年の間兩親の精神的雰圍氣の一部分を形成するのでありまして、小兒神經症の多くが、實際に小兒の病症であるよりも寧ろ、兩親の精神狀態の症候であると云ふ事實も之に依つて說明される譯であります。斯樣に兒童の心理はその一少部分丈けが彼自身のものであつて、その大部分は兩親の心理に依存してゐるのでありますが、この依存關係は正常なものでありまして、之を沮害する事は兒童の精神の健全な發育を妨げる所以であります。（中略）

× × ×

人間精神の發展史を考察して行く時、我々は抑々精神の發達なるものは畢竟意識の限界の擴大に外ならず、一步前進する事は大いなる苦痛を伴ふ進展であると云ふ事實を痛感するのであります。縱令最も微少な一部分たりとも自ら自己の無意識を放棄する事は凡そ人間の最も厭ふところであるとすら云へませう。人間は未知のものに對して深い恐怖を懷いて居るのであります。試みに何か新しい思想を宣揚しようとした人々に質して御覽なさい。

所謂成熟した大人ですら未知の世界に向つて一步を踏み出す事に躊躇するのも蓋し當然ではありますまいか？ 新しきものへの恐怖（Horror Novi）は原始人の著しい特徵でゞもあるのです。但し此の程度であれば正常な障碍と考へて差支ありませんが、小兒が極度に兩親に纒綿するとすればそれこそ不自然であり、病的であります。何となれば、未知のものに對する恐怖が極端に甚しいと云ふ事は旣に病的なのですから。と申ても、前進を敢行し得ない所以は必しも兩親に對する性的依存に依るものとのみ斷定するわけには行きません。それは屢々所謂「より

よく跳躍する爲に一時身を屈する」(reculer pour mieux sauter) 場合であるからであります。縦令兒童が性的症候を示す場合、言葉を換へて云へば近親姦的傾向が明瞭である場合でも、私は兩親の心理の一層綿密な研究を提唱致し度いと思ひます。これを試みる事に依つて我々は驚くべき事實を發見する事が出來ます。例へば無意識的に自分の娘に戀愛して居る父親だの、無意識的に倅と戯(フラ)戀(ート)して居る母親だの、——即ち兩親が無意識の覆被の下に自らの成人の感情を子供に移し、一方子供の方ではこれまた無意識裡に自分に振られた役割を勤めてゐるやうな場合を發見する事が出來るのであります。勿論病的狀態にある場合を除いては小兒は、兩親の態度に依つて無意識裡に斯樣な且つ不自然なる役割を強制されない限り、斯る行動をとるものではありません。

次に一例を述べて見ませう。茲に娘二人に息子二人都合四人の子供達が四人共神經症を患つてゐた一家族がありました。娘達は春機發動期以前にすでに神經症的徵候を示してゐました。此の一家の歷史を、細い事は省略して、ざつと大まかに御話して見ませう。

先づ一番上の娘は二十歳の時、立派な教育を受け、大學迄出た、何處から見ても難のない某青年と婚約致しました。が或る外部的な事情の爲めに結婚を延ばして居る中に、彼女はまるで催眠術にでも懸つたやうに、父親の會社の某社員と戀愛關係に陷つて了つたわけです。彼女は婚約者の青年を愛してゐる樣子でしたが、彼に對する時は極めて羞み家で、接吻を許した事すら一度も無いのに、一方の男とは平氣で相當深い間柄になつて行きました。此の娘は極めてあどけなくて小供ぽく、殆んど無意識狀態にあつたのですが、一日不圖自分の行動を判然と意識する樣になつて愕然としたのでした。そこで彼女は完全に失望落膽して結局永年に亙るヒステリーを起して了つたのであります。而して、直に例の社員との關係を斷つたばかりでなく、何人にもその動機を說明しないで婚約者たる青年とも絕緣して了ひました。

處で、次女の方はさしたる困難もなく結婚をしたのでありますが、たゞ良人に選んだ男性の精神生活の水準が自分よりも低かつたゝめに、彼の女は不感症的で、一年足らずの間子供も出來ずに過す中、良人の友人の一人を情熱的に愛するやうになつて、結局數年に亙る戀愛關係が兩者の間に生れたのであります。長男は相當才能のある青年でしたが、愈々職業を選ぶと云ふ段になつて、最初の神經症的症候として不決斷を示したのでした。彼は思案の末、結局化學の研究に取りかゝる事に決めましたが、實際の仕事を始めるか始めないうちに突如烈しい懷

鄕病に襲はれて早々に大學を去り、故鄕の母親の許に歸つて了ひました。歸ると間もなく、幻覺(Halluzination)を伴ふ一種特別な錯亂狀態に陷り、約六週間の間同じ狀態を續け、六週間目の終りに漸く常態に復した處で今度は醫學を勉強しやうと思ひ起ちました。此の方面の研究は試驗を受けるところまで進んだのでしたが、其の後間もなく彼は婚約する事になりました。處がこの婚約が愈々實現化される事になると又々「果して自分の選擇は正しかつたかどうか」と云ふ疑惑の念が起り、それに次いで不安狀態に陷つた結果、折角の婚約も取消す始末になりました。而も彼は其後數ケ月に亘る重い精神病に罹つたのであります。

二番目の息子は精神衰弱性神經症患者 (Psychosthenischer Neurotiker)で女を嫌ひ、老青年たる事を熱望しつゝ、自分の母親に極めて感傷的に纒綿して居たものであります。私は醫師の立場から此の四人の兄弟の悉くに接觸したのでありますが、その各々の經歷が疑もなく母親の祕密を物語つてゐる事を發見したのであります。

研究の結果次の樣な事實が明かになりました。彼等の母親と云ふ人は才能もある快活な婦人でしたが、青年期に於て誠に嚴格な、甚しく偏狹な教育を受けてゐました。此の教育に依つて植付けられた生活信條を彼女は嚴しい自制力と强烈な性格とでもつて後半生を通じて固守し、一切假借する所がありませんでしたが、併し彼女は結婚してから程なく良人の友人である某氏を知り、彼と眞實の戀愛に陷つたのであります。この戀愛には相手の男も確かに眞劍にかゝつた樣子ですが、元來斯樣な關係と云ふものは彼女の墨守する信條とは固より相容れないのでありますから、勿論許さるべきもないので、彼女は終始何事も無げに裝ひ、相手の男が死ぬ迄廿年もの間一切無言の儘で此の態度を續け、結局自分も生涯を了はる迄沈默し通して了つたのであります。彼女と良人との關係は薄々しい、淡白なものでした。

一家族に於ける右の樣な狀態は當然非常に緊張した雰圍氣を釀し出すものでありまして、斯樣な暗々裡に行はれる幕裏の事件程子供等に影響を及ぼすものはないのであります。子供達は斯樣な事實に依つてその生活態度の上に甚だ執拗な影響を蒙ります。卽ち、此の場合娘達は母親の遺り口を摸倣し、一方男の子供達は自ら一種の無意識愛人となり、而もこの無意識的戀愛をば意識的な婦人忌避を以つて代償させつゝ、全的に母親を代償する行動を採つたのでありました。

(以下五十六頁下段へ續く)

トルストイの幼少年時分析（オッシポウ）

平塚義角　譯

トルストイは未だ二十歳の頃、入營やカウカズス旅行の以前に、既に屢々そして情熱的に、骨牌を遊んだ。ビリュコフが「骨牌遊びは、恐らく彼の最も激しい情熱の一つであつたに違ひない」※と云つてゐるのは、この時分のことなんである。彼は士官時代に屢々骨牌をして遊んだ。「或る日私は戯れに僅かの金額を賭けた。負けた。もう一度賭けた。そしてまた負けた。私は運が悪かつた。賭博熱が目醒めて、二日間の中に、私は私の全部の金と、ニコラスが私に與へた金（ほゞ二百五十ルーブル）とをすつてしまつた。そしてその上、尚ほ五百ルーブル損をして、その手形を振出した。」一八五二年にトルストイはその日記の中で次のやうに認めてゐる。「賭博狂は厭ふべき情熱である。それは次第に、益々強い興奮への熱望へと移つて行く。しかしその熱望に抵抗する事は出來る。」※※ トルストイが後自ら彼の骨牌遊びの情熱を如何に鋭く描いてゐやうと、我々はしかし、彼が文字通り骨牌遊びのために凡てを忘れる賭博者では決してなかつたと言はねばならぬ。トルストイは常に念入りに彼の損失を計算してゐる。（例へば上に引用した書翰に於いて）そして彼がその損失の一つを描寫してゐるところに次のやうな一節がある。

「昨夕私は、私の財布狀態と借金とを問題にして、それを如何に勘定すべきかを熟考した。私は凡ての事を正確に熟考して後、私の借金は、今のうち余り澤山の支出をしなければ、さうたいした重荷ではないといふ事が明かになつた。」※※※

トルストイは最早期の青年時代から、絶えず支出の合算を行つてゐた。彼が自分の支出々來るより以上の支出をした事は事實である。しかし彼は經濟狀態をよくする

ために、たえず努力してゐた。そして彼は沒落の縁で喰ひ止る事を心得てゐた。又後にはその財產を單に保護するばかりではなく、ふやす事も心得た。で、我々は次のやうに結論する事が出來る。――トルストイは、賭博が大好きであつた。しかし同時に几帳面な生活をしようとの努力もしてゐた。此處に我々は、トルストイの魂の中に於ける葛藤のもう一つの根據を見る。トルストイは几帳面で節約的で、我儘であつた。我儘に關しては、我々は既に第三章で多くを述べた。彼が節約であつたことについては、トルストイの傳記が我々にその多くの證據を提出してゐる。此處にその一つを擧げる。トルストイは第二の母タチャーナ・アレキサンドローフナに就いてかう書いてゐる。――「叔母は色々の甘い食物を自分の部屋に保存して置くのが好きであつた。乾した無果花の實、蜜入菓子、棗椰子の實など。叔母はさうしたものを好んで買つて、私に御馳走をした。叔母がこの甘い食物を買ふんだからと云ふのにその金を與へなかつたことが幾度もあつた。すると叔母は悲しげにそれを諦めてゐた。さう云つた事を私は決して忘れる事が出來ない。またその事を思ひ出すと、怖ろしい自己譴責を感ぜずにはゐられない。」****

註一・乃至四、ビリュコフ

几帳面に關しては、我々は澤山の證據を持つてゐる。「私がこんなに潔癖でさへなければ、旅仲間としては大變愉快な男だらうといふ事をニコラウスは知つた。彼は、私が肌着を一日の中に十二回も取り替へる――と彼はさう云ふのだ――のでやりきれないと思つてゐる。」*

トルストイの全生活は、或る時は彼の外觀を整へるための努力（"Comme il faut"）また或る時はその魂を整頓するための努力で一杯であつた。この努力からして、日々の秩序、生活規則、プログラム等々を絶えず記載するといふ事が起るのだ。で、こゝに三つの性格特徴があるわけだ。この三つが結合して、フロイドの所謂肛門性格を成すわけである。**

メレヂュコウスキイが、トルストイの『懺悔錄』の中の自己性格描寫を修正してゐるのは全く正しい。

トルストイはかう書いてゐる。

「私は姦淫を行つた、私は欺いた。嘘、竊盜、凡ゆる種類の私通、泥棒、暴行、殺人――一つとして、私の犯さなかつたと思はれる犯罪はない。」

メレヂュコウスキイは言つてゐる。「トルストイは『泥棒』ではなくて、しまり屋で、父であり、家長であつたのだ。『暴行者』ではなくて、召使や家人の良き主人であつた。『人殺し』ではなくて、勇敢なる闘士であり『醉ひ

どれ』ではなくて、生活の最も無邪氣な喜びに醉つてゐる賢きしらふの快樂主義者であり、私通者ではなく、結婚の床を汚點なき純潔さに保つた所の、忠實なる夫であり、舊約聖書のアブラハム、イザーク、ヤコーブの如くその子を愛する父であつたのだ。……若し彼が何か恥ぢなければならないとするならば、それは彼の行爲や感情ではなくて、彼の言葉や思想だけに過ぎない。」

註一 ビリュコフ

註二 『性格と肛門色情』(大槻氏譯『療法論』の内にあり。)

フロイドの研究に基いて、我々はトルストイの幼年時代に於ける肛門色情の重大な意味を推論する事が出來る。その直接の證明として、我々は次の思ひ出を擧げる事が出來る。

「プラスコーフィヤ・イッサエーフナは尊敬すべき人物であり、家庭の主婦であつた。それにも拘らず、その側には、その小さな部屋に、私等の子供の壺が立つてゐた。授業時間の後に、又はその最眞中に、その部屋に行つて彼女と共におしやべりし、彼女の話をきくのは、最も愉快な事の一つであつたと記憶する。恐らく彼女は、ことに幸福なそして感情の快活なこの時間に、私等を見る事が好きであつたらしい。『プラスコーフィヤ・イッサエーフナ、お祖父さんはどんなにして戰ひましたか？ 馬に乘つて？』と私たちは彼女に忙はしなく尋ねた。が、それはたゞおしやべりしたり、お話を聞いたりしたいだけであつた。*」

註 『幼年時の思ひ出』

第四の思ひ出は、他のものと既にその物語の仕方からして違つてゐる。著者はずつとこれまで、思ひ出の實際狀態は描かず、副事件の描寫にばかりこだはつてゐる。が、此處ではさうでない。我々はこの思ひ出を、夢の分析のやり方に倣つて、數個の部分に分けて見よう。

一、「私はイェレメィエーフナの思ひ出に似た他の一つの思ひ出を持つてゐるが、それは多分ずつと後のものであるらしい。と云ふのは、その方がもつとはつきりしてゐるからである。しかしその思ひ出は、私にはどうも不可解である。」

二、「この思ひ出に於いては、我々の先生であるドイツ人のフェードル・イヷノーギッチが主役を演じてゐる。しかし私は、その時未だ彼の監督下にゐず、從つて、それは私の五歳前の事件であつたといふ事は確かなのだ。そしてこれは、フェードル・イヷノーギッチに關する私の最初の印象である。」

我々は今度は、この物語がこの調子で展開して行くものと思つてゐると、作者は相變らずこのテーマを避けて了つてゐる。

三、「それの起つたのは非常に初期だつたので、私はまだ

誰も——兄弟も父も——記憶してゐない。私が只一人の人を覺えてゐるが、それは私の妹であつて、それも彼女が私と同樣にイェレメイエーフナを怖れてゐたが故に過ぎない。」

精神分析的研究から我々は、凡ゆる思ひ出が一つの意味を持つてゐ、そしてそれが主題と密接な關係にあるといふ事を知つてゐる。從つてこの場合、妹の思ひ出は偶然なものではなくて、妹は此處では、遊び仲間として記憶されてゐるのだ。我々はまた、子供等がイェレメイェーフナの外に「ミラシュキイ」といふ遊戯をも遊んだ事を知つてゐる。そしてこの二つの遊戯は、必然的に部分性感的活動への種々の機會を與へた筈である。我々は、四歳のレヴチュカが何等かの部分性感的經驗を妹やドゥネチュカと爲したに違ひないと想像する事が出來る。たゞ彼はその經驗を此處でも、また前の思ひ出の中でと同樣に抑壓してゐる。ドゥネチュカの事は、疑ひもなく、この時代の凡ゆる經驗に關係があつた。

四、「この思ひ出と結びついて私にまづ想起させることは私等の家には二階があつたといふ事だ。どうして私はそれを思ひついたか、私が自分で登つて行つたのか、それとも誰かゞ私を連れて行つたのか、とんと見當がつかない。」

この二階の思ひ出は、此處では何かの象徴的意義を持つてゐるに違ひないが、しかしその材料がないで、何とも想像がつけられない。最後にさて、次の話になる。

五、「私はしかし、かういふ思ひ出を持つてゐる。私等は大勢で、皆んな手に手を取つて圓を圍んだ、その手を繋いでゐる多數の中には知らない婦人等がゐる。（それは洗濯女等であつたと記憶してゐるのだが、何故だかは分らない）そして、私達は皆んな廻つたり踊つたりしはじめる。」

六、「フェードル・イヴノーギッチは脚を非常に高く上げて、騷々しく聲高に跳び上る。その瞬間、私はそれは良くない、不道德だ、といふ感じがした。私は彼に注意して、どうやら泣き始めた氣がする。そして凡てがおぢやんになつた。」

この少年が雇人達と遊戯をして喜んでゐることは「第五」の中に見えてゐるが、それは大きな滿足である。トルストイは、地主等も假面を冠つてやつて來たあの假面舞踏會を思ひ出して、かう言つてゐる。「凡てが甚だなみはづれてゐた。だがそれが成人には恐らく樂しかつたらしい。しかし私等子供から見ると、雇人のやりさうな事以上は何もなかつた。」*と。そして雇人の風習が當時野卑であつた事は、爭はれない。今、第五章を取つて見よう。フェードル・イヴノーギッチは善良な、氣の良い人だが、この章を見れば分るやうに、屢ゝ大酒を飲んだ。この事は、前の版では檢閲のために削除されてゐた。フェードル・イヴノーギッチは確かに禁慾者ではなかつた。

彼がいろんな猥雜な行爲を下女等と敢てやつたといふのは如何にも有りさうな事だ。この事に依つて少年トルストイは、自分が嘗て妹やドゥネチュカとやつた、さうして抑壓てゐた自分の行爲（第三節）を聯想したのだ。今やフェードル・ノヴノーギッチは、自分と同じ事をなした。少年は自分が抑壓してゐたものをまざ／＼と見、そのために喫驚して泣いたのだ。（第六節）

第五の思ひ出も、最初の四つの思ひ出と同樣に、意味深長である。

「下へ移つて行つた時に、私はフェードル・イヴノーギッチや少年等に對して、初めて、それ故に後の凡ての場合よりも強い、一つの感情を覺えた。それは義務感とか十字架感情とか名附けられてゐる感情で、人は各ゝそれを持つ義務があるのだ。――そして私が此處で初めて氣付いたのは、私が上で共に住んでゐた皆の人々ではなかつた。併し私と生活してはゐたが、以前はその誰かも分つてゐなかつた主要人物、それは私の叔母タチャーナ・アレキサンドローフナであつた。私は叔母が背は低く、丈夫で、髮は黑く、善良で、健しく、同情心ある人だつたと記憶してゐる。叔母は私に寢衣を着せ、抱き乍ら帶をしめ、そしてキッスをしてくれた。私は彼女を氣の毒に、非常に氣の毒に感じ、彼女も同じことを感じてゐたが、併しさうしないわけにはいかなかつたのだといふ事を私は知つた。」

叔母タチャーナ・アレキサンドローフナは、トルストイの第二の母であつた。トルストイは彼を生んだ第一の母に就いては、次の樣に書いてゐる。

「私は自分の母の事は全然覺えてゐない。母が死んだ時、私は一歲半であつた。誠に稀有なる偶然であるが、母の肖像は一枚も保存されてゐない。それ故に私は母を現實の肉體的な存在として考へる事は出來ない。或る點ではこの事は私には好ましい。といふわけは、そのために、私の觀念の中で母の精神的な姿だけが生きてゐて、だから私が母に關して知つてゐる事は凡てが美しいからだ。そして私が母の凡ての點をその樣に美しく思ふのは、私に母の事を話す人々が悉く良く話さうと努めてゐるからばかしではなく、また實際母には良い所が多かつたからだと信じてゐる。」＊＊

更にトルストイは、母の事と長兄ニコレンカとに關する彼の思ひ出の中でかう書いてゐる。（ニコレンカは母の死んだ時は六歲であつた。）

「彼等は二人とも、私に取つては貴い特質を持つてゐる。その特質を私は母の手紙から推定し、また兄に就いては自分で認めたのである。それは、世評に對する美しき無關心と、また彼等が他人の到底持つてゐない魂の優越、靈の優越、教育の優越を隱すといふ謙讓の德である。彼等は等しくこの優越

を恥ぢてゐる樣に見える。…彼等は決して人を呪はない。」***

註一、三　ビリュコフ

註二、同。トルストイの母は『戰爭と平和』の中の王女マリヤ・ボルコンスキイのモデルとして忠實に寫されてゐる。著者はその上、彼女の名前も保存してゐる、たゞ彼女の家名の最初の文字WをBに變へてゐるだけだ。

トルストイは、これ等の特徴をあまり顯著に示してゐない。彼はこの特徴の存在をたゞ母に關する物語や、兄を觀察することによつて知つたのである。これ等の特徴はトルストイの理想となつた。トルストイは幼年時代から、母のこの理想の姿を、眼前に描いてゐた。

——未完——

（五〇頁下段より續く）

偖て實際問題となると右の樣な場合を處置する事は中々困難なのであります。此の如き狀態を單に知識的に理解するだけで十分だと考へる事は大きな誤謬でありまして、斯る嚴重なブロックを一擧に粉碎する技術の如きものは事實上存在しません。此等は寧ろ、精神療法技術に俟つよりも各個人の人生觀、最高の理想、信念、或は又その平素の無能力等に依つて決定せられる事が多いのであります。凡て重要なケースの處置は、技術の效力範圍以外に屬する葛藤（コンフリクト）を導き出すものでありますから、何人も分析心理學が簡便な方法であると考へてはなりません。此の方面に關して皮相的な、安價な書物を書く輩は、分析心理學の廣汎な意義を覺らないものか、或は又人間精神の眞面目を識らない手合であります。（了）

相寄る魂（D・H・ロレンス）

"We Need One Another," by D. H. Lawrence

岩倉具榮 譯

男と女とはお互ひに相手を必要とするものである、とまア言つておいてもよからう。吾々はあらん限り剛情を張つて見、反逆と嫌惡との後に、その事を澁々容認し、大人しくなるのだと云つておいてもよからう。吾々は皆、個人主義者である。吾々は皆、主我主義者である。吾々は何とかして自由を、吾々自身の自由を、信ずることが强烈である。吾々は皆、自主獨立にして、自分自身だけで滿足せんことを欲する。で、吾々がいま〳〵しくももう一人の人間を必要とするといふことは、吾々の自尊心にとつて大きな打撃である。吾々は女の中から――吾々が女なら、男の中から――相手を輕卒に選擇することはまア大目に見てよからう。併し汚らはしくも、鐵面皮にも、「あゝ、私はあのうるさい私の女なしには生きられない！――」なんて放言するやうになることは、吾々の孤高の自負心にとつては恐ろしい屈辱である。

そして私が「私のあの女なしには」といふのは、妾のことではない。フランス語の意味で性的關係の女を云ふのではない。私は女性のことを云ふのだ。女性そのものに對する私の關係を云ふのだ。云ふ迄もなく、ある男が、もう一人の男に女の役をもさせない限り、ある特定な女との關係もなしには彼は少くとも愉快に生存し得ない。そして女の場合も同樣である。女が他のある女を男の代用としない限り、ある男と親しい關係を結ばないでは愉快に生活し得る女は現世ではない。

現世はさうなのだ。ところで三千年の間、男と女とは、この事實に對して闘つて來た。佛教に於ては、特に、男

が女を盗み見してさへ、最高の涅槃に到達することは決して出來なかつたのである。「自分だけがなし遂げた！」といふのが、涅槃に到達した彼の君子の誇りかな確言である。そして又、魂の救ひを得た彼のキリスト教者も云ふ、「自分だけはなし遂げた！」と。それ等は自負的個人主義の宗教であつて、それが云ふまでもなく、わが痛ましき現代の個人の主我主義となつて結果してゐる。地上では結婚は聖禮であるが、死の絶對信條によつて解消される。天國では結婚の時取つたり與へたりすることはない。天國に於いては魂は、極度に個人的である。至高者との關係を除いては凡ゆる關係から解放される。天國には結婚も戀愛も、友情も父性も母性も、姉妹も兄弟も從兄弟もない。そこには至高者との完全な關係に置かれた、完全に孤立せる私、自分だけがある。

　吾々が天國について語る場合、吾々は實は、吾々の最も到達せんと欲するもの、又この地上にあることを最も好むものについて語るのである。天國の狀態とは、現在我々が望み、それを獲んとして努める樣なさう云ふ狀態である。

　さて、若し私が、女或ひは男に次の樣に云つて見るとしよう。「あなたは凡ゆる人間關係、父母、兄妹、夫、愛人、友達、又は子供、之等凡ての人間同志の掛り合ひから純粹に自由になつて、あなた自身の純粹の自我に歸り、只最上權、至高者とのみ關係することを好みますか」と。――するとその答へはどうであらう。どういふ答へであか、私はあなたにたづねる。あなた自身の本當の答へはどういふのでせう。

　私は、殆ど凡ゆる場合に、それは斷言的な「然り」であると思ふ。過去に於ては、大抵の男は「然り」と云ひ、又大抵の女は「否」と云つたであらう。併し今日は、多くの男がためらつて、又殆ど凡ての女が斷乎として、「然り」といふだらうと思ふ。

　併し乍ら、近代の男性は、全く眞の人間關係を持たないといふこの涅槃の樣な狀態の極く近くまで到達したので、彼等は自分達が何者であり又何處にゐるかを疑ひ始めてゐるほどである。あなたが自分の偉大な獨立を肯定し、凡ゆる束縛と連帶とをたち切り、かくて自分自身を純粹の個性に歸して了つた時に、あなたは、そも〳〵、何者であるか。あなたは一體何者であるか。

　あなたは偉大な何者かであると考へてもよからう。何となれば、個人が、この獨立に近づいてさへも、全くの主義と自負とさうして空虛とに陷らないものは極めて少いのであるから――。現實の危險は、あなた一個の長所に還元せられて最も生き〳〵した人間同志の關係からた

ち切られることである。あなたが殆どまづ無に近くなるといふことの危險である。如何なる個人――男でも女でも――をその人の元素に還元して御覽なさい。その女や男はどう云ふ者になるだらうか？　極めて微小なものとなる！　ナポレオンを例にひいて、彼一人をみじめな孤島におくとすれば、――氣むづかしい、くだらない、小人物に過ぎない。メリー・スチュアトを牢獄の汚らしい石の城の中におけば、彼女は只猫の樣な小人物に過ぎなくなる。さてナポレオンはセント・ヘレナの孤島に流された時でさへ、氣むづかしい、くだらない、小人物ではなかつた。が、スコットランドの女王メリーは要塞とか洞穴の樣な所に隔離された時には、猫の樣な小人物に過ぎなかつた。この偉大なる孤立は、吾々自身をそも〳〵の元素に還元することは、凡ゆることの中で一番大きな欺瞞である。それは本當の鳥であるかどうかを確かめようとして、孔雀の羽をすつかりむしり取る樣なものである。孔雀の羽をすつかりむしり取れば、得るところは何だらうか。孔雀ではなくて、鳥の裸のむくろのみである。

吾々及び吾々の偉大な個人主義とても同じである。吾々の中誰でもを吾々だけの個人に還元すれば、吾々は何になるだらう。ナポレオンは氣むづかしい、くだらぬ、小人物となり、スコッランドの女王メリーは猫の樣な小人物となり、柱に結はかれた聖シミアン・スタイライツ Simeon Stylites は、思ひ上つた狂人となる。そして我々も驚くべき神の造り物ではあるが、屑のやうな、思ひ上つた、小つぽけな、近代的主我主義者となる。今の世の中には、凡ゆるより微妙な人間關係をたち切り、自らの空虛と無力の上に優越を築き上げる愚かな、頑固な主我主義者が充ち滿ちてゐる。けれども空虛は露見しつゝある。立派だと持てはやされてゐる空虛は、ほんの暫くの間人々を欺くことが出來るだけである。

ある男を隔離して彼自身の純粹な驚くべき個性に孤立させるならば、その男を全的に摑むことは出來ず、只彼の怒れな殘骸を摑み得るばかりである。それが事實の眞相だ。ナポレオンを孤立させて御覽なさい、然らば彼は何者でもなくなる。イマヌエル・カントを孤立させて御覽なさい、それでも彼の大思想はその頭の中でカチ〳〵云ひつゞけてはゐるだらう。併し、彼がその思想を書き下して人に傳へることが出來なかつたら、それ等はこわれた時計の樣な愚人の寢言に過ぎなかつたらう。佛陀自身を例にひいても、若し彼が何處か寂しい場所に追ひ拂はれ菩提樹木下に結伽趺座して誰も彼を見ず、又如何なる涅槃の訓へも聽手がなかつたなら、彼は涅槃に大なる興味をいだいたかどうか、たゞ一人の變り者に過ぎなかつ

たのではないかと私は思ふ。絶對的の孤立に於ては、如何なる個人と雖も大なる價値があるか、又は如何なる魂と雖も救濟に價するか、或ひは持つにさへ價するかどうかを私は疑ふのだ。「かくて吾若し地より上げられなば、凡ての人を吾に來らせん。」といふキリストの言葉があつても、若しも地より上げらる他の何人もゐなかつたら、その凡ての芝居は大失敗となつたらう。

それであるから、凡ゆるものが、個性そのものさへもが、相互關係に依存する。「神も予なくしてはなし能はぬ。」と十八世紀の或るフランス人は云つた。彼の云ふ意味は、人類が存在せず、人間が存在しなかつたら、神(人間の神)は何の意味もないだらうといふことであつたのだ。そしてそれは本當である。若し男も女も居なかつたら、イエスも無意味であつたらう。同じ樣にして、セント・ヘレナのナポレオンも無意味になつた。さうしてフランス國民もナポレオンの軍隊及び國民に對する關係に於ける彼なくしては、その意味の大部分を失つたのである。偉大なる力がナポレオンから流れ出し、それに應ずる偉大なる力がフランス國民からナポレオンに流れかへつた。そしてそこにこそ彼の偉大とフランス國民の偉大とがある。つまり、偉大は關係に存するのである。循環が完全な場合にのみ、光りは輝く。交流が半分だけでは光りは輝かない。凡ゆる光りは何らかの種類の完全な循環である。そして凡ゆる生命も、生命たらんとする限り、その通りである。

吾々は吾々の個性なるものを持つのも關係に於いてゞある。この重大な、いみぢき事實を吾々はよくのみ込んでおかう。他の人々との關係を離れゝば、吾々は貧しい個人で、吾々の凡ては殆ど何ものにも價しない。吾々が生動してその存在を保つのは、吾々と他の人々、他の生命、他の現象との間の生きた接觸によるのだ。吾々の人間同志の接觸を、生ける地球と太陽との吾々の接觸を奪つて了へば、吾々は殆ど空虛な水泡に過ぎない。吾々の個性も意味がなくなる。一つの島に雲雀がたつた一羽しかゐないとすれば、その雲雀は歌も歌はず、何の意志も持たないだらうし、その個性は、草の中をかけまはる鼠の樣に消え失せて了ふであらう。けれども若しその雄雲雀と一緒に一羽の雌雲雀がゐたとすれば、そのために雄雲雀は空高く舞上つて歌ひ、かくてその眞の個性を取りもどすであらう。

人間の男女もまたかくの如くである。男女が、その眞の個性と判然たる存在とを確保するのは、相互關係に於いてゞある。之れが性――だと云ひたければ云つてもよい――である。けれどもそれは草の上に照る日光が性で

あるのと異らない。それは生ける接觸であり授受、卽ち、男と女との、また女と男との偉大な又微妙な關係である。この關係に於て、又之の關係を通じて、吾々は眞の個人となり、その關係なくしては、その眞の接觸なくしては、吾々は多少とも取るに足らぬものとなる。

けれども、勿論、その接觸を生き生きした、固定的ならぬものにしておくことは必要である。それは云ふまでもないことである。女と結婚してそのまゝにしておいて御覽なさい——それは接觸を避けそして接觸を殺す愚かな數々の祕訣の唯一のことに過ぎない。眞の接觸の凡ゆる可能性を殺すには、多くのありふれた手管がある。卽ち、女を床の間に祠り上げておくか、或はその反對に、一から十まで指圖をするか、又は模範的良妻にするか、或ひは模範的賢母にするか、或は模範的世話女房にするかである。これ等は總て妻との如何なる接觸をも避けんとする手段に過ぎない。女は何れにしても一つの模範型ではない。彼女は判然たる一定の人格でもない。吾々はこの樣な固定觀念を捨てる時に來てゐる。女はそのまはりに、又近くに來る凡ゆる人々の上に、そのしぶきをやさしくふりかける生ける泉である。女は空氣の中の不思議に柔かい振動であつて、人々の知らない中に、それ自身無意識的に、動いて行つて、それに感應する振動を求めるものである。或ひはもしさうでなければ彼女は、不調和な、やかましい、痛ましい振動であつて、まはりにゐる凡ゆるものを傷けて行く。そして男もやはりそれと同じである。男は生き、動き、そして生存してゐるまゝに、一つの生ける振動の泉であり、誰かの方に、或は何物かの方に、震動し流動して行き、さうしてその相手からの反流逆流を受ける。かくして循環は完成され、そしてそこに一種の平和が生ずる。もしさう云ふ風でなければ、彼は憤懣、不調和、苦痛の源泉であつて、まはりの凡ゆる人を傷ける。

併し吾々は健康で積極的である間は、常に他の人間と本當に人間らしい關係を保たうと求める。而も、それは偶然的である、相互の關係は殆ど無意識的である。吾々は人間同志の關係を故意的に小細工しようとすると兎角打ちこはしてしまふ。さうして打ちこはすことは大抵は六づかしくはない。積極的に生きようとすると、吾々は干渉や强制しなくても、最も注意深くしてゐてもそのぶちこはしを生ぜしめ得るのである。

吾々は自分達自身に就いて間違つた考へを持つて働いてゐる。數世紀の間、男は征服する英雄であり、そして女は單に男の弓の弦、衣服の一部分に過ぎなかつた。その間、女は自分自身の魂を、男とは離れて持つことを許

された。そこで離別の仕事が、自由と獨立の叫びを大聲にあげて、始まつた。今や自由と獨立は過度なほどになし遂げられ、それ等は吾々の死滅せる感情と荒廢せる幻覺とが塵埃の如く堆高くなつてゐる空しき無何有鄕へと導き行くのである。

征服的英雄的仕事は、ヒンデンブルグ元帥の樣に退役であるのに、而もなほ現役である。この生長のとまつて了つたものを復活せんとする試みも世界に見えるが、それ等は結局、いつも馬鹿らしいことである。男はもはや征服的英雄ではない。さりとて男は又、死の如き永遠の中で未知のものに直面し、宇宙に孤立し獨りで生きる孤高の魂でもない。

その征服的離れ業はやはり演ぜられてゐる。今日の哀れな男兒等、殊に大戰中自分等の苦痛といふ利己的な悲哀に包まれた男兒等は、それが見込みのない離れ業だと云ふことを主張し續けてゐるのに……。

併し征服的離れ業も生長のとまつて了つたのも、兩つとも實演せられた。苦痛に包まれて魂の最後の孤立の中に永遠に面する哀感的英雄も征服的英雄と共に實演された。哀感的英雄は、勿論、今日では一層一般的であるから、より若い時代の青年達の自己哀憐的な、實演濟みの標本にとつては、なほ危險である。併しそれにしても、さう云ふのは死んでしまつてゐる、もうお了ひになつてゐる。

我々が今日なすべきことは、凡ゆる之等の固定觀念は宜しくないといふことを、遂に、認めることである。固定對象として、個性或ひは人格としてさへ、人間は、男も女も、大したものではない。偉大なる「吾存す」も人間には當てはまらないのだ。それに人間はそんなものはほつておく方がよいのである。どんな人でも、男でも女でも、偉大なる「吾存す」となるや否や、その人は何のでもなくなる。男も女も、夫々に一つの流れである、一つの流れる生命である。そして丁度堤がなければ川が流れない樣に、お互ひがゐなければ、吾々は流れることが出來ないのである。女は私の生命といふ川の一方の堤であり、そして、世界は他方の堤である。兩方の岸がなければ、私の生命は沼となるだらう。私自身を生命の川たらしめるものは、女と、私の隣人とに對する關係である。

そして私に私の魂を與へるものは、之れだとさへも云へる。誰か他の人間に對して生き生きした關係を持つたことがない樣な男は、本當に魂を持つてゐないのである。吾イマヌエル・カントが魂を持つてゐたといふ感じは、吾々にはしない。魂といふものは、私が愛したり憎んだり

本當に知り盡した人々と私との接觸、生き生きした接觸の中に形成され完成される何ものかである。私は私の魂に對する糸口を持つて生れた。私の魂の完成は私が爲さねばならない。そして私の完全とは、私の魂の如きものなのだ。今日以後、吾々が苦むのは、吾々自身の完成又は完全――これこそ平和――といふ感じを缺くことである。吾々が缺くもの、青年が缺くものは、自身が完全であるといふ感じである。大變つまらないものだと感じては、平和はない。そして平和といふのは不活潑のことではなくて、川の様に、生命が滿ちあふれて流れることである。

吾々は完全でないために平和でゐられない。そして吾々は吾々が持てた筈の生き生きした關係を少しゝか知つてゐない爲に完全ではないのだ。吾々は、相互關係を奪ひ去ることに信念を持つてゐる様な時代に生きてゐる。その相互關係をねぎの様にむいて行つて御覽なさい。遂に諸君は純粋な、空白の、虚無に達する。多くの人々が今や、そこに到達した。自分自身が全く空虚なことを知る様になつた。彼等は「自分自身たること」を極めて下手に望んだので、全然、或ひは殆ど、何ものでもなくなつて了つた。

殆ど何ものでもないことは、大して面白いことではない。而も人生は面白くなければならない。極めて面白くあるべきだ。「自分自身から逃れ去る」ために、「面白い時を過す」ばかりが能ではない。諸君自身であることが本當に面白いのだ。さて、人間に可能な二つの大きな關係がある。卽ち、男の女に對する關係と、男の男に對する關係とである。兩方ともに、吾々は絶望的に失敗してゐる。

併し男女の關係は實際の人間生活に於る中心的の事實である。次は男と男との關係である。それからずつと離れて、他の凡ゆる關係、父性、母性、姉妹、兄弟、友達がある。

ある若者が先日私にあざ笑ひ氣味に云つた、「私は性によつてイギリスが再生するとは信ぜられないやうな氣がする。」と。私は彼に云つた、「君には出來ないにきまつてゐる。」と。彼は性の様なつまらぬもの、女の様な平凡なものに超然としてゐることを私に告げようとしてゐたのだ。彼はありふれた全く價値のない、空虚な、利己的な青年で、布に包まれてゐなければ、ぼろ〱になつて了ふ木乃伊の様に、永久に自分自身の中に包まれてゐる男であつた。

そして性は、結局、男の女に對する、女の男に對する關係の象徴でなくして何であらうか。そして男の女に對

する關係は全人生程廣いものである。それは異つた、一見相反でさへある二つの存在の間の無限の流れである。貞節は肉體的情熱に關する男女間の流れの一部である。そして之等のこと以上に、吾々には何も分らない、微妙な無限の交流がある。私は敢へて云ふが、堂々と結婚してゐる二人の人々の關係は數年毎に、屢々彼等自身の何も氣付かない内に、深刻な變化をする。併し凡ゆる變化は、苦痛の原因となる。よしんば何らかの喜びをもたらすにしても、結婚の長い道程は不斷の變化の連續事件である。その事件の間に男女はお互ひにその魂を築き上げて自分等を完全ならしめるのである。それは常に新しい未知の國を流れて行く川の樣なものである。

併しながら吾々は甚だ愚かで、吾々の有限な考へに定着してゐる。ある男は云ふ、「私はもう妻を愛さない、私はもはや彼女と寢る氣はしない。」と。併し何故彼はその妻と寢る氣をいつも持たなければならないのか。彼がその妻と寢る氣のないこの時期に、二人を完全ならしめる如何なる他の微妙な重大な交代が彼と彼女との間に起つてゐるかを彼はどうして知らう。そして妻も、ためらひつゝ、凡ては終り自分はもう一人の男を見付けて離婚しなければならないと云ふ代りに、——何故立止つて、彼女の魂の中に新しきリズムを探ね、そして夫の中に新しい動きを求めないのであるか。凡ゆる變化の度毎に、一つの新しいリズムが確立せられる、吾々は成長につれて、吾々の生命を更新し、かくてそこに本當の平和がある。おゝ、何故吾々はお互ひに、嘗て變らない獻立表の樣に、いつもきまつて同じであることを欲するのだらうか。

若しも吾々が、も少し聰明でさへあるならば——。然るに吾々は性とか、金とか、人は如何にある「べき」か等といふ二三の固定觀念に捕はれて、全生命を失ふのである。性は變化するものである、生き生きしてゐるかと思ふと靜かになつたり、火の樣になるかと思へば、全く明白に消え去つて了ふ。然るに一般の男女はその凡ゆる變化を考へる智慧を持つてゐない。彼等は鈍い、生の性慾を求め、それをいつも求めてゐる、そしてそれが駄目になると——全くの失敗で！　全部を打碎いて了ふ。離婚だ！　離婚だ！

私が人類を野蠻の狀態に戻らせたがつてゐると云はれるにはうんざりする。男女の關係のことになると、近代の都會人はかつて存在した最も未熟な、最も未開の、最も粗硬な野生の猿ではなかつたかの樣に。吾々の空虛な文明の中に私の見る凡ては、男女がお互ひに感情的にも肉體的にもこなごなにぶつかり合つてゐることである。

で、私が願ひたい總ては彼等が立止つて考へて欲しいといふことである。

性とは、私に取つては、男女間の關係の全體を意味する。ところでこの關係は、吾々が知つてゐるよりも遙かに大きいものである。吾々は只二三の未熟な形式——妾、妻、母、戀人を知つてゐるだけだ。女は偶像か繰り人形の樣なもので、いつも一つか二つの役目、卽ち、戀人、妾、妻、母等を演じなければならない樣にされてゐる。若しも吾々がこの固定を破つて、把握し難き女の眞性を知ることが出來たらばと思ふ。卽ち女は一つの流れであり男の生命の流れとは全く違ふ生命の流れであり、そして各々の川は限界を越えることなく、それ自身の道を進まなければならず、かくて男女の關係は、ある時はもつれ合ひもし、それからまた分れて、旅をつゞけるところの二つの並流する川だと云ふことが分ればと思ふ。その關係は一生涯の變化であり一生涯の旅である。そしてそれが性である。時には、性慾そのものは全く分離する。而もその相互關係の偉大なる流れは、消えることなく、依然として進展する。之れが生ける性の流れであり、生涯續く男女間の關係であり、性慾はその關係の唯一つの生き生きした、最も生き生きした表現であるに過ぎないのである。（未完）

★本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
四〇下	一一	時に	特に
四一下	一五	場合が	場合か
四二下	六	分折療法	分析療法
四六下	二二	六九頁以下段	六九頁下段
六二上	四	fece	force
七二上	二一	毒殺や	毒殺か
七八上	一七	學界	學會
八〇下	一二	一九三二	一九三五
九四上	三	小松長平	小杉長平
九七中	一九	杉並女子	東京女子
同	二三	釋譯	飜譯
表紙四	一〇	Charakler	Charakter
同	二四	Unbewussten	Unbewusste
同	二五	Mein	Meine

時評

時言三題

大槻憲二

一、文科大學改造論

今の各文科大學は官公私とも皆或る意味で行き詰つてゐる。少くともみな大體衰運にあると云つて大過はない。人材は多く經濟科や理科工科あたりから出て、一時代前のやうに文科からはあまり出なくなつてゐることは、大學當事者たちの自ら承認してゐるところだ。

何故から云ふ現象になつて來たのであらうか。それには種々な源因もあらうが、一つには文科大學の制度が既に時代遲れになつてゐるからだと私は見る。大學の本來の使命は直接實際の役に立たないことを教へたり研究したりすることにあると、觀念論哲學的な考へを持つてゐる某大學理事がある。併し事實上そんなことにはなつてゐないのだ。人生の事、總て直接にも間接にも實際の役に立たないことをやつてゐて隆昌する筈がない。既にさう云ふ時代遲れの考へを持つて大學を經營してゐる上に(否、持つてゐるが故に)、大學の制度の建て方そのものが學問的でもなければ、實際的でもない。只今私

アプフウブ

學問上の我が子殺し

不老泉院主

フロイドの浩翰な『入門』を邦譯した某醫學博士は、後になつて「精神分析は時代の尖端から沒落した」と放言したとは人々のよく知るところである。千餘枚に亘る大飜譯を完成するといふことは大變な骨折りである。それほどの仕事を完成することは、親が子を產むにもまさる努力であらう。それほどの努力の結果に對しても、そのために人々から本人が批難されたり嗤はれたりすると、その子を殺して(沒落させて)了ふことさへ辭さないのが薄情な人間の常である。醫者たちからも左翼派の人々からも精神分析が毛嫌ひされてゐるので、醫者や左翼派から除けものにされては立行けないその博士は、自分の生活を考へて精神分析を

は各大學の制度を細かく調査したり批評してゐる暇はないが、學問的に學制を立てるならば、哲學科(哲學、史學、美學、その他)と科學科(社會學、心理學、言語學その他)とに二大別して純文學科と云ふやうな創作又は鑑賞を目的とするやうなものは排除せねばならない。それは學問ではないからだ。實際的制度をとるならば、創作家、映畫家、新聞雜誌記者、教育診療家などの養成を目標とすべきだ。目下の大學では新參の明治大學、日本大學の文科が大體に於いてこの實際的目的を目指してゐる。私立の古參大學はみな官立大學の模倣を事として學問的でもなく實際的でもない制度を採用してゐる。文科私學不振の源因の一つは確にこの一點——私學精神の喪失——にあると、私は信じてゐる。

殊に滑稽なのは、純文科を英、獨、佛、露の四つに分けてゐることだ。日本は外國の植民地ではないのである。一時代以前に榮えた外國の文學をそのまゝ輸入することを露骨に表看板にしてゐるやうな學制の立て方はあまりに不見識である。勿論、私は英米獨佛の文學を研究して輸入することが不必要だと云つてゐるのではない。それ等は必要だが、大學の學制をそれに準ぜしめることは滑稽だと云ふに過ぎないのだ。外國文學研究はその大學附屬の特殊の會でやればよいことだ。數から云へば全國各大學の文科卒業の大半は英文學者だらう。そんなに澤山に英文學者(正しく云へば英文學的物知り、又は鑑賞家、學者と云ふべく研究の立場がない)を製産して何になるだらう。いくら文科でもも少し實用的な學問が他にあるのに。

かう云ふ時代遲れの學制の立て方に於いて私學が官學を全く模倣してゐるのは、私學としての大きな墮落である。かう云ふ制度をとつたこととそれ自身

否定して了つたのだらう。一家の生活の都合のために保險金をつけて息子を殺す親の心理と、この博士の心理と果してどれだけ違つてゐるのか。

ところで精神分析はその後數年になるが、一向沒落もしなければ死にもしない。愈々盛んになりつゝある。豫言の外れた博士はどんな顏をしてゐるか、一度殺した子供が生き返つて來たのだから、良心があるならあまりいゝ氣はすまい。

精神分析は死んだと云ふやうな放言をする男はその博士ばかりではなく、外國にも隨分ゐるらしい。たゞその人たちは博士のやうにフロイドの飜譯をやつてゐないだけだ。だから少くともわが子殺しの罪だけは犯してはゐないわけだ。精神分析の死の虚報者たちの事をフロイドはその『運動史』の中で、實に輕妙に皮肉つてゐる。曰く「これに對する答辯としては、我々はかのマーク・トヱンが自分の死を誤報した新聞紙に對して與へた電文の如きを以てしてもよからう。——俺が死んだとは吹き立てたね。」と。斷言の中の願望への嘲笑と指摘と！ ところで

が私學の獨自性の放棄を意味し、その將來の衰運を豫約したものに外ならなかつた。誤つては改むるに憚ることなかれ。學問と雖も現實を遊離しては全く意義と價値と勢力とを持ち得ない。噴火山上に惰眠を貪つてゐるやうな現在の文科大學の內で、最も早く眼覺め、その學制を學的に、又は實際的に改變すること最も早きは何れの大學であらうか。

現在のやうな非學問的な、非實際的な制度でも、官學はその卒業生の販路たる附屬私立大學又は中學を澤山に持つてゐるので、その卒業生を路頭に迷はせるやうなことはあまりすまいが、私立大學にはそのやうな販路が殆どないので、たゞ形式（建物と學制）とだけは官學の模倣をしても結果がそれに伴はない。上べだけを尤らしく立派にして入學者を欺瞞し、卒業生のルムペン化を冷眼視してゐるのは、學校商賣道德上の一大罪惡であらう。實際、私學の卒業生はみな甚だしく悲慘だ。私は、可愛い息子を現在の如き事情の私學文科に入れる父兄たちの勇氣に驚くと共に、現在の如き事情を知りつゝ過去の夢を今なほ續け、茫然としてゐる大學當事者の心臟の强さに呆れる。

二、日大生殺しに就いての餘言

私は日大生殺し事件に就いては、『力之日本』二月號にその分析的見地からの所見を公にしておいたが、その中に云ひ殘した事をこゝで補つておく。

一月の研究會でやはりこの事件が問題になつた時、霜田靜志氏はイプセンの『幽靈』を引合ひに出し、この作の女主人公が、その夫の遊蕩性がその息子に於いても現れんとするのを見て（息子が女中を誘惑しようとする現場を

現實はそれ自身の法則によつて動いてゐるのであつて、個人の願望とは獨立してゐる。

哲學と科學

科學は分析的方法をとるものだし、哲學は綜合的方法をとるものだ。これは當然である。併し、哲學と科學とは各々性質と職能を異にするので、綜合の故に分析よりも上位にあるとか下位にあるとは云へるものでもなければ、科學が發展して哲學になると云ふやうなわけのものではないことは、オタマジヤクシが幾ら生長しても蛙とならざると一般である。科學は飽迄も科學であつて、それを哲學的綜合に應用することは飽迄も「應用」であつて、その發展ではない。勿論、その應用は勿論結構であつて排斥すべきではないが。哲學と科學との關係は前號の石丸氏の講演『事實と意味』に於いて簡明に說かれてゐた。

精神分析をすれば、それに依つて心の綜合的機能が失はれてバラバラになるな

見て）「あゝ、幽靈！」と叫んだ心理に言及し、貢の母親の貢への憎悪の中にもそれに類した絶望感があつたらうと云はれたのは尤な說であると思つた。それは私が右の論中言及した、彼女の「希望の喪失」の一契機をなしたものであると云ふべきであらうが、とにかく彼女の息子への憎悪の中には夫への憎悪が多分に轉位せられてゐたと云ふことは疑ひの餘地がなからうと思ふ。

×

一月十五日の朝の新聞には、妹榮子の『手記』なるものゝ一部分が發表せられ、それに依つて野村檢事は彼等の「心理過程が判然」し「泣かされた」と傳へられてゐる。同檢事はかう云つてゐる。

「あの年若い娘と可弱い女の手であゝいふ殘忍な兇行が演じられたと思へず、他にある共犯者を隱してゐるのではないかと追究に追究したものだつた。詮じ詰めて結局、共犯が無かつた事も確かになつたが、この謀殺事件は要するに、保險金の問題さへ介在しなかつたなら恐らくこの母娘の氣持としては貢を殺した後自分等も自殺し果てたことだらうと思つてゐる。榮子の手記で彼女がこの事件に關係した心理もはつきりしたのだ。」

私の讀んだところでは、あの『手記』にはとり立てゝ人を首肯させるものもなかつた。メンデルの遺傳法則なんか持出して、結局人を胡麻化さうとしたものでなからうかと云ふ疑ひさへ起こさせるものであつた。メンデルの遺傳法則が問題なら結婚だけしなければよいのだ。何も兒を自分の手で殺さなくてもよかりさうなものではないか。然るにそれに對して野村判事が「保險金の問題さへ介在しなかつたら、恐らくこの母娘の氣持としては、貢を殺した後に自分等も自殺し果てたことだらうと思つてゐる」と云つてゐるのは、んてことが實際あり得るかどうか、常識で考へて見ても分る。分析ばかりせずに綜合せよと云ふやうな要求をする人が西洋にもあると見えて、フロイドも『療法論』の中でそれへの辯明を試み、「それに依つて新たな課題が生じたとは考へられない」と云つてゐる。諸岡博士の講演の趣旨は右の說と一致するものであると信ずるが、もし初步の人々が誤解しては困ると思つて贅言を附しておく。

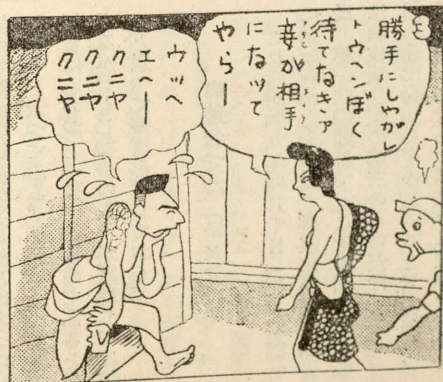
串差おでん（漫畫分析）

これは昭和九年四月十日「每夕新聞」に揭げられたもので、畫家は松下井知夫氏。第一四〇回目で、こゝに引用したのは四枚續き畫の第三のものだけである。話の筋は命知らずのあぶ八と云ふ男が、妖婦串差おでんの男乾分に喧嘩を吹掛けてゐるので、女親分のおでんが出て行つて「話は私がつけようよ」と申出るが、あぶ八はなかなか承知しない。そこでこの圖の場面となつて片肌ぬぎ乳房を見せると、あぶ八先生すつかり幼兒に還元し

檢事の心理までが、愈々私には分らなくなつて來る。遺傳のために兒を殺すほどなら、保險金など問題でなく一家自滅すべき筈であるのに、保險金がとれるので、自殺を見合せたと云ふことは、寧ろその陳述（遺傳のためとの）の嘘であることを證明してこそ居れ、何ら彼女等の眞意を告白するものではないではないか。保險金の問題がなかつたならば貢を殺しはしなかつたと云ふことは愈々私には疑ふ餘地がないのに、野村檢事が斯くも容易に甘く淚を流したりするのは、何か判事の無意識に彼女等に自己を同一化せしめる如きコムプレクスがあるのであらうと想像せしめる。

然もその翌日の朝日新聞論說欄はまたこの『手記』に言及し、「檢事の感想として、この謀殺事件にもし保險金の問題が介在しなかつたら、恐らくこの母と娘とは、實に實兒を殺害した後彼等は自殺したであらうと語つてゐるのは、吾人も全く同感である」とあるのだから、私には益々奇異な感じがして來た。論說記者は續けて「この事件に保險金の問題の附隨してゐることは、兇行の殘虐性を一層深刻ならしめるところで、犯人がその父を呪ふ心情にはますます同情の念を起さしめるものがある」と云つてゐるのは、私にはその文意さへ理解出來ない。かう云ふ甘い見方をする人間ほど一度調子が違つて來ると急に冷酷な見方に一變するものだ。人間と云ふものは、分析せられるまでは、事實——それが善い事實であらうが惡い事實であらうが——を冷靜に正確に客觀出來ないものと見える。自分のコムプレクスで見てゐるのだ。新聞記者はまづそれでもよからう。裁判官がそれでは誠に不安な感じを我々は禁ずることが出來ない。

一月三十一日の新聞を見ると、例の校長殺しの鵜野洲が死刑の宣告を受けて了つてグニヤ〱になる。その虚を見すまして第四の場面で乾分があぶ八を毆りつける、おでん親分それを莞爾として眺めてゐると云ふわけになるのである。

串差おでんの名は一方妖婦高橋おでん

を聯想させると共に、串差のおでん、卽ち關東煮きを他方聯想させるところに漫畫的效果があり、串差のサディズムの中に男性コムプレクスが出てゐると云ふわけであらう。

て後、何も云ふことはないが、校長の遺族のことをよろしく賴むと云つてゐるのを讀んで、私は甚だ苦々しい思ひがした。それほど校長の遺族の事が今になつて氣にかゝるなら、始めから校長を殺さなければよいではないか、人を馬鹿にするにも程がある。彼れには控訴の意志があるらしいから、こんなしほらしさうなことを今云つておけば、控訴の時に何かよい效果があるだらうと豫期しての芝居だとしか私には考へられない。鬼の念佛とはこんなのを云ふのだらう。併し、野村檢事のやうな人には、鬼の念佛も佛の念佛のやうに響くかも知れない。さうなれば、鵜野洲の芝居も當ると云ふものだ。（以上は『力之日本』誌二月號に掲げられた論旨を追補したものである。）

三、東劇に『或る日の素盞嗚尊』を觀る

二月一日東劇に、武者小路實篤原作、市川猿之助主演のこの作を見た。これは十五年前の作に懸り、只今では正直のところあまり面白いものではない。素盞嗚尊の稻田姫救助の神話を材料としたものだが、內容の實質は作者の人格內のエスと自我との鬪爭を劇化したものである。エスを象徴する「恐ろしい男」（八頭蛇の代理）はサディズムとナルチスムスとエゴイズムの權化で、それを社會我、現實我象徴の素盞嗚尊が克服して後に、村の群衆に向つて自分はこの「恐ろしい男」のやうに亂暴者だが、今後は人々のためになるやうな男になる」と云ふ意味のことを繰返し誓言する。また自分はこの「恐ろしい男」を他人とは思へないなどゝも告白する。作者の人道主義の發生が如何にその非人道主義的願望の存在に負うてゐるかを示すものとして面白い。フ

亂暴者が大勢攻寄せた時、男が出て行つては先方は却つて暴れるが、老婆が半裸で乳房をふりつゝ出かけて行つたら先方はすつかり恐れて逃げ出したと云ふ話を私は時々聞く。母乳への記憶によつて亂暴者を幼兒に還元させる心理的トリックを心得てゐるところに、妖婦の中の母性本能が見られるのであらう。內容は面白いのだが、畫があまり上手でなく、下品でさへもあるので、四面だけを引用しておいた。

靑の研究

支那では「東」と「靑」と「生」とが同一視せらてゐると云ふことを、支那から歸つた或る學者から聞いたことがある。東は太陽復活（再生）の方であり、靑は植物の生色であるからであると共に兩語同音（支那ではどうか知らないが）のためでもあらう。して見ると、「人間至るところ靑山あり」と云ふのは、復活の山と云ふ意味であらう。

「男子志を立てゝ鄕關を出づ、學もし成

ァウストとメフィーストとはゲーテの胸に住む二つの魂であるやうに、誰にだつて二つの矛盾した我がその胸中で闘爭してゐるのだから、かう云ふ作は何人にも訴へるところ大きい筈だ。併しこの作の表現形式が武者小路式一人よがりの句調でなされてゐるせいか、かう云ふ大劇場へ持つて來ると漫畫的童話的な效果になつて來るので、觀客はゲラゲラ笑つてばかりゐて一向眞面目にならない。作者は大眞面目なんだが、このやうに喜劇的效果に墮して了つたに就いては作者も興業者も一考せねばなるまい。これは戲曲とは云へない。パヂェントだ。それに小劇場向きのものだ。寧ろこれは舞踊劇に仕立て直して了つたら却つて遙かに面白いものになつたであらうと思ふ。

ひとり小絲源太郎氏の舞臺裝置のみが、木刻人形のやうな大まかな味を見せて原作の童話的な味と調和して光つてゐた。名だゝる色彩家だけに色感の美しさはまた格別だ。背景を晝夜明暗の二面に描き分け、素盞嗚尊と恐ろしい男との二つの世界を象徴させたり、衣裳に獏、むかで、彗星などを模樣化してその性格を表現したり、なか〱細かい苦心と努力との拂はれてゐたのは多としなければならない。劇作よりも裝置の方が上出來であつた。

大本教事件を契機とする自他分析

奥本島田

昨年十二月八日、突如として大本教の檢擧があつたことを新聞紙上で知つ

らずんば死すとも歸らず、骨を埋むる豈墳墓の地(卽ち鄕關の內)のみならんや、人間至るところ靑山あり」と云ふのだから、「墳墓の地」と云ふのはその昔「父母の地」とも通じ、鄕里と云ふわけであらう。とにかく落着いて死ねるところと云ふ意味であらう。生れ故鄕へ歸つて死にたいと云ふのはあらゆる生物の本能であるが、何、生れ故鄕でなくたつて何處にでも靑山(生山、復活山)はあると云ふのは併し如何にもその詩人の故鄕への強い執着を反對に告白してゐて悲痛である。東京の靑山墓地と云ふのは、この「靑山」とどう云ふ關係があるか私は知らない。大槻著『精神分析讀本』には「靑い花と靑い鳥と靑の光」と題する論文が這入つてゐるが、これは西洋の靑(空色ブラウ)を問題にしてゐるのであつて東洋の靑は綠であるらしい。日本ではさうだが、支那もさうであらう。でなければ「生」と同一視せられる筈はないと思ふ。空色では復活にはなりさうにない。昇天したつきりになりさうに思はれる。

た。私は七年餘り綾部に居住してゐたせいか、毎日その記事を注意して讀んだ。私はもつと早くこんなことはありさうなものだと思つてゐた程であつた。それは彼等の白日夢的願望を實現し（曲められた形ではあるが）つゝあると思はれたからである（これは私だけの勝手の見方である。以下同斷）。彼の白日夢は宗教的聖典となり、その現實的形態は、社會的に結成せる昭和神聖會、昭和青年會、人類愛善會等である。

彼等は「祭政一致」といふことを云つてゐるが、それは古來の我が國の思想で、對外の危險思想に對立する日本精神といふ現實をとつて表現されてゐるから我が國民的意識の檢閲を通過してゐるのである。

宗教的雰圍氣につゝまれて生活することについては、人間の極樂淨土生活の願望を認めなければならない。卽ち、自己の全財産をもつて宗門に入ることは、現實生活を逃避して宗教的社會の安全を求めて生きやうとすることなのである。換言すれば、自己と財產と親子諸共に極樂往生をすることとなのである。これは自我が弱いために現實社會生活が苦しいためであるやうだ。

文明の進步につれて社會生活は便利になつてゆく。而かしながら智識階級が新興宗教を求めてゐることは不可解のやうである。だが、考へて見ると、これは不思議でも何でもない。現代の文化施設はなるほど次第に進步的のもので便利になつてゆくが、人間の心理はこれに並行して安泰にはなつてゐないで、無意識的願望は依然として存續してゐるが故に、現代文明の進步を以てしても人間の無意識的願望を現實的生活に於いては滿してはゐないのである。これは古代に於いても現代に於いても變りはない。その無意識的願望が現實自我に比して强ければ强いほど——自我とエスとの矛盾があればあるほ

代表的身の上相談 分析解答

（擔當）黃表紙鐵輔

日蔭の花にも戀がある

（問）前文おゆるし願上候。妾こと、さる大店の主に圍はれる賤しき身に候へ共最近偶然の事より舊戀の青年におめもじ致し、それ以來、人目を忍び昔の關係に立戾り其の度每に駈落を誘はれ流石氣丈のつもりにても途方に暮れ居り候。その人は三年前妾が某暴力團長の日蔭の花に相成り居候頃海岸で知合ひし方にて、當時は實業家の令息として溫良なる純情を捧げられ候處、二人の不義を發見され彼は全身へリンチを受け妾も死ぬ目を蒙り候ひしに幸か不幸か兩人とも死に切れず此の度再會致せしものに御座候。然るに彼は其の後與太者仲間に入りて今も尙、强談脅迫の渡世を致せる趣に候故妾としては、親切な老主人と悲戀の青年との間にさしはさまり、如何に決心致すべきを

ど――其人々は現實生活を苦と見る。卽ち、滿たされてゐないのである。この無意識的願望の强弱は人々の智識、財產及び階級等には關係はない。宗敎は弱い自我をして現實を逃避して生活せしめるものであるが故に、又人々は一般にこの傾向をもつてゐるが故に、現代の文明如何に關係なく人々は宗門にどん／＼入つてしまふのである。

極樂淨土や天國は人間が死んでから往生するところであると古來から說かれてゐる。然るにこの極樂淨土や天國を現實社會に建設するやう念願する人々もある（雜誌『眞理』昭和十年二月號、友松圓諦氏の淨土建立の行願、及び大本敎の地上天國の提唱）。この地上天國は萬人が念願してゐることであらうが、これは不可能であるやうだ。人間の無意識に於いて生と死とを同一化し得る間は、蓋し、人間の極樂願望は止むに止まれぬことではある。宗敎家が人類の必然的願望であるところの極樂淨土を洞察して、そこに人生の歸趨を定めたことは、蓋し、宗敎家の千古不滅の達觀であらう。

宗敎に救はれて逃避生活を樂んでゐることは、現實をハツキリ認識してこれに直面するだけの勇氣をもたない人々には幸福であるやうだ。而かしながら宗敎によつて凡ての人々が古來から救はれてゐたのではない。現在も亦然り。如何なる人間が救はれないか、それは死後の極樂淨土の存在を信じない人々である。科學文明の進步に伴つて極樂淨土を物質的に認識しやうと試みたつて、それはだめであらう。故にかゝる人々は救はれがたいであらう（？）。極樂淨土を物質的に認識しやうとするよりも、極樂淨土觀が人間心理に如何にして入つて來たかを知らうと試みることによつて、物質的に認識の慾求も解決し得らるゝやうである。

明暮迷ひ居候。何卒々此の惱みによき道をお示し被下度く伏して願上候。先づは取急ぎ亂筆にて（玄治店より）

（答）「しがねえ戀の情が仇」になつた貴女の惱みにご同情いたします。お手紙の樣子によると、表面上の解決は非常に手易いやうですが、本當に貴女自身の將來を考へると難しい問題ですネ。それは――ハツキリ申し上げると、貴女が現在、本當の「彼」を愛してゐるかどうか疑問だからです。貴女の心の底はご自身は勿論「お釋迦樣でも知るめえが」でせう。

女性の身として經濟的に獨立する事は中々困難だから無理ありませんが、貴女はどうも日蔭的生活の安易さが身に泌みてゐるやうです。それには勿論貴女を金錢で縛るブルジョアの父性愛にも似た甘やかし方が、貴女にとつて嬉しいらしい。併し人間である以上、もつと他の人間性を求めるのが尤もです。その場合、女性の對象になるのは、自分の子供の代償になる樣な青年が最もいゝとみえます。さうすれば、その女性は、父と愛兒と戀人、金と肉と魂と・・・全部自分のも

×

一世を指導し、人類を救濟しやうとする者は、自己の意見を發表しやうとすることに、其時の權威や大衆の意向によらなければ出來ない——時々の權威や大衆と同じ意見でなければ發表し得ない——やうではだめなことで、それでは指導者或は救濟者としての價値は低い。一世の指導者は時の權威や大衆に呼びかけるものであるから、その意向に氣を使はなければならないが、時には權威者や大衆に容易に受け入れられない思想、例へばコペルニクスの地動說や、ルーテルの宗敎改革の提唱の如き、を敢てしなければならないからさう云ふ場合には大人げない振舞をしてはならない。

一世を指導せんとする批評家の任務は重大である。人類の社會生活上の羅針盤である。大衆はこれに對して敬意を表さなければならないのは勿論であるが、それよりも大切なのは、彼等の批評に對して感情的であつてはならぬといふことである。批評家も亦然り。

大本敎が邪敎であるか否かは私の知る限りではないが、我が國に健全なる社會批評家があつて、大衆は感情を拔きにしてこの批評家の說を檢討し、直接に或は間接に大本敎の眞相を知ることが出來たならば、多數の人々を不幸にすることはなかつたであらう。

高大なる超自我的智識と、たくましい實行力をもつて社會生活を處理する人々の少ないかな！

×

私は七年餘り大本敎の發祥地綾部に居住してゐたので、その域內を時折逍遙したことはあつたが、固より信仰者にはならなかつたし、又惡いとも良い

のになるからです。

貴女の場合は例外なくコレです。しかし、日蔭の君よ。いやさ、笑の奴隷よ。お芝居や小說なら充分效果的面白さがあるが、實人生として、貴女はもつとよく自分の眞相を知らなくてはなりません。

解答者の理想としては、貴女の眞心で愛人を正道に戾してから、貴女も妾業を淸算し、堅實な愛を發展さすべきです。けれども、これには種々な覺悟が必要で第一に貴女自身が親父的旦那から斷然離れられる自信がありますか。次に、貴女はその境遇の爲に、現在の社會惡に寄生してゐる彼を却つて劇(ドラマチック)的に愛してる氣味があるのではないでせうか。元の通り溫良な青年に返つた後でも彼を心から愛せますか。それから第三に、あなたの彼はうるさい家族制度や世の中の口と鬪つて貴女を愛し拔く力があるでせうか。(結婚は第二問題)

以上の諸點が一つでも缺けたら、貴女方は却つて破滅です。もしかすると、私の此の逆質問で貴女は別な人生方針に考へつくかも知れない。さうしたら又御相

とも批判を試みたこともなかつた。以下述ぶるところも亦善惡の批判の外にある。

「地上天國の建設」と「祭政一致」とは辻褄が合つてゐないやうであるが、その背後の本體は同じものなのであると私は思つてゐる。――卽ち、獨尊觀念と無意識願望にその根をもつてゐるものであらう。で、一個人の（現實的にはつきりと見えがたい）獨尊觀念と願望とから出發した思想が現實的形態をとつて進むことに大衆が與するならば、その結果に於いてその一個人の出發點（獨尊觀念と願望）を現實的にハツキリと見ることが出來るであらうことは疑ふ餘地はないやうである。

私は大本教が邪教であるかどうか知らない。だからそれに攻撃の矢をさし向けやうと試みることは好まない――それが善きにしろ惡きにしろ――。で、大本教關係の人々に對しては、その教主たると信者たるとを問はず、私は寧ろ氣の毒に思ふものである。その信仰に入らなければならなかつた人々――多額の財を投出して信仰に入つて今回檢擧にあつた人々は、財と精神との二つの莫大な損失を見なければならなくなつた。そこ迄導いて來たところの各人自身の無意識を私は察するのである。故に、若し各人が勇氣を奮つて自己の無意識を知るために精神分析を試みてゐたならば、否、今からでも試みられて無意識を意識化することが出來たならば、自分自身でどうすることも出來ないところの無意識のために自己のエネルギーを消費せずして、現實に向つて有效にそれを消費し得られたであらう。

×

私が同情をよせるのは何か故障のある弱つてゐる人々である。これは私の

談に乘りませう。

（係りよりお詫び）今月は野暮用の爲一人分しか解答出來ませんでしたが、皆様の御好評に應へ、次回からは左の如く發表致します。

(1) 或男（アルマン）の娼婦を愛する惱み

(2) 若後家になつたお輕の將來は？

分析折々

妬鬼庵

この間の大雪の日、人々は苦しめられてゐる樣なことを云ひながらも實に嬉々と立騷いでゐた。省電は殺人的滿員で、しかも普段の四五倍遲い。それなのに人々は身體をひん曲げられながら客留めの寄席か夜の錢湯のやうに口々に駄洒落を連發してワハハ〳〵と笑ひ合つた。胎内に集つた同胞のやうに。

×

雪に立ちこめられると、胎内空想が――死の風景、天國の別郷が忽然と湧く。ましてや大腦をしびらす酒場、相合傘、

過去に受けたことなので、こんどはこれを反對にやつてゐるのであつて、自己の過去の状態を他人に投出して同一化してゐるのである。それで同情があることを、私自身及び他人が認めてくれてゐても、結局は自己の無意識に同情をよせてゐるのと何等變りはないのである。

この心では社會的に働らかうとするとどうしてもかたよつてしまふ。社會運動家は社會的の病氣にかゝつてゐる人々にばかりリビドーを向けてゐるやうな醫者であつてはならない。精神分析學の立場からいふならば、人間精神の健全なると不健全なるとを問はず人間の無意識心理を對象とするものであるから、故障のある人々の無意識について云々することはほんの一端にすぎないのである。

人々の無意識を抑壓して彼等をして信仰生活をなさしめてゐることも、又、人々が無意識を分析する勇氣もなくして宗教へ逃込んだのも、其の本人は少しも知らぬことなのであつて、抑々私自身がこの兩者をもつてゐるのである。それを罪は相手に、無力にありとして投出してゐるのである。これは私の自己分析の不十分なのと、分析學修得の不十分とを僞瞞せんがためである。（以上十一月十六日）

私は最初に「大本教事件とその感想と」の題下に書かうとしたのであつたが、それは精神分析宣傳の願望をもつてゞあつたが、私は精神分析學を以つて社會的に働いてゐるのではないので、私の現在の状態では分析學はまだ他人のもつてゐるものなのである。例へて言へば、私は醫師にかういうふうにして治療してもらつたので、他の同病人に貴方もかうして治療を受けなさいといふてゐるのと同じことである。それが私の超自我の無上命令である。惡

車内に同席した場合、不思議な親和力が燃え出す。女を口説くならこの時に違ひない。

×

口説くと云へば、最近、迂生は又、アドライターになつた。一人の女より所謂大衆を口説く方が一種の「男子の本懐」みたやうに意氣込める。

×

選擧の立看板が街々にズラリと行列してゐるが、同じ大きさ同じ色彩だと、筆太で尨大に書かれたのが一番えらい様な氣がする。人間の感情——意志——行動なんて、つまらない刺戟（實は、探い無意識動機）に支配されるものですナ。

×

貴志康一氏歸朝第二回の音樂會を見た。氏は「指揮舞踊」と云はれる程、舞踊のやうに指揮臺を躍る。が、小さな指揮棒をもつてることに變りはない。そして出演の新響フルメムバーが氏の熱にうかされながらも、指揮者の動靜に目もふれず、やつてる事も普通同様。畢竟、指揮は幼兒期の魔術による念慮萬能感から

いことできないが、私の超自我はまだ低調である！　私は私の超自我のために現在のレベル以上に精神分析學を容易に修得出來ないのである。もつと學習せなければ私の智識は低いのだといふことがわかつてゐても。他には又これ以上に社會的に活躍しがたいのである。私はこれまで必要にせまられなければ實際に應用して働き得る程度の勉强はしたことはなかつた。

　精神分析者としては社會的に働かうとするならば、一般人間及び個人的の無意識を對象として働かねばならない。さうすることによつて、精神分析は人間の社會生活に必要な重要な、任務をつくすことになるのである。（完）

『生きてゐるモレア』分析考

倉橋久雄

映畫『生きてゐるモレア』は、一夕の娯樂の對象とするには惜しいほどコクのある分析的な作品である。分析を知らずしてはこの映畫の眞價はわからないと云つても、敢へて過言ではあるまい。原作並びに監督は『情熱なき犯罪』のヘクト・マクアアサーである。

　主人公モレアは出版業者である。彼は物質主義者で、彼の興味はたゞ「美しき人生の穫物」にあるのみ。それだけに生甲斐を感じてゐる男だ。時折「僕は他人の道德なんて改善したくない。退屈な美德は瞞着だ。諸君のところでは、その美德といふ奴が臭氣を放つてゐる」と云ふやうな臺詞をも云ふ。と

淵源してゐるらしい。

×

分析的探偵小説の權威、林博士の「人生の阿呆」「決闘」を讀むと、段々低徊趣味（原稿引伸し主義）になつてる様に思へる。いつそ、氏の快論の通り、餘技的トリック小説を離れた文學を示して頂きたい。本當の「科學者」が丹念に人生の一日を（「ユリシーズ」みたいに）書いてくれたら、文學にも新しい魅力が生れるだらう。

×

サラリーマンになつてみると、現代小市民の、恐しい機械化・無明・利己主義化がハツキリ判る。情熱だの理想だのと云ふ字は來年の辭書には無くなるかも知れない。「ラッシュアワーに拾ふたバラを」といふそのバラは、今になつて氣附いたんだが、バラ錢のことらしい。

×

チヤップリンが機械文明を呪つた映畫「モダンタイムス」の噂さを封切前から方々できく。彼は悧巧な不幸者だ。何しろ彼のファンには二種類ある。彼に同一化

にかく恐ろしく高慢なキザな男で、常にある氣取つたポーズをしてゐて、一見非人情的な世界に生きてゐるやうに見える。

彼の書齋には、暖爐の上にペルシヤの馬の置物があり、初版本がずらりと書棚に並んでゐる。いづれも彼が滿悦の態で、彼の愛人コーラに説明したものである。

コーラは年若き詩人であり、彼女にはポールと云ふ許嫁者がある。フロイドの云ふ「憤る第三者」である。かう云ふ條件が伴はないとモレア型の男には興がないのだ。彼は云ふ「どうも僕には人を惱ます癖がある。」と。そして「美しい娘が結婚すると寂しくなる。僕の唯一の感傷だ」と。それで、ポールが戸外で待つてゐるのを承知で、彼とコーラとは最初の接吻を交す。その直後、ポールをその室に迎へ「君はコーラと結婚するさうですね。僕は君たちを祝福しよう」などゝ云つて、二人を殘して戸外に去る。だが間もなくモレアは戻つてくる。彼は鞄をその室に忘れたのだ。

二人の間は遂にポールの知る所となり、ポールはモレアを射つたが、果さず。モレアは、事務員が警察に電話するのを止めて彼をゆるす。かくて「憤る第三者」は敗北し、彼等から姿を隱す。當然、彼等の戀愛も破局となり、「ミス・ショパン」と渾名されてゐる、男嫌ひの作曲家が彼の新しい對象となる。コーラの嘆願に「涙は愚者の避難所だ」とモレアはとりあはず「接吻は男にとつては娛樂だが、女にとつては契約だ」と云つたりする。そのくせ「僕自身を憎んでゐる」と言外に、自己のコンプレクスを告白し、「僕は僕の生き方を生きるより仕方がないのだ」とか「泣きたいと思つても自分の罪を泣けない男だ」と自嘲したりする。

して別自我(もひとりのじぶん)として觀る者と、全然客觀視して自分の優位を感じて笑ふ者と、――どつちが本當のファンか、僕も知らん。

×

最近觀たもの寸評――『モスコオの一夜』例によつて例の如く、父的許婚者と息子的愛人の間に挾まる女の話『大尉の娘』曾て不老泉主人の分析された如く、女觀客の八重子に對する同性愛的同情のナミダ！「五郎劇」笑ひで誤魔化した民衆の正義觀『生きてゐるモレア』感傷の排泄もタマにはしたくなります『モンパルナスの夜』生の本能と死の本能に激しくゆすぶられて犯罪する者を描く。九十點以上。

×

近頃流行るものは、おでん屋、花柳界相撲……實に單純な復古趣味。絶望時代には、兎角、心理的に古式反復(レカプチユレーション)を起す。アアア。(千九百卅六年現在)

×

銀座邊にライカ等のスナップ熱がさかんなので、無暗に人を撮る事に對してポ

モレアは「女ショパン」を追うて、濃霧で危險との警告を物ともせず、飛行機で出發する。案の條、機は海中に墜落し、彼も行方不明となる。以前、ポールに射たれた時もモレアの死への願望を筆者は知つたのだが、これも彼の無意識意圖的自殺ではないだらうか。この邊のところは、この映畫の原作者ベン・ヘクト作の『死顔に浮ぶ微笑』(『スター』誌昭和九年二月廿日號所載)を併讀されると興味が深い。

この慘事は、彼自身と女との交渉の不調を語り、また彼のナルチスムスの失墜をも意味してゐると思ふ。女を飛行機で追ふといふ事に性的象徵もあらうし、母コンプレクスの强い彼が海中に落ちるなど、當然ながら面白い。作者は分析を意識してゐるのだらうか。

そして、ひたすら幼兒的になつた彼の心に「愛されず、悔まれず、死んだものには憩ひはない」と云ふ傳說が蘇つてくる。モレア自身の聲は波に漂ふ彼自身の屍に呼びかける。モレアはその自己の良心の聲に從つて、一ヶ月以內に彼自身のために涙してくれる女を求めねばならぬ。さもないと、彼自身の永久の憩ひは與へられないのだ。

暴風雨、物凄い波のうねりの內から、一握りの海草と共に彼は再生する。黑のレインコートを着た彼の姿は、紐育の街々を雨に打たれ、人たちを脅かしたりしながら、彼に涙するコーラを求めて漂泊ひ步く。このレインコートの黑は彼の罪の象徵であらう。やがて彼は、行きつけのクラブに登場する。「僕を批評するものは、みんな僕の友人だ」と嘗つての彼が云つた友人達がゐる。それに向つて「君等は、標本屋の窓に飾られた剝製の鳥のやうに、空ろな眼で人生を冷笑してゐる。こせ〳〵した事に許り心して、大きな世界のツ〳〵と抗議問題が出だした。なるほどスナップの對象には女性が多い。確かに窃視慾の變形に違ひないから尤もだ。けれど銀ブラなども亦露出症の變貌なのだからドッチもドッチさ。

あてつけ

大槻岐美

某夫人が何時か「あまりうちの人は女の兒を可愛がり過ぎるので、分析的に見ると子供の爲めに不安になる」と洩した事があつたので、私は夫人の言葉に賛成し、種々とその爲めに不幸を呼んだ實例を話した上、大いに分析的敎育の必要を語つたことがあつた。事實殊に末兒のケイ子ちやんに至つてはお父さん兒過ぎるらしいのだ。お父さんが出張で不在になると「ケイ子一人でねるの」と言つてお母さんを寄せつけない。出張からお父さんが歸ると大喜びで一緒にねると云つたふうださうで、今年六歲になる。「まるで小さい貞女ですね」と私達は笑つた。

存在を知らない。僕も昔はそんな仲間だつた」と云ふ。

約束の三十日目に、遂にモレアは「四十九番街の奇蹟」にあつて、コーラを見出す。そこにコーラは、一つにはモレアへのあてつけもあり、今は落伍者となつたポールを見護つてゐる。だが、アンビヴレンツとしての憎惡をモレアに感じてゐる彼女は、到底、彼のために涙すべくもない。しかも、ポールは再びモレアを射つて、自殺する。モレアは父なる神にポールの蘇生を祈る。然し「自分は貴方の救ひを求めない」と一寸すねても見る。その願ひは叶ひ、ポールは蘇生する。コーラは始めて彼のために涙する。「僕への涙ですか」と彼は喜ぶ。彼は目的を果した。恐らくコーラの死するまで、強く彼女の心にモレアは生きてゐることであらう。

東朝紙の映畫評はこ、の場面を「笑止の至りである」と云つてゐるが、これは寧ろモレアの願望充足を視覺化したものであらう。この幽靈（ドッペルゲンゲル）は、だから、モレア並びに彼等階級への批判者でもあり、幼兒的となつた彼が母へのひたすらなる感傷愛の具象化でもある。ピストル位で驚かされない譯だ。波に漂ふ彼自身の屍は、曾て自惚れと自信とを取違へた頃の彼の姿でもあらう。

墜落前の彼を徹底的な唯物主義者であるやうに見てゐる人たちは、後年の感傷的な、神に救ひを求める彼を見て、作者の大衆への妥協だとか、宗教への屈服だとか云つてゐるやうであるが、心理學の立場から見ると、前後の脈絡も立派にとれてゐて更に不思議はない。それに作者が後半を重要視してゐたことは、この映畫製作中の題名が「四十九番街の奇蹟」といふ題名であつたことからも察しられるし、映畫を見てもモレアの再生後の表現に、作者が

然し、上の男の子さん二人は、これ又少々お母さん子過ぎるらしい。男二人、女三人のお子さん方だが、このやうにハッキリと分れてゐる。そして、あまり御主人がお孃さん方を可愛がり過ぎると、夫人が苦言を持出すと御主人は「そらご覽お母さんがヤキモチ燒いてるよ」と云ふ調子で尙更頰ずりして見せびらかし、夫人に嫌な思ひをさせると云ふ始末だが、これは寧ろ御主人の投出であらうと思はれる。

× ×

此の間、私が用事があつてそのお家に行つたらば、御主人は流行性の感冒で床に就いてゐられた。さう大してひどくもなかつたらしい。私が夫人と挨拶してゐると次の間からいきなり大きな聲をして御主人が呼んだものである、「ケイ子！お父さんがだつこしてねて上げるから早くおいで。」私は「ハ、ア」と思つて苦笑を禁じ得なかつた。夫人はあれ以後、きつと私達の言葉を御主人に傳へて何かと言論鬪爭の具に供したものであらう。御主人はそれに抵抗を起したものであら

非常な努力をそゝいでゐることは一見してわかる。何故の努力であるかを理解してやらねばならない。作者のかほどの情熱に對しても。前述の論者は、彼が「ミス・ショパン」に相手にされなかつた時、母親に拗ねるやうに、鼻聲でモレアが愚痴つてゐたのを覺えてゐられるであらうか。

彼は云ふ「彼女は僕を退屈だと云つた。彼女だつて大した代物ではない。僕とどつこいどつこいだ。僕は口惜しいからあれと結婚してやるんだ」と。冷酷なやうに見えて、その實、底には感傷愛の湛えられてゐることを見逃してはならない。後半の「人の眞心に泣きたい」彼はすでに前半に見えすいてゐるのだ。

コーラと云ふ女性もよく書けてゐる。始めて彼女に會つたモレアは「豫期した通り、あなたは臆病で、家出娘のやうな眼をしてゐる」と云ふ。モレアはその時、愛想に彼女の詩の一節を暗誦して、その一箇所誤りを彼女に正される。コーラはモレアが彼女の詩を出版することを承諾するや、感激のあまり涙する。「あゝ！」涙とモレアはこよなく喜ぶ。彼女に許嫁のあるのを聞き「幻滅だ！」と言つたが、その言葉にそれらしい感情が伴はなかつたのも當然だ。飛行機慘事の折、モレアが四十であることを知つたのだが、コーラはモレアを父代償として惚込んだのだ。

コーラは元來、少女型の戀愛者で、彼女の許嫁が飛行將校であることを止めた時の、彼女の失望を見るとわかるが、彼女はもう「空の英雄」でなくなつは男は求めない。今や「否定の英雄」としてモレアが、女たちに圍まれて登場した。情熱猛烈なコーラに、モレアは「君は原始時代の人だ」と云ふ。「君は、自分の好きな男は必ず高潔な心を持たねばならぬと云ふ幻想を持つう。そしてその結果が、このやうな形をとつて（反動構成となつて）私の前に現はれたのであらう。

人間と云ふものは幾つになつても幼兒性が拔け切れないものだといさゝか怖れをなしたり笑止であつたりして、それ以來、そこの御主人が子供つぽく見えて仕方がない。然し、私自身にもかうした氣もちが無いことはないと思ふのだが、分析をやると、あまりその心理機制がハッキリするので、我ながらをかしくつて、勇敢にやれない丈けの話。

てゐる」とも云ふ。コーラは「貴方は色魔振つてゐるのです。色魔なんかぢやありません」と、いくらか彼の虚を突き、自分はドン・ファンであるからと警告するのを聞き「そんなことを云つたら、私が怖がるとでも思つてゐるんですか、怖がるものですか」と昂然たる意氣を示す。そして、進んで彼に性交をうながす。「貴方は私が怖いのですか。私は人生を知りたいのです。眞ツ逆さに飛び下りたいのです」と云ふ。

そのコーラが彼に棄てられるのだ。彼女の嘆願もふみにぢられて。アンビワレンツとしての憤怒の烈しさは蓋し當然だらう。

まだ書きたいこともあるが、これで擱筆しよう。この映畫の意圖は、我々自身の内に『生きてゐるモレア』を十分に我々は意識して、それへの統制法を考へるべきであることを警告してゐるのであると思ふ。勿論分析的見地からであらう。作者兼監督のヘクト・マクアアサーは讃へられてよい。モレアには、我國にも知名な戯曲作家にして舞臺俳優たるノエル・カワードが扮してゐる。

——終——

新刊紹介

▲『不盡想望』石川三四郎著——

内容目次、祖先の足跡を尋ねる、世界三大神話、支那の第一印象、極樂淨土建設等卅七項目、何れも著書獨自の詩人的の眼を以て描かれたもの、就中興深きは不盡の由來を語る序文なり。

▼『丹波の牧歌』深尾須磨子著——

著者は女流詩人、從つて隨筆も香氣高きもの「匂の足跡、花、巴里のメトロ、丹波の牧歌」に分たれ、みな特色をもつて讀ませる。何時も思ふのだが、女流の隨筆には無意識病根が色濃く出てゐて面白い。（二書共、書物展望社）

心理研究ノート

長谷川誠也

（一）心身の問題

歐米の學者等——宗教學者、哲學者、心理學者などが、昔から難問題として取扱ふものは、心身の關係はどうか、と言ふことである。いや、わが國の學界でも、これは非常に重大な問題であると考へられてゐる。しかし、それに手をつけだすと、まるで迷宮に入込んだやうに感ずるから、なるべくこれに觸れないやうに、所謂頬かぶり主義を採つてゐる人が多い。

およそ何事を考究するにしても、徹底的に進まうとすれば、いやでも應でも、心身問題にぶつからざるを得ない。だが、それを取上げると、自分の進むべき道筋が甚しく不明になつてしまふ。「心」または「身」いづれかの一元的解釋を採つて見ても工合がわるい。さらばといつて二元的解釋をたてると、瓢箪なまづのやうな學說が構造されて、その上に築かれた宗教も、哲學も、道德も、みな一種の事大主義を包んだやうなものに成つてしまふ。だから、昔から一派の學者は、心と身以外に、靈魂といふものを假定して、完全な說明を組立てようと考へたのだ。現代においては、アニミズムに新しい意義をもたせたマクドウガルが、一種の靈魂說を主張する好例であらう。しかし、靈魂を立てて來ると、問題は更に一そう複雜になるばかりか、そのやうにして作り上げられた學說を聞いてゐると、自分の足が地面に着いてゐるのか、どうかすらが怪しくなつてしまふ。そればかりではない、頭の一隅からは、科學の靈魂否定說が文句をならべ出すから、アニミズムであらうが、スピリチュアリズムであらうが、これをわが思想の主人公とするわけにはゆかな

い。

その科學の研究者の或者は、昔からの物質といふ觀念を拋棄し、一種特別な實在を說いてゐる。彼等は、相對性原理や、量子說に據り、昔から言ひ來つてゐる物質とか、精神とかいふもの以外に、宇宙萬物の本體を說明するのだ。エディントンはその好例であらう。そこで、正直に言ふが、私には物理學の知識が缺けてゐるから、かやうな科學說を、十分に理解し得ない。しかし、漠然ながら思ふ、それは神祕說に接近しつゝあるやうだ。おそらく、すべての問題を」どこまでもと研究して行くと、遂に神祕說の趣旨を取入れなければならないやうになるのではなからうか。もちろん、これを取入れるのに、早い、遲いの別はある。足弱の者は、僅かばかり步いただけで、早くも疲れて神祕主義といふ杖をたよりにするが、さやうな人々の說法は、あまり有りがたいものでもない。しかし、どこまでも、この杖に據らずに進行し、愈々のどんづまりにおいて、神祕的解說を下す人の說法は、謹んで聽かなければならぬほど意義も、價値も多いと思ふ。何故なれば、それには無意識の働きが加はつてゐ、その働きに意義の深いものがあるからだ。ウィリアム・ジェイムズは、宗教的經驗を研究した有名な著述中に、左の意味を述べてゐる。

（大意）宗教上の神祕主義は、神祕主義の一半である。他の一半には精神異常の研究書が供給する事柄以外の傳說といふものは積立てられてないけれども、それらの研究書を開いて見ると、宗教上の神祕主義に類似する現象が取扱はれてゐる。宗教上の神祕主義も、精神異常から發生するものも、共に大きな潛在的、あるひは緣外的の心領域に源をもつてゐるものだ。かやうな心領域を研究する科學は、旣に存立を認められてゐる。この領域には種々のものがある、最高の天使セラフィムと大蛇とが共棲してゐる。(The Varieties Of Religious Experienee. p. 426.)

このセラフィムと大蛇とが動いて、神祕的思想を發生させるから、われ〳〵は贋物でない神祕說だけには傾聽しなければならぬ。

話は神祕的方面に入りかけたが、このまゝ進んでは大變なことになるから、よい加減に切上げて、心身の話へ戾らう。

一體、洋の東西を問はず、人類は昔から生命の問題について惱み、その解決案として、心と身とを區別してゐる。古への人も、今の人も、一般に心身を別けて考へ、それに據つて生命の過程を解釋してゐる。支那では、大昔から「魂」と「魄」とを區別し、「附形之靈爲魄、附氣之靈爲魂也」と考へてゐる。かなり漠然たる區別である

が、肉體に在るものが「魄」で、「魂」は「たましひ」の意味であることは明らかだ。『淮南子』に在る魂と魄との問答中に、魂が魄に向つて「今汝已に形名あり、何ぞ道を能くする所あらんや」と言ひ、魂は「之を視るに形なく、之を聽くに聲なし、之を幽冥と謂ふ」、「吾が宗」は「無有を以て體となす」と說明してゐる所（說山訓）を見れば、二つの區別の意味を手輕に知ることができやう。さうして、この考方に基づくと、生命といふものには、靈魂と肉體附きの心と肉體との三要素があることになる。

言ふまでもなく、印度にも昔から靈魂說があつた。ところが、佛陀はこの見解を破棄してしまつた。實にえらい見識である。

キリスト教國の人々の腦には、使徒パウロの教理が、奧底まで染みこんでゐる。「ロマ書」第七章と第八章とにある教理は、靈魂と肉體附きの心とを區別したもので、「汝等もし肉に從ひて活きなば、死なん。もし靈によりて體の行爲を殺さば活くべし」と言ふのが訓戒の結論である。

エドワード・ダウデンはエリザベス時代の心理學を解說した中に、次ぎのやうな語を述べてゐる。

> 子供等に向つて、神の造つた人間には、どれほどの部分があるか、と問へば、大抵は肉體と靈魂との二つ、と答へるだらうが、或者は、肉體と靈魂と精神（スピリット）との三つだと答へるだらう。かやうに、三部分を別けることが、まさにエリザベス時代の考方である。ただし、あの時代の少年少女等は、「スピリット」といふ語を、今日とは異なつた意味に用ゐ、しかも複數の形とするだらう。さうして、三者の中、どれが不滅であるか、と問へば、靈魂である、肉體と精神とは物質であるから死滅すると答へるだらう。(Essays, Modern And Elizabethan. p. 309.)

これは、言ふまでもなく、パウロ說に基づくもので、複數に用ゐられるスピリットとは、肉體を活かすもの〻意味である。現今のイギリス人で、かやうな人性觀をまじめに信じてゐる者は、極めて少數であらうが、それが遺傳的思想として、無意識的に存在してゐることは疑ひないと思はれる。これはイギリス人ばかりのことではない。歐米諸國民の心の隅には、この人性觀が潛んでゐる。種々の問題、殊に宗教、哲學、道德、文藝方面などの諸問題について論究する西洋人の說述が、どうかすると、シラ（Scylla）とカリブディス（Charybdis）との間に行き惱むのは、この無意識的傳統思想を持つてゐるからだらう。

コールリヂは、靈と肉とを截然區別した最初の哲學者

はデカルトであると言つてゐる。(Biographia Literaria. Chap. VIII.) またアルフレド・ノース・ホワイトヘッドも、近世哲學史上、心と自然とを區別した最初の哲學者はデカルトであり、その二元論が、それから後の哲學界に害毒を流してゐる、と述べてゐる。(Nature And Life. pp. 24—25.) まさにその通りであらう。

プラグマティズムの代表者、ジョン・デュキーも、次ぎのやうに言つてゐる。教育、宗教、實業などの方面に、幾多の難問題の起こるのは、心身を別けて考へるからだ。知識階級が、實際生活から離れるのも、この故だ。知識と實際とが訣別するのも、この故だ。心身の差別觀は、思想に深く食ひこんでゐるために、心身を包括する言語がない。この兩者を一團として説明する場合にも、仕方なしに心身といふ語を用ゐるから、依然としてその差別觀がからみつくのである。(Philosophy And Civilization. p. 302.)

ホワイトヘッドも、デュキーも心身を總合した特殊の見解を基礎としなければ、人生の諸問題を適當に解釋することは不可能であると見てゐる。デュキーの言ふところによれば、心身を隔離する壁は、今日、未だ崩壊といふ状態にまではなつてゐないけれども、既に罅が入りはじめてゐる。どの方面から見ても、心身の區別は人爲的であることが氣付かれるやうになつたと。心でもなく、身でもなく、兩者を融合した一元的立脚地から、人生の諸問題を討究しようとする思想傾向が、近頃漸く強くなりつゝあることは事實であらう。

これについて憶ひ出すのは、道元禪師の語である。『正法眼藏辨道話』中に左の語がある。

「佛法にはもとより心身一如にして、性相不二なりと談ずる。西天東地おなじくしれるところ、あへてたがふべからず。いはんや常住を談ずる門には、萬法みな常住なり、身と心とをわくことなし。寂滅を談ずる門には、諸法みな寂滅なり、性と相とをわくことなし。しかあるをなんぞ身滅心常といはん、正理にそむかざらんや。しかのみならず、生死すなはち涅槃なりと覺了すべし、いまだ生死のほかに涅槃を談ずることなし。いはんや心は身をはなれて常住なりと領解するをもて、生死をはなれたる佛智に妄計すといふとも、この領解知覺の心は、すなはちなほ生滅して、全く常住ならず。これはかなきにあらずや。嘗觀すべし。身心一如のむねは、佛法のつねの談ずるところなり。しかるに、なんぞこの身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて生滅せざらん。もし一如なるときあり、一如ならぬときあらば、佛説おのづから虚妄にありぬべし。又生死はのぞくべき法ぞとおもへるは、佛法を厭ふつみとなる、つつしまざらんや。」

われ〳〵の思想史には、かういふ特殊な、立派な源泉が

あるのだ。もちろん、これは佛教の生命觀から見ての身心一如說であるから、現代人の頭では、これをそのまゝに鵜吞みにするわけにもゆくまいが、そこに、キリスト敎や、デカルト哲學的傳統思想以外に立つて、生命を解釋する途が指示されてゐる。

禪宗の「身心脫落」といふ語を、科學的に、あるひは文學的に考へて見るならば、おもしろい光景が開かれるのではなからうか。

（二）もてなしをする作家

昨年（一九三五年）英國で出版された『現代藝術』と題する書は、小說、詩、音樂、演劇、シネマ、建築等の現狀について、それ〴〵の專門家が論評したものを編纂したものである。その內に、現代小說を論評したアーサー・カルダー・マーシャルは、Fictioneer と Novelist との二語を使ひ別けてゐる。

藝術の目的は愉樂であるが、もてなしではない。讀者に對するもてなしを目的として假作する人はフィクショニアであつて、藝術的に創作する人はノーヴェリストであると。

わが國では、今日なほ通俗的あるひは大衆的小說と本格、純正、もしくは藝術的小說との區別を、種々の方面から論斷する人がある。それは、まことに結構のことだが、カルダー・マーシャルのやうに、簡單に片附けてしまふのもおもしろい。讀者をもてなすか否かと言ふことを標準として、小說家を二種に類別するのは、粗笨なやり方のやうであるが、どこかに大鉈を揮ふやうな强さがある。纎細な理論立ての流行する世の中には、かやうな大鉈を思ひ切つて用ゐる必要のある場合もあらう。

「フィクショニア」といふ語は、この論者が新たに造つたものであらう。辭典には、「フィクショニスト」（Fictionist）といふ語はあるが、「フィクショニア」といふのは無い。論者は、「フィクショニスト」を用ゐては、「ノーヴェリスト」と混同される恐れがあると考へて、別にこの語を造つたのであらう。好い語だと思ふ。さて、それならば、これをどう譯したものか。「戲作者」といふ古い語に基づいて、「戲作家」といふ語を造れば、最も好くあてはまるやうだが、それでは、大衆向きの讀み物を專門する現代の文學者が納まるまい。と言つて、まさか「假作家」などといふ語も作れまい。仕方がないから、このイギリス語を、そのまゝわが國語中に取入れてはどうか。

（三）變則的緊張生活の追求

前記のカルダー・マーシャルの論文中に、おもしろい記事がある。

世界大戰の時、人々は平和時におけるものとは、全く異なつた經驗を積んだ。彼等は、自身も他人も、曾て想像してゐたよりも野蠻でもあり、勇敢でもあり、卑怯でもあると知つた。さて、平和が恢復された後、多數はその生活を往時の狀態に引戻したけれども、或者はこれを爲し得なかつた。現今、裁判所へ引出される犯罪人中には、戰時において良いレコードを作つた者が多いさうだ。彼等は戰時に適し、平和時には滿足を得ない人々であると。つまり、戰時において活躍した彼等の進擊本能が、平和になつても鎭靜せず、遂に違法の行動となつて現れたのである。かういふ實例は、イギリスにばかり有るのではなからう。フランス、ドイツなどにも、同樣な例が、相當に多いのではなからうか。

なほ論者は、一スペイン青年の話を揭げてゐる。この男は常に父親を憎み、父が寢床に入るまでは家に歸らず、父が外出するまでは起きないといふのが例であつた。彼が論者に語つたところはかうだ。往來に何か騷動が始まつて人たかりがすると、自分は群衆が何にをするのかも辨へずに、これに加はる。警官が來ると、石を投げて逃げる。いや、逃げるよりも警官を待つ方が好ましい。自分は、警官に自分を追ひつめる機會を與へたい。それはばかばかしいことだが、それを爲さざるを得ないのだと。論者は附言する、この青年は無教育であるから、その行動を巧妙に説明し得ない、また、それを爲さうとも欲しない。しかし、自己の行動について、合理的説明を爲す人でも、その實際の動機は、この青年のものゝやうに簡單であることがあると。

動機は、緊張生活の追求である。行爲そのものゝ善惡如何は問題でないのだ。平和な、單調な生活がつゞくと、倦怠の感に堪へ切れなくなつて、變則的な緊張生活を求める者が飛び出して來るものだ。

無意識的に動いてゐる進擊本能と單調な平和生活の連續のために起きる倦怠感とを考慮中に置いて見ると、戰爭の絕えないわけも、平和主義者の宣傳の動機も、ストライキも、新聞の社會面を賑はす殺伐な事件の遠因も、冒險小說や、探偵小說などの流行する理由も、おのづから判明するやうに思ふ。

或る母子の場合

菊川茂樹

初め私は彼等が幾分でも救へたらと思つて分析を試みようとしたのであるが、極く最近に耳にした所では、もう手の付けられないまでに馬鹿げた心理狀態に陷つてゐる事が第三者にも容易に分る位になつたと言ふので、私には手に負へないと思つて斷念した。併し此んな退行の型や逃避の型もあると云ふことを知つて戴ければとも思つて報告しておく事にした。

それは或る母親と現在三十何歳かになつてゐるその息子との場合であるが、既に經驗に富める周圍の人々は「あんな息子は學問させても駄目だ。」と折紙を付けられてゐた彼であつた。その母親は非常に劣等感の强い、從つて虛榮心の高い婦人であつたから、そんな直接法な忠告はその心を驅り立たせる役にしか立たなかつた。母親一人の多大な努力の結果、彼は專門學校程度の學歷を身につけて兎に角就職はしたのであつた。しかし、それは餘り誇る程の事では無かつた。矢張り周圍の眼が正しかつた。彼は女手には負へぬ人間になつてゐた。

俗にも「親は子の爲に隱す」と言ふ文句があるが、此れは壓縮されカツトされてゐる。親は已の爲にも子供の惡を否定したがつてゐるのだ。彼の母親は自分の果せなかつた大願望を息子に期待した。しかし期待が破れたからと言つて誰を怨むまでもない。息子が酒亂と浪費に失職したからと言つて、息子を責める氣にもなれず、却つてさうした息子を生んだのは身の不德ゆへとその罪障感をそゝつたらしい。そこで激しい信仰への逃避が初まつたのである。その信仰する神佛の名を列擧するだけでも相當の行數を費さねばならぬ程であるが、その上極端な御幣かつぎにもなつて行つた。「今日は觀音樣の日だから朝食ぬきだ。」とか「今日三リンボだから汽車に乘つてはならぬ」とか、「便所が裏鬼門に當るから病人が出る」とか言つて安からぬ思ひに日を送つてゐるのである。此う言つた信仰は神經症の代償形成であり、或は神經症そのものであるのは明白な事だ。

罪障感の原因は、確かに本人はそれと口に出しはしないが、姑を追ひ出したと言ふ過去の事實にあるに違ひない。又彼女は陰氣なサディスムスを持つてゐるが、それが滿足しなかつたと言ふ點にも注意を向けていゝわけだ。彼女の殊に同性に對するサディスムスは周圍の人々からはいやがられ警戒され敬遠されてゐた。そしてやり場の無いサディスムスは已に返つて信仰となつたものであらう。その爲に或る意味では信仰によつて救はれてゐるとも言はれるが、息子の方はそれ程シムプルでないだけに却つて惡かつた。

酒癖が惡いと言ふのが彼の初めの主訴だつたし、「酒

は悪い」と彼自身も言つてゐるのに、金を手にすれば嚢中無一物になるまで姿を消すのだから始末に困つた。他人から金を借りても返す氣が無いらしい上に、公金にまで手を出して平然たるものである。從つて「金が仇」と言ふ人もあり、「金を見せるな。」と言ふ意見で、それも試みたり、「嫁を貰つてやれ」と言ふので貰つてやりもしたのだが、一週を出でずして解消され、いづれも役立たずに終つてしまつた。

彼は實に已惚が强かつた。それは彼の父親の性癖とよく似てゐる。彼の父はその母と自分の妻との折合がうまく行かなかつたので母と別れたのだが、それは追ひ出したと言つてい丶仕打であつたので罪障感からか家を出て、家庭に寄り付かない人になつてしまつた。そこで彼は父の役を買つて出て、父親を自分に取込み同一化して行つたのである。その上その獨尊的傾向は又實に幼兒的なものであつた。

父親が家に居ない爲に彼はエディポス的な我儘を通さうとした。それが彼の退行の本當の原因であつたに違ひない。現に彼は中學時代にストライキを起して學校長に盾ついたと言ふ事實や、年上の女にまつわつた事があつたりしたと言ふのは、彼のエディポス・コンプレックスの證となるであらう。

此等の事に關しては未だ言ふ可く多くの事があるが、一家族の全員に亘つて分析が行はれねばならぬので割愛して、彼が如何なる過程を經て現在に至つてゐるかを述べるに止める事にする。

彼は少年時代から殊に靑梅や梅干が好きだつた。此うした强い酸味への趣好は確かにマゾヒスティシュな味覺である。又彼には蛇恐怖症がある。一體此の爬蟲類に對する嫌惡恐怖は人間に共通なものらしいが、女子に於て殊に甚しい。此れに於ても同樣にマゾヒスティシュな興味が繫がつてゐるやうに思へる。

彼は非常に子供好きである。しかし女の子を持つた母親達からは、その特有の敏感さから彼に注意が拂はれてゐる。彼の童姦症的傾向が彼女等の眼には見えるらしい。彼は表面的にはマゾヒストであり、裏面的にはサディストであつた。酒に醉つて來ると顏色蒼褪め血走つた眼付きをして、サディスティシュな言動をなしたり、札ビラを切つて步くのが彼の癖である。此うした彼の浪費癖は成功せるエディポス愛から來る罪障感に根ざすばかりではなく、斯かるサディスムスからも來るものではなからうか。

彼には又變な嗜好がある。腐りかけた煮肴がそれである。臭があり、時に中から蛆が一匹ぐらひ出て來ても平

氣で食べる。それでも體に異常は來ない。此んな捨てる程のものを取り入れるのであるから確かに嗜糞症的である。

此れ等は明らかに退行過程が口唇的成分にまで赴いてゐるものである。

今では彼は鉢植などを弄び、母親が働いて食べさして居る。彼は大衆作家になるつもりで色々讀書をやつてゐるが、その空想の世界で彼はヒーローになつてゐるのであらう。それは乳房にすがる乳兒の如き存在となつてしまつたのである。

母親の方は姑とその夫を爭ひあひ、姑を追出して表面上は愛の勝利者であつたが、前述した通り夫が家庭を捨てて行つた爲め、彼女は全部のリビドーを息子に轉綿し、その爲に彼を去り難く思ふやうになつた。彼を離れさせない爲には彼を病氣にすればよい。彼にとつてもエディポス的願望の滿足を得られる事ゆへ、兩方にとつて都合のいゝ事だつた。

彼の退行は實に彼及びその母親の無意識的願望であつたのだ。斯くして母は信仰によりカムフラジュして超自我の監視から逃れ、彼は喜こんで神經症となり了せてゐるのである。

×

此れで分析は終つた譯ではない。却つて其の家族の他の各員、例へば彼の父親や妹達をも分析的觀察するのが當然である。此の意味に於て「一人出家すれば九族が救はれる。」と言ふ文句は精神分析的にも眞實であると言はる可きである。

——一九三五・一・二六——

夢の自己分析（第二信）

久下貞夫

「夢」（一）昭和十年十月二十五日

エチオピアの高原の砂漠である。大きな石ころを、ませた土人の子供が次々と運んでゐる。いつの間にか私はキャッチボールをしてゐる。相手はK君（商業學校時代の級長）である、私の投げるボールはどうしても充分とゞかない。二年上級の見知りの人々が見てゐる。場所が砂漠から運動場に變つてゐる。キャッチボールには上級生が應援してくれてゐる。私はこんな筈がないと思ひ乍ら投げてゐるが、K君までとゞかない。誰も居ない。私一人だボールはよくとゞく。遠くまで投げられる。私の

家の使用人等が見てゐる。

「聯想分析」(1) エチオピアは時局問題である。砂漠はかつて私が商用で印度へ旅行し、シンド砂漠を通過した時、驛々で土人の子供が錢をせびつたのを今も覺えてゐる、その聯想であるらしい。

(2)學校時代に二年上級のH君とほんの輕い同性愛の間であつた。H君はよく私を可愛がつてくれた。

(3)K君（級長）の聯想。五年生の時滿洲へ修學旅行をした時、大連で入浴した。私は生理的より心理的に早熟だつたが、その頃未だ×毛が充分にはえてゐなかつたので常々恥かしいと思つてゐた。K君が湯槽に入るとき、澤山はえてゐるのが後より見えた。

(4)、(5)からして夢の土人の子供は男性器であらうと察せられる。夢の土人の子供に色々あつたは、性器に種々あつたとの意味だらう。砂漠は風呂？

(5)ボールをうまく投げられられなかつたのが投げられるに變つてゐるのはどういふ意味か解らないが(3)の聯想から（投げられる樣になつた時——上級生も誰も居ない）現在は完全な男だといふ風に解せられないことも無い。願望充足と見て差支へなささうである。意味はたゞこれ丈でなささうだが、私にはこゝまで分析できた。〔編輯者曰、同性愛と自己性感段階に退行してゐる時のやうに思はれますが、なほよく分析して見て下さい。〕

×

「夢」（二）十月十日

家路に急いでゐる。家の前に父らしい人が居る。家の中から母らしい人、或ひは姉らしい人が覗いてゐる。どうしても父らしい人が邪魔になつて家に這入れない。

「分析」あきらかな母コンプレックスと思ふ。〔編輯者曰、同感です。〕

×

「夢」（三）十月十四日

教室である。教頭が教壇にゐて英語の試驗である。私は出來ない。常に成績の惡いM君（肺で二、三年以前死亡した）がすら〱書いてゐる。私は同君のをカンニングして書く。黑板を盗み見ると答案が書いてある。それを又盗み見ながら又書く。遲々として書けない。氣がせく。「分析」教頭で思ひ出すのはクロマラといふ綽名である。これは父であらう。すると教室は母ならんか？字を書くはある意味の象徴であらうから、此の夢も母コンプレックスと見て差支へなからう。たゞこの夢に前日の殘骸と見なす可きものが何もない。いくら考へても思ひ出せない。書くは手淫を聯想します。〔編輯者曰、偷視慾的願望とその禁制とが之になつてゐるやうに思はれ

ますが、如何？」

　夢は殆んど毎夜みます。その內覺えてゐるのは成る可く書きとめておきます。然し分析は並大抵でありません。私の夢には犬に追はれたり、大水に流されさうになつたり、どうしても答案が書けなかつたり、ボールをうまく投げ得なかつたり――はがゆい夢が可成りあります。どういふ意味でせうか。生理的に今の病氣にも關係があるでせうか。又去勢コンプレックスに關係があるのでせうか。とに角一種の恐怖症だと思つてをります。上記三つの例より見ましても私の母コンプレックスは可成り强いと思つてをります。私の母は繼母ですから以前は母コンプレックスを疑つてゐましたが、夢を分析して今やはつきりと解りました。繼母ですから救助願望の形がこれまでの私の行爲中にあつたのが、段々解つてきました。現在の私の病氣も或る意味に於てその方面からの心理的影響があつたと思つてをります。母コンプレクスの反面、父に對する尊敬と反抗があります。例へば當病院長に對する私の感情に父の轉位と見なす可き樣な、妙に反抗したくなつたり、つまらぬ事を云つたり、思つてゐることを完全に云へなかつたりします。然し此の頃は父の轉位であると解つてからさういふ事が少なくなりました。分析のお陰です。

「名映畫分析鑑賞と講演の會」に於ける講演（二）

東洋に於ける精神分析術及び合成術の建設

（佛教及儒學と精神分析）

諸岡存

澳國維那の、ジグムント・フロイド氏が、初めて精神分析を主張して以來、在來の心理學は殆ど一變して仕舞つた觀がある。

在來の心理學は、小學生徒の心理學であつた。其目的は小學生の教育に資する爲めの研究であつた。從つて、材料も勿論、主として小學生徒に限られてゐたのである。それで研究方面も從つて智的方面にのみ擴げられて、讀み方とか、算術の教授法等といふ事柄が其の主なる研究の對象であつた。今頃の學校教育は、何といつても記憶といふ事が其の根本問題になつてゐる。そこで聯想の法則等が最も大切な問題とされて、英國流の聯想學派等が出來、精神現象を、主に聯想の法則で説明せんとさへするに到つたのである。現に、フロイド一派とも見られてゐる瑞西チューリヒのユングなどいふ精神病學者でさへ、この連想の法則を本として、精神病學を研究し、現にユング一派を建てゝゐる位である。

反之、フロイドは元來ヒステリー及催眠術の研究から出立してゐる。それは、彼が巴里の神經病醫シャルコーの弟子として、當時の佛蘭西學派を輸入した譯である。併しこの方面は、其實豫期以外の結果を將來したのである。ヒステリーの研究から、やがては夢の研究に這入つた。そして精神研究は、先づ夢の研究から始めよといふ

に到つた。

最初、彼は主としてヒステリー患者に興味をもち、特に其戀愛症狀に注意した。そして其結果、彼獨特の戀愛論を主張した譯である。併しフロイドが、特に偉い處としては、彼が非常に廣く、人類學的、人種學的に材料を蒐集して、深く原始民族の精神現象、卽ち、お伽噺、傳說、迷信、又原始宗教等いふ題材迄にも深く立入つて硏究した處にある。換言すれば、彼が精神病的現象を以つて、これを廣く、一般的の進化論の見地の下に硏究した處に、彼の特色があると思ふ。卽ち夢の現象にせよ、ヒステリー症狀にせよ、其他の一般の病的心理現象にしても、之を進化論的に見て、彼の異常精神現象を、一種の先祖返り、或は、之を退化の現象として、觀た處に、その成功の祕訣を見出した譯である。

それから、も一つ吾等が、特に彼に負ふ處は、普通の學者が、兎角遠慮して立ち入る事を避けて居た領域に、大膽、卒直に、その硏究のメスを向けた處である。現在の所、フロイド派の硏究によつて、吾々が在來殆ど觸れる事を敢てしなかつた、感情とか動機とかいふやうな根本的心理現象の闡明に迄入つた處にある。約言すれば、今迄の半端で、皮層的な心理學も、彼によつて、始めて、完全な心理學に迄進められる機運に向つたのである。だから今後世の學者は、その方針に從つて、進んで行きさへすれば、或は我が心理學の完璧を見るに到る望みが出來た譯である。以上はフロイドが吾々に與へた功勞の略述である。

處が、フロイドの取扱つた材料は勿論、主として、ヨーロッパ文明から得たものである。

併し吾々東洋人の立場から觀たら、餘程觀方の異つたものがなくてはならぬ。何故かといふと、吾が東洋に於ては、旣に、精神分析的の硏究は、或意味に於いては、旣に、夙くからして、非常にすゝんだ處のものがあるからである。例へば、佛教等に於ては、夢に關する經論が大藏經の中にも相等載つてゐるし、又或意味に於て、佛教全體が精神分析の材料其物であると見る可き節がある。この點は現在の印度學者にも氣附いてゐるものが相等あるやうである。

例へば、印度の醫者で、英國に留學し、フロイドの學說を聽き、こんな說は、旣にとつくの昔、印度の古代經典に教へてあると主張したものさへある。例へば西紀一千九百十七年、倫敦出版で、ミトラ氏が紹介してゐる、『アングロ・サクソンの母』といふ匿名著者の『印度の精神鍛練』Hindu Mind Training 等は其の一例である。この書は、印度心理學を近世的に說明したもので、極めて

興味ある著書の一で、熟讀の價値が充分であると思ふ。何故なれば、此書は深く古代印度の經典に立ち入つて、西洋の心理學と比較してゐる。而してフロイド式の學說に特に觸れてゐる所が多いからである。又此書は、下意識の精神作用といふ事に就ても、印度心理學が夙に進步してゐる點等を述べてゐる。

印度人の坐禪觀法等いふ事は、近世流の催眠術と主接關係あるのみならず、一般下意識心理學の最も有效なる應用法である事を示してゐる。此方面に於いて印度では既に理論の域を超越して、深く、實用の方面に立入つてゐるのである。換言すれば、我々は今後、フロイドの學說を佛教心理、若しくは印度心理といふやうな方面から研究する必要がある。解り易く言へば、フロイド心理學から見たる佛教といつても差支へない。即ち佛教をフロイド流に研究することは現今の精神分析學徒に取つて、正しく一つの新しき課題であると思ふ。それは既に其の曙光を表してゐる。本誌上（昭和十年三・四月號）には既に若干の有益なる論文も時折り發表されて居る。自分も亦、嘗て、源氏物語に就て、此事を試みた事がある。源氏物語は、天台宗に負ふ處が多いと言はれて居るが、その佛教哲學からして、それが巧みに小說化せられてゐるものである。或部分の如きは、フロイド學說の例證其物であるやうにさへ見える。併し自分は、紫式部の方が寧ろ、フロイドより一段進んでゐる點があると考へてゐる。源氏物語は、天台哲學の奧秘に觸れて、人生の最も大切な問題を日常生活に迄應用する事に於いて成功してゐるものがあるからである。又彼の阿彌陀經の如きも精神分析の最も良き研究題材であると思ふ。

フロイドの學說は、自らの知る範圍では、哲學ではなく、科學である。だから人生觀、倫理的指導原理を與へてゐないのが當然である。反之佛教は哲學であるからその心理學說によつて悟道とか、安心とかいふ宗教を打立てゝゐる。

次に儒教の方面に於ても、亦、注意す可きものがある。例へば、孔子が口述したものを筆記したと言はれてゐる、『孝經』の如きも、或意味で、フロイドの親子愛慾（コンプレックス）の實際應用と見る可きものがある。

即ち親子の愛慾を、夫婦愛に、又それを更に社會愛に擴張するといふ事は、フロイドの所謂親子愛慾の淨化（ズブリミールング）に他ならないのである。この意味に於て、東洋の心理學は、心の鍛錬法、即ち精神修養法で、科學以上に出でて、實行方面に這入つてゐる。

そこで、我々は、此等方面を更に復習する必要がある。材料は到る處に夥しくあるのである。支那南宋朱子學派

者の著述に『事文類集』といふ類書があるが、その中にも夢の材料が相當澤山集めてゐる。そしてそれに對して相等の意見も述べてゐる。吾々が普通語つてゐる、傳說や、又詩人等が自分の經驗した處などを相當集めてある。例へば、『巫山の夢』とか、又『南柯の夢』などいふのは精神分析學者に取つて最も手近の研究題目であると思ふ。吾々は、最早や、何時までも歐洲學說許りに固着して居る時ではない。更に進んで我足元たる東洋に於ける精神分析術及合成術といふべきものをも建設す可き時機が到來したと思ふ。東洋學は哲學であるから分析よりも合成の方に重きをおいてゐるのである。吾々の精神修養といふのは、その實、精神合成術に他ならないのである。分析は合成せんが爲めの分析に他ならないのである。或意味に於て、その合成の方法の如きも既に驚く可きものが既存して居るのである。たゞ合成のためには分析まで必然である。約言すれば、吾々は今日のフロイド流の見方を以て、復更に、在來の佛敎及び儒敎を硏究する必要があると主張するのである。(完)

精神分析語彙（二二）

一、マナ Mana――王や首領から發して彼等に人々の近付くことを危險ならしめると原始人等が信じてゐた力。云はゞタブウの源泉と見做されてゐた力である。

一、マニイ Manie――メーニア (Mania) と同。「燥狂」の條參照。

一、無意識――「心を分つて意識と無意識とすることは精神分析學の根本的豫想であつて、この區別に依つて甫めて斯學は精神生活に屢々起る、且つ重大な過程を理解し得るやうになると共に、また科學としての仲間入りが出來るのである。換言すれば、精神分析學は心の本質を意識にありとすることは出來ない。寧ろ意識を心の一性質と見做し、その性質はまた他の性質に移つて來たり、或は移つて來たまゝになつてゐたりすると見做さゞるを得ないのである。」（フロイド「自我とエス」）卽ち、この無意識は心理生活の源泉として本能感情的なるものから成つてゐて、その要素は人類、民俗、氏族遺傳的なものや、個人の幼兒的性質やその後の經驗にして現實生活意識から排除せられたもの、などから成立つてゐると認められる。その意識に對する主要特質としては、彼れが現實原則に依つて支配せられてゐるのに對し、此れは快樂原則に支配せられてゐることである。從つてそこには、意識を支配してゐる時間空間の如き悟性や物と物とを區別する概念作用

は全く缺如してをり、反對に觀念と觀念とを凝縮錯綜させる作用が强いのである。

一、意識感受性 unbewusste Empfindungen――「感覺や感情は知覺區劃に達することに依つてのみ意識化ずる。もしその途中に於いてその進路が閉塞された場合には、感覺としては起らない。たとへそれに相當ずる他の要素は亢奮狀態に於いてそのまゝになつてゐても。かくて我々は簡略的な、且つあまり正確な云ひ方ではないが、無意識感受性なるものを認めるのである。これはやはり同樣正當な云ひ方ではないが、無意識觀念と云ふものを認めるのと類似のやり方である。」（フロイド「自我とエス」）

一、無上命令――カントの實踐哲學の中心をなす無上命令は、彼の道德及び良心說の本質をなすものであるが、フロイドはこれを原始人のタブウの名殘として說明し得べき一面を有ずると觀るものゝやうである。（フロイド「トーテムとタブウ」）

一、迷信――「私は外的（實在的）偶然を信ずるが、內的（心理的）偶然を信じないのである。迷信家は丁度その反對である。彼は自分の偶然行爲、行り損ひの動機に就いては何も知らない。彼は心的偶然性の存在を信ずる。それ故に彼は實際の出來事となつて現れた外的偶然に意味を賦與し、また彼以外の何等かの匿れたものゝ表はず意味を偶然の中に見る傾きがある。私と迷信者とは二つの點に於いて違つてゐる。第一に私は動機を內に見るのに、彼は動機を外に投出ずる。第二に私は出來事を思想に辿るのに、彼は出來事に依つて偶然を解釋する。併し、彼にとつての匿れたるものは私にとつての無意識と一致する。さうして偶然を偶然として放任せずに、これに解釋せずに居られない點は我々兩方に共通する。（フロイド「日常生活の精神病理」）

一、銘酊――「總ての苦痛は單に感覺たるに過ぎない。苦痛は我々がそれを感ずる限りに於いて存するのだ。さうして我々の組織の或る出來具合の結果として、それを感覺するのだ。さう云つた肉體的影響を及ぼず最も端的な、併し最も有效な方法は化學的方法、卽ち銘酊である。何人によらず銘酊を得る人が、右のやうに明白に自分の爲ずところを意識してやつてゐるとは私も信じないが、併し或る物質を我々の血液又は組織中に入れると直ちに愉快な感情が起り、併しまた我々の感覺生活の條件が非常に變化し、不快の刺戟を感じなくなるのである。兩方の效果は同時に起るばかりでなく、兩者は相互に密接に結付いてゐるやうに思はれる。併し我々の肉體の化學的構成中にも同じやうな働きをする力のある物質が存在してゐるに違ひない。何となれば、我々は少くとも、一つの病的な狀態、偏執の狀態があつて、その狀態に於いてはこの銘酊に似たやうな一つの條件が何等藥品をとることなしに生ずることを知つてゐるからである。それのみならず、我々の常態的精神生活に於いても樣々な變化が生じて、そのために快感享樂の難易が增減し、それと共に苦痛への感受も大小の度を異にするやうになる。從來の學者が、精神生活のこの銘酊的一面を看過してゐたのは誠に遺憾至極である。幸福を求

め不幸を拒けるために銘酊的材料が果した役割は非常に有難いものとして高く評價せられ、個人も民族も彼等のリビドー經濟に於いて確乎たる位置をそれに與へたのである。人々は直接的な快感獲得をそれに負うてゐるばかりでなく、また非常に熱望してゐる（外界からの）獨立と云ふことをもそれのお蔭で得てゐるのである。人々は「憂さを拂ふ玉箒」の力に依つて常に規定の壓迫から遁れ、感覺條件のよりよくなつてゐる自家獨自の世界の中に逃避することが出來るのである。併し銘酊材料の正にこの特質が、またその危險と害毒との條件になつてゐることは人々のよく知るところである。人間の運命の改良に資ずるを得べき多量のエネルギーを浪費せしめることの責めは、或る場合に於いて銘酊材料の免れ得ざるところである。」（フロイド「文明と不滿」）約言すれば、借金支拂のための金を馬鹿々々しいとてそれで酒を飲んで了ふやうなものである。飲んだ時は愉快になつて借金の事など主觀的に喪失して了ふが、さめて見るとやはり借金請求書は彼の目前に嚴存してゐて彼を二重に苦める、それと同じである。

——未完——

『精神分析讀本』正誤表

頁	行	誤	正
一六六	九	iove	love
一六七	九	iirst	first
一六九	五	Appiying	Applying
二〇六	六	vi o	vigo
二二七	三	總師	總帥
二三五	一一	示してある	示してゐる
二三七	二	上旬に	上旬に流行した
二五二	二	相互並存性	相反並存性
二九六	一二	素直り	素通り
二九七	五	なしてゐる	なつてゐる
三〇二下	一四	I tseems	It seems
〃	一五	一人種	一人稱

內外彙報

『イマゴー』昨年度第三冊

一、「時に關する精神病理」パウル・シルダー（ニウ・ヨーク）——無意識には時の觀念がないので、自我と理性との統制力が一度喪失せられるや、忽ち時に關する觀念が如何に病的となるかを實例に就いて詳論す。

一、「ナルチスムスの新解釋」ルウドキヒ・パンドル——ナルチスムスのギリシヤ傳說に關する可能なる種々の解釋を紹介し、多くの實例に就いて研究せる大論文。

一、「パトスの心理學」A・キンテルシタイン、E・ベルグラー共著（キイン）——パトスとは熱烈な情操の動きを高らかに表現したるものである。それは幼兒時代には見られず、思春期と共に人心に起る。その心理を研究せるもの。

一、「舊式傳記の心理學」エルンスト・クリス（キンイ）——分析以前の傳記は多くは傳記者が幼兒的定着によりて被傳記者を偉大として同一化せるもの。その心理機制を研究す。

一、「フロイドの本能感と部分性感帶域」ヨハンネス・ラントマルク（オスロー）——前號所載自家論文への追補。

一、「禁斷は誘惑する」ルドキヒ・アイデルベルク（キイン）——禁斷はリビドー經濟上の蓄積をなすので、快感が增大し、從つて發散への誘惑となるものフロイドの論旨を敷衍す。

一、「南部スラヴ族の民間傳承に於けるエディポス傳說」フリードリヒ・クラウス（キイン）

一、「原始人に於ける早期幼兒時代の經驗と成人の文化」R・A・スピッツ（パリ）

一、その他新刊批評數件。

『分析教育雜誌』昨年度第三冊

本號は「不良兒及び浮浪兒に就いて」の特輯である。スキツルの精神分析學會の研究會の發表がその內容である。

一、「ナルチスス型性格兒童に就いての報告及び考察」ハンス・ツリガー（イツテイゲン）

一、「本能的ナルチストの心理」ハインリヒ・メング（バーゼル）

一、その他、グスタフ・バリー、アルツール・キールホルツ、オスカ・プフィスター三氏のこの問題について短い討議がある。

一、「罪障感からの犯罪者」ジクムンド・フロイド。

一、「精神分析的認識の光りに照して見たる或る不良兒の話」カール・アーブラハム。……その他。

一、一九〇六年以降の精神分析的犯罪心理關係文獻表。

最近國內事實

▼一月二十日の都新聞日曜夕刊附錄に『自殺流行時代』の特輯欄あり、內に北垣隆一氏稿『噴火口は女性を象徵してゐる』と、長崎文治氏稿『自殺の詩化心理』とを拔粹引用す。共に本誌昨年五・六月號所載のもの。
▼『自殺の模倣性』古澤平作氏、一月中五回に亘り讀賣新聞婦人欄に連載。
▼『自殺防止の心理療法』矢部八重吉氏、昭和十年九月十六日の時事新聞。
▼『許して悔悟させなければ德性は養へぬ』矢部八重吉氏、十月廿三日讀賣新聞。
▼若妻殺しの心理に就き林髞、大槻憲二、甲賀三郎の三氏その所見を語り、都新聞一月二十日社會面に、文責在記者にて發表。
▼『堤中納言物語の花櫻折る少將の心理分析』岡一男氏稿、早稻田大學淡交會發行『淡交』十二月號。
▼『人を知る法』高山晴州氏著、小石川區教材社發行。
▼『戀愛に於ける好きな型に就いて』大槻憲二氏稿、『人生創造』一月號。
▼『兒童心理の發達』同氏稿、刀江書院發行『兒童』一月號。
▼『子供をめぐる親と教師の問題』霜田靜志氏稿、同誌同號。
▼『橋畔女怪考』大槻憲二氏稿、『書物展望』一月號。
▼『精神分析讀本』大槻憲二氏著。岡倉書房から一月廿日上梓。（廣告欄參照。）
▼『精神分析學から見たわが子殺し』同氏稿。『力之日本』一月號。
▼『精神分析と姓名判斷』同氏稿。『英語青年』二月一日號。
▼『立身の道』同氏稿。『人生創造』一月號。
▼『靑春期戀愛の種々相』同氏稿。『生きて行く道』二月號。
▼『相性に就いて』同氏稿。『婦人公論』三月號。
▼『人魚の精神分析考』同氏稿。學而書院『月刊邦畫』二月號。
▼英語通信社發行『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌三月號には平田禿木氏が A・R・Reade 氏の論者『近代文藝の主潮』を譯註紹介してゐるが、內にヂェームズ・ヂョイスに與へたる精神分析學の影響を確言してゐる。
▼本誌前號內容に關しては本號卷頭の廣告を參照ありたし。

本研究所講習會例會

一月例會は五日夜、研究所に於いて催された。
當夜は新年懇親會を兼ね、夕方から集つて酒肴と食事を共にして歡を盡し、そのためにフロイド著書の精讀はフイになつてしまつた。お酒にはみな強い方ではなく、高橋鐵氏が最も酒豪であると云ふことになつた。
出席者は高橋氏の外に、長崎文治、小林一、北垣隆一、同照雄、土屋喜一、倉橋久雄、大槻憲二、同岐美の諸氏であつた。

食後種々の分析談が交はされた。主要な題目は初子殺し、カフエーの寺院趣味などであつた。最後に高橋氏質問者となつて各自に好きな花、色、人物などに就いての聯想聽取があつた。他日、何かの研究の內に現れるのであらう。

×

二月の例會は三日夜、研究所に催された。『精神分析運動史』中第二章末のチウリヒ派との交渉やそれへの批評を試みてゐる個所を丁寧に讀み且つ研究した。あとで、本號のために集まつてゐる諸君の原稿を朗讀して批判したり、また種々分析上の經驗を各自に語り合つた。今日はどうしたわけか都合あしく出席者は少なかつた。小林一、北垣隆一、大槻憲二、同岐美氏等であつた。

本研究所研究會例會

一月例會は廿日夜、アメリカン・ベーカリで催された。食前、司會者から本誌前號所載『語彙』に就いての解説があり、多少の質問があつた。食後、新來者（横濱小學校訓導竹林松代孃、立川氏紹介）の紹介があり、續いて今夕の主題たる妖婦母性問題に關聯して長崎文治氏『初子殺しに就いて』研究發表があつた。その問題に就いて民俗的事實の方面にその證明となるものがないかとの質問が長崎氏から發せられたので、久しぶりに出席せられた中山太郎氏、次に立つて例の豐富な知識を披瀝せられた。

その話が子供殺しから「座敷わらし」の事に觸れて行つたので、次に宮田齊氏嘗て聞及ばれたと云ふ「座敷わらし」の戰慄すべき事實を報告せられた。

次に高橋氏立つて「妖婦の本質とその實例に就いての考察」を試みられたのが、妖婦、毒婦、淫婦などに就いての區別を明白にする必要はないかとの質問もなつたが、その區別は心理學上からは必ずしも重大でなからうとの意見が諸氏から洩らされた。長崎、高橋兩氏の研究談は今夕の討議の結果を參照し、推敲洗練せられて、本誌本號の卷頭を飾つてゐる。

出席者は右言及諸氏の外に、塚崎茂明、平塚義角、大槻岐美、岩倉具榮、小杉長平、霜田靜志、竹田浩一郎、土屋喜一、小林一、內藤梅子、北垣照雄の諸氏であつた。缺席挨拶者は倉橋、富田、立川、大久保、田內、長田の諸氏であつた。

×

二月例會は十七日夜、同會場に於いて催された。食前、論文文章の書き方に就いて司會者から注意又は要求とも云ふべき條々が提議せられた。文章用語は金錢と同じで、不必要なるところには極度に節約し、必要なるところへは惜氣なく傾注するやうにとの說は當夜出席せられなかつた若い執筆者諸氏へも特にお傳へしておきたい。

食後、司會者立つて當夜の初出席者、南葵教育會勤務山本敏

一氏、奥田裁縫女學校長奥田艷子女史竹田浩一郎氏夫人、米子女史、竹田氏友人久保田久美子夫人等を紹介せられた。みな竹田氏の紹介に依るものである。

次に大槻氏立つて、當夜の研究主題たる夢の分析法に就いて、初出席者を考慮しての入門的講話を試みられ、次いで奥田校長立つて、女史が今日の立身はみな夢の暗示に負ふものであることを縷々として說かれたが、それは正しくは夢と云ふよりは女史の行動の無意識動機を直觀的な形で披瀝せられたものであつた。

それに對して長崎文治氏、田内長太郎氏、高橋鐵氏、土屋喜一氏、竹林松代氏、大槻憲二氏、山本敏一氏、竹田浩一郎氏等立つて種々なる見地から學術研究會らしい無遠慮さで批評やら解說やらを試みられた。

竹林氏のは「禪と知識以前の心理と夢」とに關する話であり、山本氏のは「教育と直觀と無意識」とに關するものであり、竹田氏のはピアジェの所謂「自己中心性と社會性」とに關するものであつた。かゝる熱烈な論議への契機を與へられた奥田女史の好意を感謝するものである。

當夜は非常に活氣ある會合であつて、出席者の殆ど全部が何等かの發言をせられた。右言及以外の方々には、大久保眞太郎氏、内藤梅子氏、塚崎茂明氏、倉橋久雄氏、平塚義角氏等があつた。田内長太郎氏は久しぶりの出席であつた。缺席挨拶者は立川、岩倉、長田、長谷川、富田、小山の諸氏であつた。

新刊紹介

▼『倦鳥森集』 竹越與三郎著——

經濟史家の隨筆で、明治史上の諸人物と著者自身との交渉などが客觀的な公平な筆で書いてある。コクのある讀物である。殊に明治大帝の條、川村瑞軒の條など出色であらう。（岡倉書房、二圓二十錢）

▼『新撰豆腐百珍』 林春隆著——

凡そ豆腐に關する一切の知識が得られる。料理の方法にも凡百種が紹介せられてゐる。これだけ纒めるには一通りの苦辛でなからう。（岡倉書房、一圓五十錢）

―― 附　　　錄 ――

兒童の道德的判斷

ピアジェ原著・竹田浩一郎譯

The Moral Judgment of the Child,

by J. Piaget, trans. by K. Takeda

編輯者序文

ジャン・ピアジェはフランス現存の心理學者で、その思想の要領に就いては、本誌前號に譯者竹田氏が說述せられたから、私はこゝに贅するに及ばないであらう。

私見にして誤ちがないならば、ピアジェは精神分析學の感化を深く受けてゐる心理學者であるやうに思へる。彼は分析學の個人に就いての研究を社會に就いて、殊に兒童の社會生活に就いて研究し直さうとしたものであるやうに見える。由來、社會學的な考へ方はフランス學派の傳統的特質であるからだ。その「自己中心性」と云ふやうな用語は、精神分析學の用語ナルチスムスの置換への如くにも思へる。何れにもせよ、分析學はピアジェの研究の結果に特別

の期待と興味とを寄せざるを得ない。

竹田氏が本誌前號に紹介せられたやうに、ピアジェには本書の他になほ四つの大著がある。『兒童の言語及び思想』、『兒童に於ける判斷と推理』、『兒童の世界觀』、『兒童の因果觀』などであるが、これ等諸書に於ける集大成とも云ふべきが、この『道徳的判斷』であるらしい。彼は兒童の道徳觀を全く科學的に研究してゐるのは、當然のことながら、多としなければならない。何となれば、道徳などゝ云ふものは從來、人類がその無意識的願望に卽して最も投出的に虚僞的に考量してゐたものゝ隨一であるからだ。彼が本書の序文中に於いて、「殊に、道徳問題に關する最大の危險は、大人が自分たちに都合のいゝやうなことを子供たちに云はせようとすることだ」と云つてゐるのは、實にわが意を得た。從來の道學は實に成人の利己的見地からして兒童自發の道徳心を押し歪めてゐたのだ。それに依つて如何に多くの少年が不良化したか分らない程であらう。

竹田氏は默々としてこの數年本書の飜譯に沒頭し、この大著の全譯を旣に完成してゐる。これを全部本誌上に發表することは恐らく不可能であらうが、せめてその一部分でも誌上に連續紹介してその全彪を察するのよすがとしたい。

第一章　遊戲の規則

兒童の遊戲はなか〳〵感心に社會的統制の行亙つてゐるものである。例へば、男兒の遊ぶ「マルブル」遊戲をとつて見ると、そこには極度に錯綜した一聯の規則が――法律とか法律それ自身に就いての知識とか云ふ如きものが――支配してゐる。心理學者はその職掌柄、どうしてもかう云ふ共通的法則を親しく知悉し、且つその法則の下に匿れてゐる道德を了解するやうになるものであるから、たゞこれ等の規則の細部を知り盡すことが如何に困難であるかを知つてゐる心理學者のみが、これ等規則の異常な價値を評量し得るのである。

吾人が兒童の道德について何ものかを理解しようと思ふならば、我々はまづこれ等諸事實の分析から始めなければならないと云ふことは明かである。すべての道德は一聯の規則から成立つてをり、すべての道德の本質は當人がその規則に對してどれだけの尊敬を拂つてゐるかと云ふ點に求めらるべきである。カントの反省的分析、デュルケムの社會學、またはボヴェの個人主義的心理學は、みなこの點に於て一致してゐるが、これ等諸々の學說も兒童の心が如何にしてこれ等の規則を尊敬するやうになるかを說明せんとする瞬間から、各々剩離して來る。我々としてはこの「如何にして」の分析に取掛るのは、兒童心理の分野に於てゞあらう。

ところが、兒童が尊敬すべきことを知る道德的規則なるものは、大抵は成人から與へられるのである。つまり、兒童はそれ等の規則が十分に出來上つたまゝのものを、さうして屢々出來上つたまゝのものを、與へられるのである。彼等に直接關係もなく必要もなく、從前の成人の各時代から順々に、持續的に、傳承されてゐるので

ある。

然るに、最も單純な社會的遊戲の場合に於ては、彼等は彼等自身だけで規則を作り上げてゐるのに我々は出會ふのである。これ等の遊戲がその內容に於て、我々から見て道德であらうとなからうと、そんなことは問題ではない。心理學者として我々は、成人的良心の觀點に立たないで、兒童道德の觀點に立たなければならない。ところで、マルブル遊びは、所謂道德的實在と同じやうに、一つの時代から他の時代へと持越されて來たものであつて、個々人がそれに對して感ずる敬意に依つてのみ維持せられて來たのである。たゞ一つの相違は、この場合の關係が兒童間に存する關係であると云ふことである。遊戲をし始めると、小さな子供等は大きな子供等に訓練され、さうして如何なる場合にも、彼等が、いみぢくも人類威嚴の特徵たる德性——一つの遊戲の慣例を正確に遵守することの德性——に中心から精進するやうになる。規則を變更することは大きな子供たちの權限內にある。もしこれが道德でないならば、一體何處に道德は始まるか？ 少くともそれは規則に對する尊敬である。さうしてこの種の事實の研究から始めると云ふことが、我々のと同樣、一つの探究に關してゐることである。勿論、マルブル遊戲に關する現象は、兒童等の最も最初の現象ではない。兒童はその仲間同志で遊ぶ前に、その兩親の感化を受けてゐる。彼等はその搖籃時代から澤山の規則を課せられてゐる。まだ口も利けない內から、或る種の束縛を意識してゐる。かう云ふ搖籃時代の規定や束縛さへもが、軈て我々の論じ示す如く、遊戲の規則の進步して行く上に、否定すべからざる感化を及ぼすのである。併し遊戲規則の場合に於ては、成人の干涉は最小限度に減少せしめられてゐる。我々はそれ故に、この場合に於ては、最も初步的な事實とは云はないが、やはり最も自發的な、最も重大な（そこから我々の學ぶところ最も多き）事實に直面してゐるのである。

遊戲の規則に關しては、特に研究し易い二つの現象がある。——第一は、規則の實踐である。卽ち、異つた年

齢の子供たちが一定の規則を有效に適用してゆく遣り方である。第二は、規則の意識である。卽ち、子供たちがそれ〴〵の年齢に應じてこの遊戯規則の性質を或は强制的であるとか、或は神聖であるとか、或は自分等で自由に定めたものであるとか、或は他律的であるとか自律的であるとか云ふ風に考へる、その考へ方である。

本章の眞の目的は、これ等二つの問題を比較研究することである。何となれば、規則の實踐と意識との事に關する關係は、我々が道德的性質を定義するに最も好都合なものだからである。

もう一言附け加へる。遊戯の規則の實踐あるひは意識の分析へと進む前に、豫めこの規則の內容について幾分指摘して置かねばならぬ。卽ちこの問題の社會的與件を確立して置かねばならぬ。しかし我々は是非必要なものだけに限らう。我々はマルブル遊びの社會學を組立てやうと企てたのではない。かうなると、我々はかゝる遊戯が世界各國に於て過去は如何に遊ばれてゐたか、また現在は如何に遊ばれてゐるかを硏究しなければならぬことになるだらう。（事實それは我々の子供と同樣、黑人の子供の間にも存在してゐる。）たとへスヰス・ロマンド（スヰスの佛語使用地方——譯者）に限つたところで、遊戯の地方的全差異を發見するために、就中、最近數時代に於けるその歷史の變化を略敍するためには數年間の硏究を要するであらう。恐らく社會學者にとつては有益なその硏究も心理學者にとつては無益である。すべての心理學者にとつては規則の如何なるものなるかを硏究し得るためには、實際に行はれてゐる慣例を完全に知れば充分である。丁度、兒童の言語を硏究するためには、あるがまゝの方言を、それが如何に地方別になつてをつても、そのまゝに知れば十分であつて、時間と空間とに於ける言語の發達的あるひは發音的變化の總てを再構成する必要がないと同じやうに。それ故我々は我々の調査した地方に於けるジュネーヴ或はヌーシャテルの街で行はれてゐる遊戯の內容を數言で分析するに止めよう。

一、マルブル遊びの規則——遊戯の規則の實踐と意識とを同時に分析しやうと思ふならば、三個の本質的事實

に注目しなければならぬ。

第一は一定時代の、及び一定區域の（それが如何に小さな區域であらうとも）、兒童仲間に於て、マルブル遊びの様式は一つではなくて澤山あると云ふことである。まづ「方形遊び」と云ふのがある。これを我々は特に問題として見たいと思ふ。これは地面に方形を描き、その中に數個のマルブルを置き、遠くからそれをうち當てゝ圍ひから追出す遊びである。また「クーラト Courate」と云ふのがある。これは二人の遊戯者が不定回數相互に他者のマルブルを狙ふ遊びである。「穴遊び」、これは穴の中にマルブルを積み重ねて、大きな重い一つのマルブルを投げてそれを穴から追ひ出す遊び、その他いろ〳〵ある。總ての兒童はそれ〴〵數種の遊び方を知つてゐるが、さう云ふ事情のためにそれ〴〵の年齢に應じて規則の神聖さに對する信仰が强くなつたり弱くなつたりする。

第二に、同一の遊びでも、例へば方形遊びの如きをとつて見ても、時と場所によつて極めて重大な變化を加へることが許される。實際、我々が調べて見たところによると、方形遊びの規則はヌーシャテルのは二・三キロメートル宛を離れた四つの區に於てさへも同一ではない。ジュネーヴとヌーシャテルとでも違つてゐる。一つの町の中のそれ〴〵の街でも幾分が異つてをり、學校と學校とでも違つてゐる。その上、協力者のお蔭で我々は確證する事が出來たのだが、一時代と他の時代とでも異つてゐる。二十歳になる或學生が云ふところに依ると、彼の村では、「自分が子供の時」にはやつてゐた遊びを今では行つてゐないさうであつた。時間又は場所によるこれ等の變化は、兒童が屢々それ等變化の存在を知つてゐるから、重要である。或る町から他へ、或は或る校舎からでも他へ移り變つた兒童は、此處で守られるこれ〳〵の規則は彼處では守られないと私たちに説明するのが屢々だ。又兒童は彼の父は彼とは違つた遊び方をしたと我々に語ることも屢々だ。それからも一つ、或る十四歳になる子供は自分が小さな子供よりも偉いんだと感じ始めて遊びをやめて了ひ、彼の時代の風習が新時代によつてつ

ゝましやかしに守られずに漸次失はれてゆくことを、その子の氣質として、歎き且つ笑つてゐた。

さう云ふわけで遂に、さうしてそれは明かに地方的の流れと歴史的の流れとの合流した結果であるが、同一の學校の運動場に於て競技される同一の遊戯（例へば、方形遊びの如き）が、ある點に於て異つた種々の規則を容認するやうなことにもなる。十一歳乃至十三歳の兒童はこれ等の變化をよく承知して居て、一般に遊戯の前或はその間に、これ〳〵の規則を選んで他の規則を除外しようと約束する。それ故にこれ等の事實をよく呑込んでゐなくてはならない。何故ならば、兒童が規則の價値をどう判斷するか、それを確かに條件づけるものはこれらの事實だからである。

さて、以上の如くこれ等の諸點を述べておいたから、次に我々は原型（模範）として役立つ方形遊びの規則を簡單に説明しよう。で、我々はまづ兒童の用語をはつきりさせておかう。さうしておくと、我々が後に引用する所の會話の報告が理解しやすくなるからである。それのみならず、この用語の或る樣相は兒童心理學に於て屢々さうであるが、それ自身として非常に我々の參考になるものだからである。

マルブルはヌーシャテルでは「マルブル」(Marbre）と呼ばれ、ジュネーヴでは「コェイユ」(Coeillu）又は「マピス」(Mapis）と呼ばれてゐる。マルブルにも價値の相違があるが、セメントのマルブルが最も重寶がられる。「カーロン」(Carron）は非常に小さく碎け易い土で出來てゐて、値段が安いので價値が低い。投げるために用ひられて方形內に置かれないマルブルは、その丈夫さに應じて、「コルナ」(紅瑪瑙で出來てゐるもの）「アゴー」又は「アガート」(瑪瑙)、「カシーヌ」(色の着いた條のある硝子)「プロム」(鉛の入つた大きな重い球）等と呼ばれてゐる。各兒童は數個のマルブル又は數個のカーロンを割當てられる。マルブルを投げることを「ティレー」(tirer)といひ、一つのマルブルが他のマルブルに當つた時、それが方形の內であると外であるとを問はずこれを「タネ」

(tanner）といつてゐる。

玉の種類はそれだけとして、次に一連の儀式的神聖化の言葉を紹介しておかう。卽ち、遊戯する者がこれ〳〵の動作を行ふと宣言する時に用ひ、かくして既成の事實を儀式的に聖化する言葉である。一度これ等の言葉が發せられると、事實に於て、相手はその言葉を發した仲間の決定に對して何んにも口出す事が出來ないが、もしも彼が儀式的禁止（それを我々はやがて調べることにするが）の言葉によつて先鞭をつけるならば、彼はそれによつて彼が恐れる所の動作を封ずることになるのである。例へば、さう云ふ禁止の言葉を出すことの出來る場合には、ヌーシャテルの兒童ならば、まづ始めに「プレムス」(prems）と呼ぶ。これは明かに「プルミエ premier」（一番）の轉訛である。而してもしも彼が、遊戯者一同が最初に出發した所（その線を「コシュ」(Coche）と云ふ）に戾らうと思ふならば、彼はたゞ「コシュ」といふ。もしも彼が二倍の距離だけを進みたいとか退きたいとか思ふ時、彼は「二コシュ」と呼び、又一・二又は三マン（main）の距離だけ前進あるひは後退しようと思ふ時には、彼は「一・二又は三アムパン（empans)」と呼ぶ。もしも彼が或る瞬間に於いてその方形との關係距離に等しい距離だけ他の方向に（相手から出來るだけ打擊を避けるため）身を置かうと思ふ時、彼は「僕のもの」(du mien）と呼び、そして相手が同じやうにするのを妨げやうと思ふ場合に彼は相手に「君のもの」(du tien）と呼ぶ。

これ等の言葉が或る事情（その事情は勿論、一つの全的な法律的制度によつて細心に規定されてゐる）に於いて發せられるや否や、相手は服從しなければならぬ。しかし、もし相手がこの動作に先んじて制しようとするならば、彼はたゞ儀式的禁止の語を發すればそれで十分である。その言葉はヌーシャテルでは、以上の言葉に方言的接頭語「ファン」(fan＝défandu）を附すれば足りる。例へば、“fan-du-tien”, “fan-du-mien”, fan-Coche”, “fan-coup-passé” と云つた具合である。

我々がこのやうに用語の詮議を細かくしたのは、遊戯の規則が法律的に錯綜してゐることをまづ示すために外ならない。これ等の事實は、他の觀點からもつと深く分析することが出來るのは明かである。例へば、神聖化及び禁止の全兒童心理學、就中、社會的遊戯の全兒童心理學を作り出すことも出來るであらう。しかし、これらの問題は我々の題目以外に亙るので、我々に關する本質的なもの、即ち規則それ自身に立歸らう。

で、方形遊びと云ふのは、方形内に數個のマルブルを置き、それを他のマルブルよりも大きい特別なマルブルで跳ね退けて分捕ることであるのだが、かう云ふと極めて單純であるけれどもその細目は無限に錯綜してゐる。次に順序を立てゝ、その複雜さを覗いてみよう。

まづ最初に「ポーズ」または置き玉がある。遊戯者の一人が方形を描き、次にめい〳〵で「ポーズ」を置く。もし遊戯者が二人ならば、各人は二・三・又は四個のマルブルを置く。三人ならば各自に二個を置く。四人またはそれ以上ならば通常一個しか置かない。肝心なことは平等といふことである。たゞ、平等にする爲には、置かれたマルブルの關係價値を計算しなければならぬ。一個の普通のマルブルに對しては、八個のカロンを置かねばならぬ。一個の小さなコルナは八マルブル、十六カロンの値打がある、等。價値は細かく規定され、主として最寄の店で買ふ値段に相應してゐる。しかし、正當な意味での經濟的取扱ひの外に、兒童の間には相場値段をかなり變化させる種類の交換がある。

次に遊戯が始まる。ある距離を定めて出發線「コシュ」を引く、そこからマルブルを投げるのだ。その線は方形の一側面に平行して、普通それから二・三メートル離れて引かれる。そこから各遊戯者は第一投を投げる。(方形の中へアガト又はコルナリンを投げる。)

それ故、全遊戯者はコシュから投げ始める。或遊戯では、番が新たに來る度にコシュに戻るが、しかし普通の

遊びでは各人は第一投擲後マルブルがころがつて行つた所から投げる。ところが、時としてはこの規則を制限してマルブルがコシュの距離以上に方形から離れないやうにする。例へば、マルブルが方形から二メートル轉がつた場合には、それが如何なる方向にせよ、もしもコシュが一メートル半だつたならば、一メートル半の所に戻すのである。

しかし勝負に入る前にまづ誰が始めるかを決定せねばならぬ。一番始めの遊戲者はマルブルが一杯ある方形の中に投げ込む特權を持つてゐるに反して、後の者は、前遊戲者の彈き出した後の殘り物を目標とせねばならぬ。誰が始めるかを決定する爲によく知られた一通の儀式を行ふ。二人の兒童が互に自分の爪先に踵をつけて一足一足相互に歩みより、會つた時、相手の足の拇指の上に自分の足が踏むやうになつたものがまづ始める權利を持つことになる。或は全く意味のない、韻のある何かの言葉、または時にはたゞ綴音に過ぎないものを誦ずるが、各シラブルは各遊戲者に相當し、最後のシラブルの當つた者が開始の特權を得る。これ等通常行はれてゐる方法の外にマルブル遊びに特有なやり方がある。卽ち、各人はコシュの方向に、又はその爲に特に描かれた線の方に各自のマルブルを投げ、線の此方側でしかも線に一番近い所に投げたものが特權を得る。その他のものは、その者のマルブルの線への近さの順番で投げる。最後に投げるべきものはコシュを越したもので、もし二人以上コシュを越すものがあつたら、最も遠く越した者が最後になる。

遊戲者の順番がかくして決められると、勝負が始まる。各遊戲者は次々にコシュの後に立つて方形に向つて投げる。マルブルを投げるのに三種の方法がある。「ピケット」(Piquette 發射)とは親指を槊子としてマルブルを投げるもので、マルブルは親指の爪の上に載せられ人指々で抑へられる。「ルレット」(Roulette 毬戲)とは地上を單純にマルブルを轉がすことで、「プセット」(Poussette しやがんで轉がす)とは始めの方向を正すに十分な距

離だけ手で轉してゆくのである。「プセット」は常に禁止され、この點に於て撞球に於ける不正な遊戯者の「クタージュ」にも比せられ得るものである。それ故ヌーシャテルでは「ファン・プセット」又は「ファンム・プセット」といひ、ジュネーヴではより簡單に「引摺ることは禁止だ」といふ。「ルレット」も亦禁止されてゐるが、「ファン・ルレット」が許されることもある。この場合にはすべての遊戯者は勿論、これを行ふ權利を有ち、遊戯の始めに當つて法の前に各自の絶對平等が決議される。

そこで遊戯者は決定された方法に從つて投げることゝなる。方形の中に置かれたマルブルの一つに當つたとする。もしもそれが方形から出たならば、それは跳ね出した遊戯者の所有物となる。もしもそれが圍ひの中に止つてゐるならば、それを取ることが出來ない。もしもそれが線上に止つたならば、遊戯者一同が評議する。半分外に食み出たマルブルは逸出したと考へられ、半分以下ならばさうでない。こゝでは勿論、附則の全般に照して疑義が處置されることになる。遊戯者が投げたマルブル(「アゴ」その他)が方形内に留つてゐるか、少くともその半徑の半分も線を越えない場合があるが、その時にはその所有者は「キュイ」(Cuit)される、即ち彼はもはや遊戯することが出來ない。もしこのマルブルによつて方形外に跳ね出されたならば、それは、勝負のはじめに當つて一般に規定された特別な約束のない限り、他のマルブルと同じく、跳ね出した者の所有物となる。最後に跳ね返るマルブルに依つて起る樣々な錯綜した場合がある。跳ね返つて追出されたマルブルは時として獲得されるものとは見做されない。勿論、値段の高いマルブルの場合はなほさらである。その他の場合には、圍ひから逸出したマルブルはすべて投げ飛ばした者の所有となる。かくして起る諸種の特殊な問題は、仲間の會議により、勝負の前或は勝負中確立された原則に照して解決される。

次に各人が「投げる」回數についての問題が起る。一個或は數個のマルブルの獲得に成功した者はもう一回行

ふ權利を有ち、かくして彼が成功し續ければそれだけ續いてゆく。しかし、時々次のやうな保留がある。例へば、各勝負の第一回目には、各人はその成功と失敗とを問はず、次々に一回づゝだけ投げるのであるが、これもまた前以ての約束如何に依るのである。

その上、次のやうな本質的規則がある。卽ち、各人は單に方形內のマルブルに「ティレ」するばかりでなく、遊戯中圏の外に出て仕舞つたアガトとかコルナを「タネ」する權利を持つてゐる。そして勿論、仲間の手に屆かぬやうに方形を目がけて投げると云ふことは仲々難かしい。それ故、もしも相手が豫めそれと悟つて、「ファン・クー・パス」(fan-coup-passe) と言はぬ限り、非常な危險を冒す場合には、「クー・パス」(coup-passe) と言つて自分の場所に留まつてゐることの許されてあるのはこれがためである。また方形から同距離に位し、豫め「私のもの」と言ふ限り(この時も相手がそれを見すかして「あなたのもの」と言はぬ限り)自分の位置を變へることが許されてゐるのもこれが爲である。

註　「クー・パス」とは相手が位置を變へるまで休止する場合をいふ。

最後に、我々は町や學校によつてその適用を異にする一連の特殊な規則を擧げておく必要がある。一番目の遊戯者が「プラース・プール・モア」(place-pour-moi) と言つたら、彼は方形の一隅に位置する戰務を免れる。自分の「ポーズ」に等しいだけを(もし彼が方形內に二個のマルブルを置いたら二個)獲得するのに成功した者が「クー・ド・ポーズ」(queue-de-pose) と言ふことが出來る。さうすれば、彼は次の勝負を一番先に始めることを許される、等。

かくの如く無數の規則によつて規定されてゐるこの遊戯は、方形が空になるまで續けられる。一番多くマルブルを手に入れた者が優勝者である。

編輯後記

近來、日大生殺しや、年長婦人と青年との戀愛事件や情死問題など瀕發しますので、また映畫などにもから云ふテーマが青年の興味を牽いてをりますやうなので取上げて特輯して見ました。母性を無暗に美しいもの、妖婦性を無暗に邪惡なものと考へるやうな觀念論的形式觀が一層多くの不幸を生んでゐるやうに我々には思はれます。その意味に於いて世の敎育家や父兄たちにも是非讀んで貰ひたいものであります。

×

本號の新執筆者は菊川茂樹氏だけであります。同氏は日本大學醫科在學中でありますが、こゝには雅名を用ゐられました。

×

大槻氏は『社會圓滿生活法』と『精神分析讀本』二著を相繼いで上梓せられました上に、『概論』も新たに第四版が出ることになり、約二ケ月の內に三冊の著書を世に送られ、その上また本誌本號の編輯に大童になつてゐられて、只今少し疲れたと云つてゐられますので『戀愛性慾の心理とその分析處置法』の發行がまた少し遲れますが、どうかあしからず。必ず出る事は間違ひがありません。併しあとになるほど內容は愈々整備して來るやうであります。『社會圓滿』、『讀本』ともに好評のやうであります。

×

平塚義角氏は久しく本誌上に連續譯出せられた『ドストイェフスキーの精神分析』を近日纏めて上梓せられることになりました。單行本となるに就いて、從來未發表の興味ある部分も附加せられる由であります。その出現の日こそ待遠しき限りであります。

×

本號には長崎、高橋、北山、土屋、倉橋、奧本などの新進の分析者が活躍して誠に華やかな光景であります。飜譯にも今度の號は多くの頁を割きました。竹田氏のピアジェは取りあへず第一章だけは完全に本誌上で紹介いたします。

昭和十一年二月二十五日印刷
昭和十一年三月　一日發行
（隔月刊）定價五十錢（郵稅四錢）

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅四錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割増に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館　北隆館・(大阪)福音社

研究所事業案内

一、分　析　部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〲適當の人々にふり向ける。

三、敎　育　部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出　版　部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研　究　會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講　習　會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

次號內容豫告

夢・幻覺・空想の研究

夢は無意識への大道である。精神分析學のアルファでありオメガである。斯學への入門はまづ夢の自己分析から始めなければならないが、併し夢は分析の進むに從つて益々むづかしくなつて來ます。久しぶりの夢研究でありますが、今度は幻覺、錯覺、空想、妄想などゝの關係に及びたいと思ひます。同じく無意識の共通現象でありますから……。

フロイド先生
額面用肖像頒布

昭和八年春にフロイド喜壽祝祭劇を當研究所が公演しました際に、フロイド博士から本研究所に寄贈せられました大肖像畫を縮寫して、讀者諸賢にお頒ちします。その鋭い眼光と、高邁な額と、力强い鼻梁とに於いて、よく碩學の性格とその學風とが象徵されてゐます。

品　種――寫眞（シュムツァー原作畫。立派なものであることを信じて下さい。）

用　紙――上質寫眞用紙

大きさ――縱九寸五分、橫七寸五分

代　價――一圓五十錢（送料共）但し特別誌友には一割引いたします。

注　意――額に入れる際、裏面に新聞紙を挿入しますと印刷インキがしみて黃色くなります、御注意下さい。

學問の世界性とエスペラント

學問は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。

☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。

☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……**言語**の問題である。ヨーロッパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。

☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の襟度として、堪へ得るとしても、外國語の習得に、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。

☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に『學習に容易な……**國際**共通語エスペラントを學說發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。

エスペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロッパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。

☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……**學者**は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。

☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本鄕元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

大島萬世戯曲集

四六判 四百頁
定價 一圓五十錢

内容

- 蠅（一幕）
- 吹くな木枯（一幕）
- やもめ（一幕）
- 子守唄（一幕）
- 田植どき（一幕）
- 密航者（三場）
- 田崎草雲（五幕）
- 高田屋嘉兵衛（四場）
- 渡良瀬川の義人（四幕）

―序―

演劇は都會藝術として成立つてゐるものには相違ないが、演劇の題材は必ずしも都會的なものに限らない事は、例へば愛蘭土劇が、土の匂ひ、果實の香氣に包まれつゝ世界的の高い藝術のレヴエルに達してゐるのに見ても知られる。此戯曲集中の所謂農民物「吹くな木枯」「田植どき」「やもめ」その他に現れたる作者の觀察、技巧、情調は、勿論愛蘭土劇のそれとは異つて、一層現實的、批判的、乃至反抗的氣分の醞釀されたものが、その一特色となつてゐるが、農民の間に育ち、農民の生活を身近く體驗しつゝ成長して來た此の作者に「生え拔き」の力强さ、根强さが、ひしひしと感ぜられる。それは一種ユニークなものと云へる。

史傳的な戯曲「田崎草雲」「渡良瀬川の義人」等にも勿論、此の作者の特色は自ら生彩を放つてゐる。全體的に見れば、戯曲的實質は豊かであるが、技巧方面に於て艶消しに過ぎる點もないではない。

しかし技巧は練磨と工夫とを積めば贏ち得られる。重んずべきはその實質的なものである作者大島君がその實質的なものを愈々自ら重んずる事を知ると同時に、更にその技巧をのびやかに展開せしめる事を力めて、華實共に完からん日の近き將來は、最も期待さるべきものである。――（昭和十年の秋）――

中村吉藏

東京市豊島區西巣鴨二丁目一九六九
演劇研究社
振替東京七〇四九九

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和十年・]廿五日印刷納本
昭和十一年三月一日發行
隔月一回一日發行
精神分析
三・四月號

IV. Jahrgang, Heft 2, März-April, 1936. Erscheint zweimonatlich

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Mutterschaft)

Inhalt

Studien

Literarisches Werk

Kritik und Methodik

Varia

Vortrag

Neuigkeiten des In-und Auslandes

Anhang

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.

定價金五十錢
郵稅四錢